悠 遊

第二十七号

企業ＯＢペンクラブ

ペン フォト句 ①

温暖化
みな長靴で
カーニバル

池田　隆

達者でな
蛙になって
また会おう

長尾　進一郎

赤字線
地元の期待
背に受けて

大月　和彦

悠遊

第二十七号

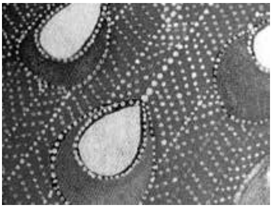
企業ＯＢペンクラブ

表紙の絵「点描のバティック　孔雀」

木村　敏美

夫の海外転勤でマレーシアに行った時、この国の民族衣装に使われるバティックという伝統的な染物を見て、心惹かれ学んだ。日本でも「ジャワ更紗」として室町時代に伝わっている。

布に絵を下書きし、溶かした蝋をチャンティンという小さな器具に入れて下絵の上に落とし線を残すのだが、この孔雀の絵は点描にした。無数の点と点がくっつかないようにするのが難しかったが、色をつけて仕上げるとファンタジックな感じになり、初めて経験した東南アジアという常夏の国での生活が思い出される。



目次

▽巻頭言……斉藤 征雄 4

＝エッセイ＝

▽Ｆｉｎｅ Ｃｉｔｙ案内……吉田 眞人 6
▽ボケ防止の大ボラ噺……山縣 正靖 8
▽老ラガーマン逝く……矢澤 正二 10
▽カトマンズのイーグルス……八木 信男 12
▽令和元年を振り返る……森田 晃司 14
▽折り紙ボランティアあれこれ……松谷 隆 16
▽私のテニス生活……松田 昌康 18
▽ボーナストラックに載って行こう……細谷 博 20
▽「十三詣り」の思い出……藤原 道夫 22
▽水辺によせる想い……福本多佳子 24
▽ハインリッヒの法則……廣澤 重穂 26
▽ミュンヘンのビール祭り……平尾 富男 28
▽王昭君……原田 信 30
▽研究考察―ホトトギス俳句に深層心理を見る……浜口須美子 32
▽「保守」それとも「革新」……野瀬 隆平 34
▽渋沢栄一と昭和以降の政財界のリーダー……野上 浩三 36
▽冬の旅――奈良から近江へ……新田由紀子 38
▽ジャパン ＡＳ ＯＮＥ ＴＥＡＭ……西川 武彦 40
▽「ビオトープ」への憧れ……長尾進一郎 42
▽山登りの記憶……中村 晃也 44
▽グッドバイ、昭和・平成そしてＡＩ……富岡喜久雄 46
▽アンダンテ・カンタービレ……塚田 實 48
▽加藤九祚（きゅうぞう）先生の出版記念パーティに臨む……田原 敬 50
▽首里城と『おもろさうし』……田中みづえ 52
▽５Ｇ考察……杉浦 右藏 54
▽私とラグビー……下山 健夫 56
▽令和元年のフットボール……志村 良知 58
▽次は『ふるさと留学』を！……清水 勝 60
▽羅門の独り言……三 春 62
▽中国はどこに向かうのか……児玉 寛嗣 64
▽豪雨後の朝倉と農業……木村 敏美 66
▽先人の知恵を……川村 邦生 68
▽変わりゆく街渋谷……川口ひろ子 70
▽世間の常識に取り残されて……大野 昰 72
▽デッキチェアトラベラー……大森 海太 74
▽石上露子と杉田久女……大平 忠 76
▽渋沢栄一と労働問題……大月 和彦 78
▽生きる事と食べる事……大津 隆文 80

▽縄文文化の新しい知見……………………大越　浩平　82
▽私の履歴書……………………………………大泉　　潤　84
▽ハイカイクラブ………………………………内田　満夫　86
▽戦災で焼失した生家と疎開の思い出………上原　利夫　88
▽縁………………………………………………上田　信隆　90
▽大国の傲慢……………………………………稲宮　健一　92
▽健康問題………………………………………市川　忠夫　94
▽「海の都」ヴェネツィア随想・探訪記……池田　　隆　96
▽英国、あの頃…………………………………安藤　晃二　98
▽出会いと別れ…………………………………新井　良侑　100
▽ヨハネ23世……………………………………松浦　俊博　102
▽日本人の感性…………………………………首藤　静夫　104
▽変わり者………………………………………斉藤　征雄　106
▽デルポイの格言――鳥海 博さん追悼――…大平　　忠　108

＝創作短編＝

▽日はメナムに沈む……………………………浜田　道雄　110
▽宦官李斎・私の恋した貴人…………………内藤真理子　115
▽「たたら」の郷………………………………大塚　喜子　119
▽線路はつづく…………………………………馬場真寿美　124
▽濱田優さんを偲んで…………………………西川　武彦　130

＝活動報告＝

▽『掌編小説勉強会』の著者から一言…………132
▽「何でも書こう会」活動報告…………………134
▽サロン２１ 活動報告…………………………135
▽ペン俳句のこの一年　佳句鑑賞………………136
▽二〇一九年「ペン川柳」勉強会の成果………141
▽ペン・フォト句会………………………………145
▽英語を読もう会 二〇一九年の活動報告……146
▽「何でも読もう会」はリフレッシュの会……147
▽ホームページ関連………………………………148
▽クラブ活動を振り返って………………………149
▽会員名簿…………………………………………152
▽編集後記…………………………………………154

表紙の絵　木村　敏美
カット　安藤　晃二　木村　敏美　首藤　静夫
塚田　實　野瀬　隆平　福本多佳子
八木　信男　矢澤　正二
（五十音順）

巻頭言

私たちは新しい「お仲間」をお待ちしています

会長　斉藤　征雄

企業ＯＢペンクラブは昨年創立三十周年を迎えました。それを機にさらなる活性化を目指し気持ちを新たにして活動に取り組んでいます。

当クラブの活動は、エッセイ、掌編小説、俳句、川柳、フォト句、写真などの創作から、文芸作品を読む会、英語文献を読む会、時事問題を議論する会まで非常に多彩です。会員はそれぞれ自分の好きな分野で活動を楽しみます（複数の分野も可）。

それらの活動に加えて、時々の飲み会やカラオケなどのインフォーマルな会合、あるいは合宿旅行なども行っており、会員相互が交流し、親睦するのも重要な目的になっています。

皆さま方はそれぞれ、これまでの人生の中で多くの出会いを経験され、そして豊かな人間関係を構築してこられたことでしょう。

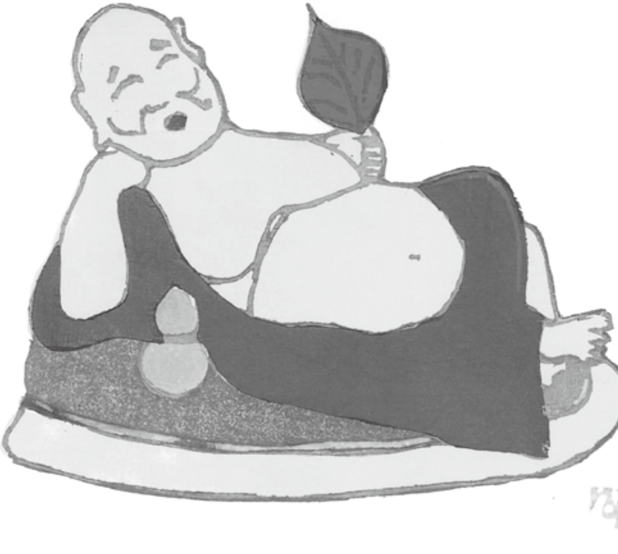
その上に、第二の人生で新たな出会いが生まれ、新たな人間関係がプラスされるとしたらこれほど素晴らしいことはありません。当クラブには多士済々の人たちが集まっていますので、新たな出会いが生まれる場として最適なサロンです。

出会いには、きっかけとタイミングが大切です。「啐啄同時（そったくどうじ）」という言葉があります。雛が卵の殻を破って生まれるとき、同時に親鳥が外から殻をつついて助けるといわれます。

出会いのタイミングは早すぎても遅すぎてもいけません。

皆さまが、この小誌『悠遊』を手に取られて、私たちの活動にほんの少しでも「おもしろいな」と感じられたならば、時節到来「今」なのです。躊躇することなく見学に来てください。私たちはいつでも新しい「お仲間」をお待ちしています。

エ ッ セ イ



版画　八木　信男

Ｆｉｎｅ Ｃｉｔｙ案内

吉田　眞人

シンガポールのニックネームはＦｉｎｅ Ｃｉｔｙである。英語のＦｉｎｅには二つの意味があり、一つは「きれいな」という形容詞、もう一つは「罰金」という名詞で、Ｆｉｎｅ Ｃｉｔｙは掛詞である。

街を歩いていてもゴミが落ちていない。きれいだ。煙草の吸い殻やチューイングガムの食べ滓が捨てられていることもない。これは、シンガポール市民（75％が中国系）のマナーが良いからというより、厳しい罰則があり、これを守らないと大変なことになる、と市民が知っているからだ。実際に様々な行為に罰金が科せられる。

（以下の＄はシンガポール＄、１＄は約80円）

ガムの持ち込み　１万＄（＝80万円）、
野鳥のエサやり　１千＄（＝８万円）、
ゴミのポイ捨て　１千＄（＝８万円）、
同ポイ捨て再犯　２千＄に加え清掃奉仕、
ツバや痰を吐く　１千＄（＝８万円）。
尚、麻薬の持ち込みは死刑なのでご用心。

又、治安も良い。夜の一人歩きも概ね問題ない。どこの街でも不心得者はいるものだが、ここでは警察権が圧倒的に強い。警察は裁判所の令状なしに、疑わしき者を逮捕できるし家宅捜査もできる。子供への虐待が疑われたりしたら、直ちに警察に踏み込まれる。

政治的自由は大幅に制限されている。旧宗主国の英国に倣ってスピーカーズコーナーを２０００年に開設したが、そこで野党が政府批判演説をしたところ忽ち実質的に閉鎖された。国会議事堂も英国に倣い、与野党が両サイドに対面し論争する構造になっているが、野党議員がごく少ししかいないので、両サイドとも与党議員席になっているのはご愛嬌。

国父とも言われるリ・クアンユーは「大衆を統治するのにはムチが重要だが、それだけでは駄目でアメも必要だ」ということを良く理解していた。アメの例としては公娼制及び公営ギャンブル（競馬）があげられる。

「公娼街」はゲイラン地区にある。興味のある方は、グーグルを「ゲイラン探訪」で参照すると、様々な訪問記を見ることが出来る。尚、ゲイラン通りは季節になるとドリアンの屋台が出るのでも有名。

「競馬」の歴史は古く19世紀半ばに遡る。現在はマレーシア国境近くのクランジ競馬場でほぼ毎週2回開催され、ギャンブル好きの中国系市民で賑わっている。馬産地がないので、走るサラブレッド全馬が騸馬である。外国人は20$を払えば、貴賓席ハイビスカスルームで、冷房の効いた部屋からゆったりと観戦出来る。

尚、公認ギャンブルとして、2005年にカジノも加わった。

シンガポールはほぼ赤道直下にあるので四季はなく、乾期と雨期の区別もはっきりしない。一年中同じ花が咲き、一年中夏時間で、太陽は朝7時に昇り夕方7時に沈む。Monotonousと言われる所以である。

英国人が建設を始めて200年足らずで、歴史遺産も殆ど無いが、訪問の機会があれば是非次の2カ所は外さないで欲しい。

▽日本人墓地

インド人街の北5km程の閑静な住宅街にある。東南アジア最大の日本人墓地で、1891年に建設された。

900を超える墓標は、軍属や商人のものもあるが、圧倒的多数が「からゆきさん」のものである。1910年代の当地に千人ほどいた日本人のうち、殆どが彼女達であった。その中には故郷に帰ることなく、当地で終焉を迎えた者も少なくなく、今、その彼女たちの墓標が、南国の太陽に照らされている。合掌。

この墓地はシンガポール日本人会が管理、日本人学校の生徒が定期的に清掃している。

▽シロソ砦戦争博物館（セントーサ島）

第二次大戦初頭に英国軍が使用していた要塞跡を利用して作った博物館。

英国軍の装備や日本軍占領下の「昭南島」の資料を多数展示。山下将軍とパーシバル将軍の降伏会談（1942年）や日本軍降伏文書調印式（1945年）が、英国譲りの蝋人形で展示されている。

ボケ防止の大ボラ噺

山縣　正靖

令和元年は私にとってはボケ元年であった。

というのは満八十一歳を迎え昭和、平成、令和の三代を生き延びたのは我ながらお目出たいのであるが、予て八十歳を過ぎると体のあちこちにガタが来るし、ボケが始まると云われていたのである。自分に限ってそんな事はないよと思っていたが甘かった。ボケがでてご迷惑をかけるわ、両膝が痛むわ、まさにボケ元年とはなりにけりであった。

このままいくと、あちこち痛いから外に出るのが億劫になるし、引きこもるとますますボケてくる。それはイヤだよと、令和元年をボケ防止元年と一念発起したわけである。

まず手始めに、傷んだ身体のケアは思った以上に手間とインテリジェンスが必要になる。ボケ防止にもってこいで、一石二鳥である。

次に、我々の楽しみは、絵描き、物書き、歌唄い、海彦・山彦、ヒカルの源氏　といったところであるがこれらの趣味も同じ事を繰り返しているとボケになる。一歩前進、常に上達を求めるほうが良いとある。

絵描きでは小生はセンスが無いので抽象画はやったことがない。この際　挑戦しよう。

物書きは小生、文才が無いので経済学、それも経済予測と景気循環予測に特化していたのだが、最近は中国が帝国主義になって攻めてくる、トランプさんが勝手に関税引上げ合戦をやらかすなど、かっての地政学的な騒動が我国に深刻な影響を及ぼし始めた。

そこで小生は経済予測に地政学の予測をドッキングさせた「地経学」の予測システムを試作してやろうと思い立った。地経学のネタはサロン２１や『悠遊』から豊富に提供していただいている。

歌唄いは川柳。短いから小生もできるだろうと思ったのが大間違いで、短いものほどセンスが要る。小生は互選の票からも見放されているので今度はＡＩ川柳に挑戦してやろう。川柳に特有のおかしみや落ちもＡＩで作っ

てやろうと励むつもりである。

海彦とは海、水上のスポーツのことで小生の場合は川釣り、それも鯉釣りである。今はパンで釣っているが今度はフライで鯉をだまして釣ってやろう。それも上流にいる黄金の鯉を釣ろうと目標をたてたのである。

山彦、これは陸上のスポーツで、小生は月一ゴルファーであるが、まさに一念発起して８８歳にエージシューターになってやると願を立てたのである。

以上　いずれも大ボラに近い代物であるが、大ボラにはそれなりの効用がある。大ボラを公言しておくと皆様から　あれ　どうなったの？　とからかわれるので気を取り直して大ボラ実現に励むことになる。

そんなに幾つもホラを吹いて大丈夫？と言われるがそれが全然大丈夫なのである。一つのことに挑戦しているといずれ飽きるか行き詰ることがある。その時は一旦休んで、次のことに挑戦すれば良い。それも飽きたら別のことをやれば良い。休んでいる間もいろいろ次の手を考えるものであって、次の挑戦の番になったら次の手を試せば良い。

以上　ボケ防止の大ボラ噺をご披露申し上げたが、いずれはどなたも直面される事ではある。老爺心ながら真面目一方はほどほどにされて、人生百歳を楽しめるように大ボラでも大風呂敷でもお聞かせ頂きたい。

筆者の作品

老ラガーマン逝く

矢澤　正二

日本中を熱狂の渦に巻き込んだラグビーW杯日本大会。日本がスコットランドに勝ち、初のベストエイト進出を決めた日の翌日、令和元年十月十六日の朝、老ラガーマンは九十八才でその生涯を終えた。

スコットランド戦に勝利したときは喜んで、「日本も強くなったね」と満足そうな表情だった。その顔は安らかであったという。三か月ほど前から入院していたが、W杯を家でテレビ観戦したいと、たっての希望で一時退院していた。

スコットランド戦の翌日に永眠したことは偶然でもあり奇跡のようでもあった。ここに私の知り得たことを記しておくことにした。

その老ラガーマンは私の叔父であり母の弟である。

叔父は高校時代ラグビーに熱中のあまり一年留年し、それが校内外で評判となり女学校にいた母はずいぶん恥ずかしい思いをしたという。

昭和十八年二月、学生の兵役免除の特例が廃止され成人の学生は召集されることとなった。

当時の戦局の状況に鑑み、学生の対外試合は全面禁止との通達が国の意向を受けラグビー協会から出た。しかし、戦地に行く前に最後のラグビーをと、伝統のK大戦だけは何としても実施したいとの熱い思いから、困難を乗り越え決行された。これは、NHKの「キミに最後の別れを　ラグビーの青春」でドラマ化された。

明治神宮競技場で出陣学徒の壮行会が行われたが、国主催の壮行会には出席せず、その時仲間と水盃を交わし、飲み騒いでいたそうである。これは国主催の行事より仲間との最後の別れを惜しんだのだろう。

学徒動員では体格がよいので特攻隊に配属された。終戦間際、基地から片道だけの燃料を積み出撃したが、目指す敵とは遭遇せず、こんなところで死んでたまるかと

の思いで引き返した。このとき動員されたラグビー仲間は、全員が無事生還した。

戦争が終わり復学しようと大学へ行ったところ「貴方はすでに一年前に卒業しています」とのことであった。よって大学ではラグビー部のキャプテンをしたが、授業はほとんど受けていないそうだ。

大学卒業後会社勤めをしていたが、ある日ラグビー仲間がきて「またラグビーをやらないか、ラグビー部を作るのでまとめて採用する会社がある」とのこと、即応じることにした。そこで社会人ラグビーで活躍することとなった。再び仲間とラグビーが出来る喜びでいっぱいであったろう。

Mデパートの有名な超ワンマン社長O氏と仕事のことで言い合いとなったが、その後O氏が常軌を逸した行動をとるようになり、叔父などが中心となりO氏追い落としを図った。これは同じ思いの仲間とスクラムを組んで強敵にあたるというラグビー精神であろう。

叔父の功績の一つがテレビコマーシャルでアラン・ドロンを起用したことである。スーツやトレンチコートを粋に着こなし、フランス語でつぶやくダンディな姿が一世を風靡した。アラン・ドロンが日本に来たときは、叔父のところに電話があり一緒に夜の銀座を楽しんだという。

なお、巷間伝えられているようなスキャンダラスな人ではなく、とても紳士的な人だったと聞いた。

叔父の奥さんは、これまた学生時代のラグビー仲間の妹さんであり、叔父はここで人生最大のトライをした。晩年はいつも叔母と手を取り合って歩いていた。家にはいつも叔母の手料理に人が集まっていた。

こうして、仕事と仲間を大切にし、家庭とラグビーをこよなく愛し続けた老ラガーマンの人生はここでノーサイド。その生涯は常にフェアプレー、正にラグビー精神そのものであった。叔母、息子、孫、曾孫たちに見守られて静かに幕を閉じた。なんと幸せな人生だろう。

カトマンズのイーグルス

八木　信男

二か月にわたるトレッキングを終え、カトマンズに戻ってきた。日焼けした私を見てホテルの支配人はToday No job! と叫んだ。どうやら私はシェルパと間違われたみたいだ。

１９８０年、大学六年目の私と五年目の後輩はネパールのロールワリン地方にある５９３０ｍの山に登った。チベットとの国境にあるこの地方には、もちろんテレビも電気もない。登山は終わったが、相棒の体調が思わしくないので麓の村に10日ほど滞在した。その間、朝起きてから対岸の雪山を眺め、春の雪崩の音を聞きながら昼寝をし、夕刻にはテントに戻り、ロウソクの灯りの中、シェルパと世間話をする日々を過ごしていた。テントには毎晩来客があり、時にはラマ僧がチョコレートを売りに訪れるなど妙な体験をしたものだ。牛飼いの家で出される食事は、すべてジャガイモでつくられた。蒸かしたり、炒めたり、時には麺まで登場した。

トイレはないので野原で用を足すのだが、相棒が知らずに芋畑でやってしまった。それを見た地元の娘たちが笑いながら騒ぎだした。シェルパを通じて謝ったら、「すごく立派な芋ができると思うから日本に送ってあげる」という気の利いた返事が娘たちから返ってきた。それ以来、言葉は通じないが、娘たちは私が持っているテープレコーダーを目当てに近づいてきた。自分の歌が録音され、それをもう一度聴くことができる不思議な箱なのだ。

ある夜、テントに長い髭の老人が現れた。どこから来たのだろう。日本のことを知っているというのでチャンという地酒を酌み交わし、日本の最近の話を教えてあげ、我々も国境に近い山の名を知りたかったので、スケッチをしたものを見せて近くに見える山の名前を教えてもらった。

相棒の体調も戻ったので、村を出発しようという日、一人のアメリカ人がやってきた。これから向かう先には五０００ｍの峠があり、ザイル（登山用ロープ）がない

と越えることができないので、連れて行ってほしいというのだ。我々はすでに一人のラマ僧を峠の向こうにある寺へ連れていく約束をしていたので日ネ米の国際的な珍道中が始まった。氷河地形の峠には急ながけがあり、一人一人をザイルで釣り上げる箇所があったが、三蔵法師と同じような赤い服装のラマ僧がひゅうっと吊り上げられる場面には笑ってしまった。四日ほどで峠を越え、無事となりの村に着き、この国際隊は解散となった。

　ナムチェバザールというエベレストの麓にあるにぎやかな街に着き、コテージに泊まることができたのだが、ここで生まれて初めて蚤の洗礼をうけ、飛び上がるほどの痛みを経験した。そして、丘を少し上がると日本人が経営するホテル「エベレストビュー」があり、コーヒーを飲みながらエベレストを眺める贅沢な時間を過ごすことができたのはラッキーであった。

　その後、エベレスト街道と呼ばれる道を歩き、ルクラという空港のある街に着いた。ここは世界で一番危険な空港ということで知られている。いまは舗装された滑走路があるが、我々が訪れた時は砂利だった。気流の関係で、飛行機がやってきても着陸できないことがあり、そういう日は搭乗を待つ者たちのため息に送られてUターンして戻っていくのだ。

　相棒を見送り、私が乗れたのは3日後だった。その間、茶店で中年の日本人らしき男性を見つけたので話かけてみた。日本人ですか?という問いかけに彼は、はいと寡黙に答えた。そして下手な英語でティーをツーねと注文した。その後、シェルパに、「あなたは植村直己を知らないのか」と呆れられた。植村直己さんの顔はふつうのおじさんだからわかるはずがなかった。

　カトマンズに戻ると、不自由なく何でも購入でき、イタリア料理店や茶店を訪れ、長い間の禁欲的な食生活から解放された。喫茶店のようなオープンテラスの店でビールを飲んでいるとき、聴いたことがある音楽が流れだした。イーグルスのI can't tell you why だった。長い山旅の成功に満足していた私は、大学をやめてミュージシャンになるのもいいなとカトマンズの5月の青い空を眺めていた。

令和元年を振り返る

森田　晃司

大きな節目の年だった令和元年が暮れました。

国内では、残念なニュースの多い年でした。実質的な移民法といわれる「出入国管理法」の昨年末の改正に続いて、アイヌ新法、ＩＲ法も成立し、日本を分断しかねない種が蒔かれてしまいました。

日本人の中に完全に溶け込んでいるアイヌの人々を、わざわざ異民族として法的根拠を与えたアイヌ新法は、日本に混乱をもたらそうとする勢力の拠り所となりかねません。

ＩＲ法は、マカオのカジノ業者などに利用され、マネーロンダリングの巣窟とされかねません。更に、ＩＲ関連施設を利用しての中国人の大量移住計画も取りざたされています。外国人に静かに侵略されつつありますが、日本人の多くが国土の保全に関心が薄いのは気がかりです。しかし、年末になってＩＲ関連の汚職容疑で、六名の国会議員の逮捕と事情聴取が報じられました。この捜査が、大量に流れ込んでいる黒いチャイナマネーの実態を暴くきっかけとなり、日本人の覚醒に繋がってほしいものです。

経済の停滞が続いています。世界で占めるＧＤＰ比率は、この三十年で約十五％から五％以下にまで低下してしまいました。実質賃金も下がり続け、結婚できない若者が急増、少子化の大きな要因となっています。デフレに追い打ちをかける消費増税も実施され、景気の更なる停滞が懸念されます。何故、日本だけに経済停滞が続くのか、緊縮財政を続けることは善なのか、しっかり見直して国民の貧困化を防ぐ政策を推進してもらいたいものです。

懸念材料が山積する中で、ハヤブサ２の快挙やラグビーワールドカップの盛り上がりもありました。

そして、なんといっても新天皇が即位された特別の年です。大嘗祭を締めとする一連の古式ゆかしい行事も滞りなく行われて、ご即位を内外に宣言できました。令和

という素晴らしい新元号の下で、心機一転するとともに伝統を重んじつつ、国民一丸となって、力強い日本の復活を目指したいものです。

世界では、米中の対決が鮮明となり、米英を中心にした中国包囲網の形成が進んでいます。中国共産党の独裁による国家資本主義が、従来の資本主義社会の秩序の破壊者となり、また、米国の覇権を脅かす存在ともなり、米国は、従来の中国支援政策から決別し、封じ込めへと舵を切っています。

更には、香港やウイグルなどでの人権の圧迫や異民族虐待の実態が隠しおおせなくなってきています。米国では、共和、民主両党の圧倒的な支持により、「香港人権・民主主義法案」、「ウイグル人権法案」が相次いで成立しています。

米中の対決は、貿易戦争に止まらず、人権弾圧に直結する共産党独裁の政治体制打破に向かっており、日本も曖昧な態度に終始することは許されなくなっています。

英国では、EU離脱の是非を争点とした総選挙が行われ、保守党が大勝し、EU脱退が確実な情勢になっています。当面の経済的不利益は免れ得なくとも、英国民は国家の自主性と誇りを重んじて名誉ある選択をいたしました。グローバリズム一辺倒だった潮流が、移民・難民が引き起こす混乱を契機にお膝元の欧米で反転し、ナショナリズムに回帰する動きが鮮明になっています。

一方、世間を騒がしてきた地球温暖化説も怪しくなってきました。スウェーデンの少女が、国連で温暖化阻止を絶叫したとマスコミが一斉に報じています。こうした手法は、温暖化阻止を進めるIPCC（気候変動に関する国際間パネル）が、もはや科学的論拠を示せなくなった何よりの証左です。

カナダでの裁判では、CO_2悪玉説の理論的支柱になっていたマン博士が、自説の証拠となる原データを提示できずに敗訴しています。米国はパリ協定からの脱退を国連に通告しました。二〇一九年は、地球温暖化説の終わりの始まった年として記憶されることになるのかもしれません。

折り紙ボランティアあれこれ

松谷　隆

八年前から折り紙ボランティア（以下折りボラ）を始めた。経緯や活動状況は、八百字文学館に掲載の『ボランティア活動再開』、悠遊二十周年記念号への『折りボラ一年生』に記載のとおり、地域のケアプラザ（以下CP）が開催した「折りボラ養成講座」（以下養成講座）に参加したことが動機のひとつであった。

昨年六月、昔CPで世話になった職員から「折りボラ活動経験」の講演の要望を受けた。職員の勤務先、区役所の区民活動支援センター（以下センター）が二ヶ月後に計画中の「四日間の養成講座」の三日目に約二時間。当方としても、八年間のボランティア活動を振り返るよい機会であるので快諾した。

しかし、参加者の経歴や折り紙経験の有無など不明のまま、講演の概要を折り紙の指導者の立場から作成した講演資料を職員に送付した。

数日後、職員からリーダーの要望として、拙案に大幅な筆が入った資料が返信された。精読するともっともな事項ばかりだ。即ち、受講者が知りたい、知っている方がよいだろうということばかりで、目からうろこ。

また、当日折り紙作品の展示と実習をも要望された。

この要望に添い資料を修正し、講演の十日前に打ち合わせ。その場で、受講者の略歴を聞くことができた。

合計十八名で四グループ、最高齢者は七十歳を超え、折り紙歴は零～数十年の方々で、ボランティア歴も零～十年以上でバラバラと分かった。

実技は、一般財団法人日本折紙協会の折り紙講師認定取得者が三回、合計三日間担当するとのこと。

講演内容は、（一）折りボラを志願した理由、（二）グループで活動する理由、（三）活動状況、（四）今後の課題の四点に絞った。

当日、受講者が定刻前には全員勢揃い。職員に紹介され、講義を始めた。受講者を見渡すと、なかには「なぜ男性が」といぶかっている人もちらほら。

「休憩時間に、並べた作品をご覧下さい。後半には二、三の作品を一緒に作りましょう」というとホッとした雰囲気に変わった。

ＰＤＦでの資料を表示しながらの講演の要点は

（一）折りボラになった最大の動機は、七十歳の誕生日祝いに、孫娘から伝承折り紙の「妹背山」（一枚の折り紙で二羽の鶴が繋がった作品）をもらい、大人も折れない鶴を小学三年生に折らせた高齢のボランティアの指導力に憧れたこと。

（二）養成講座で一番役立ったのはグループを結成し、区社会福祉協議会への登録で、助成金の給付を申請、受給でき、活動資金の心配が消えたこと。

（三）グループ名は「にこにこ会」、養成講座受講者八名で結成。ＣＰが障害者施設で毎月実施していた出張折り紙サロンを継承してスムーズな船出ができた。現在、この他に高齢者施設二個所でも活動中で、いずれも我々の価値を正当に評価してくれている。サービスの方法は参加者が最小の努力で折り紙を完成できるように準備している。このため長時間が必要で、毎月二回ＣＰ主催の折り紙サロンで折り紙技術の習得後、準備作業に追われている。

（四）平均年齢が七十五歳を超えた「にこにこ会」がいつまでサービスを提供できるかが最大の問題である。来期中に関係者と協議し対策を立てる予定。

実習は鶴の基本形から、「羽ばたく鶴」と「水呑み鳥」の動く作品にした。参加者のみなさんは嬉々として取り組み、初心者と自己紹介した方もわずかなヒントで作品ができ、大喜びだったのでホッとした。

助成金についての質問には、時間の都合もあり、センターが改めて資料提供を約束してくれた。

三ヵ月後センターの職員から、十三名のグループ結成、活動準備開始と聞いた。小生も少しは役に立てたかな。

私のテニス生活

松田　昌康

　テニス生活が始まったのは、三十五歳の時からである。その年の四月に多摩市の新築団地に引っ越したが、その団地から徒歩で約五分のところに4面のテニスコートが新設されていた。ある日帰宅すると、妻が「今日、テニスコートの横を通ったら、新しく結成する市民テニスクラブの会員を募集していたので、貴方の名で申し込んでおいた」と告げた。翌五月からクラブ結成の発起人のベテラン数人がコーチになって、毎週末の土、日曜日に初心者対象の球出し練習（コーチが、初心者の打ちやすいようなボールを出してくれる）が始まった。（ちなみに、4面のコートの内の1面を多摩市から年間を通して借用して、練習や試合に使用していた。）

　私はそれまでスポーツに一度も本格的に取り組んだことはなく、子供の時からひ弱な体質で、冬になると決まって一度は風邪で寝込むという有様だった。

　球出し練習は三年間続けられた。私営テニススクールなら多額の月謝が必要だが、クラブ会費だけでレッスンが受けられたので、初心者には大変有難いことだった。球出しの後は、ダブルスの試合になり、下手な私達もベテランと一緒の試合を楽しむことができた。腕を上げるには、上手い人と試合するのが一番有効で、有難かった。

　練習と試合をしに熱心にコートに通った。元々身体を動かすのが嫌いではなかった。始めてから二年ほどは、腕、背中や腰がよく痛くなった。運動の激しさに筋肉が対応できなかったのだ。ボレー（空中のボールを打ち返す）をした途端、背中が痛くなり、帰宅して寝ていたが、背中を揉むと治ると思い、妻に揉んでもらうと却って腰まで痛くなり、歩けなくなってしまった。痛いのを我慢してタクシーで病院に行き、筋弛緩剤を注射され、牽引（腰骨の所のベルトを重りで引張る）治療を受けた。それで何とか歩けるようになった。腰痛には何回もなった。湿布薬と痛み止めは常備していた。腕や足の筋肉に補強用の伸縮テープを貼ってプレーしたこともしばしば。

始めて三年を過ぎた頃から、気付いてみれば腰痛も筋肉痛も起こらなくなったし、風邪もほとんど引かなくなった。プレーの方も、自分のイメージ通りのプレーができる回数が増えたように思う。この頃から一段とテニスが面白くなった。三年経過し、ベテランの方達の球出しも終わりとなったが、個人的に私営テニススクールに通うようになった。数年後にはクラブの副会長になって、球出しをするようになった。多摩市の公式戦ダブルスにも何回かエントリーしたが、大抵は2回戦止まりだった。クラブ内男子ダブルスでは、優勝できたこともある。

十年が経った時、今の家に移ってきた。多摩市のクラブにはそのまま所属して、週末には車で一時間掛けてコートに行っていた。そういう生活が二十年程も続いた。その間、車での事故もあり、パトカーに呼び止められてあわや違反切符を切られそうになったこともある。事故は、赤信号で停車中に居眠りしてしまい、ズルズルと前進して前の車に追突したもの。追突した私の車のバンパーは壊れたが、幸い前の車は後部に頑丈なパイプを備えていて相手の車に損傷は無く弁償しなくて済んだ。私の方は、修理に五万円ほども掛かってしまった。

退職が近づき、退職後は〝サンデー毎日〟(毎日が日曜)なので健康維持を考えると平日でも決まって行ける所を作るべきと考え、会社の先輩が会員の私営テニスクラブを紹介してもらった。平日会員の制度があり、正会員より割安で平日にプレーできる。会員数の多いクラブだが、今では試合仲間もでき、出勤するかの如く、電車で月、水、金曜日にコートに行きテニスを楽しんでいる。

加えて多摩の市民クラブにも週末一度は行くようにしていて、コート隣の公園での春の花見、秋のバーベキュー会等を含めて入会以来の懇親を続けている。

会員の中には八十歳半ばの方もおられるので、トレーニングをしながら八十歳過ぎまではプレーできるよう頑張りたい。折しも、全豪オープンテニス大会の開催中で、そのテレビ放映が真夜中のため睡眠不足になりがちだ。節制すべきところは節制し、健康維持を図りながら今後もこのテニス生活を続けてゆきたい。

ボーナストラックに載って行こう

細谷　博

「ボーナストラック」とは何のことかご存知でしょうか？　音楽の記録媒体が、いわゆるＬＰからＣＤに移行して行く過程で、一枚ごとの記憶容量が数十パーセントも拡張し、その分だけ長く楽曲を録音できるようになりました。それらのＣＤは、新しい音源を記録したものが大部分なのはもちろんですが、一方で、すでにＬＰで発表され評価の高い名演だが、片面では容量不足のため両面に分けて収容している楽曲（交響曲が多い）を、継ぎ目なしで聴けるＣＤの形で再発表された例も数多く出てきて、音楽マニアを喜ばせてくれました。

その時に、実は勿体ないことに、数分から数十分も余白が生じる場合がしばしば起こり、製作者たちが頭をひねった挙句に、クラシック音楽の場合では、そのＣＤのメインの曲の作曲者の小曲を集めて穴埋めするというアイデアを思いついたのです。

例えばチャイコフスキーならピアノ組曲「四季」だとか、ラフマニノフなら「ヴォカリーズ」など珠玉の如き小曲を、壮大な交響曲やコンチェルトのあとに追加して、その作曲者の別の面を見せるなどの効用を生みだしています。

その一方でアドリブを重んずるジャズのＣＤでは、演奏吹き込み時、気に入らないところは、二度も三度も吹き込み直しをして、あとで編集した部分だけがＬＰとして発売されて我々の耳に届く訳です。ところが、名盤ＬＰの復刻ＣＤでは、録音原盤でやり直しの部分を順次Take One, Take Two と別項で追加してくれるので、マイルス・デイビスやビル・エバンスなどのＣＤでは、プレーヤ間の解釈のやり取り迄聴くことができ、臨場感が高められています。どなたもご存知のデイヴ・ブルーベックの Take Five の題名は、この五番目の Take かつ五拍子のリズムであることの両方をかけてつけられたものです。

この追加部分を陸上競技場の楕円形の走路のトラックと見なし、本来の予定ラインを超える部分をボーナスと

捉えて、「ボーナストラック」と呼ばれることになったようです。

此の現象を、人生の大部分を務めあげてきた我々に当てはめて見ると、長年の様々なフィールドでの活動の一方で、ここぞというところでは、トラックを走って白黒をつけてきた感じが当てはまります。その後、定年を迎えて我々の大部分は年金生活者となるか、定年延長して減額給与で働くか、第二の人生で全く未経験の仕事に就くかなどいろいろ分かれてきます。

企業ＯＢペンクラブ会員となった我々の大部分には、長年にわたる社会活動の間に蓄積された経験と知識が山ほどあります。似たような環境にある同世代、今や後期高齢者に手の届く団塊世代、未だに現役ながら百歳社会の到来におびえている世代などに伝えることは、我々世代の義務と言ってよいでしょう。

私個人の場合は、この世におぎゃーと誕生してからずーっと病院通いと入院の八十五年間で、情けないやら恥ずかしいやら。二十三歳で大学進学時には既に片肺状態、その後三十七年勤めあげた会社でも長中期欠勤が合計で二年を超え、五回の手術痕の合計が一メートル二十センチ。それでも首にしなかった会社には恩義を感じており、後輩たちに、様々な機会に恥を忍んで経験談を押し付けております。

ここ数年の体調不良が一昨年秋には頂点に達し、主治医と専門機関医との協力診断の結果、非常に危険な状態にあるガンと判明。その年末から未だに症例の少ない免疫治療を開始したところ、十個近くあった増殖中の腫瘍が、二か月で完全に消滅。恐れていた副作用もほとんどなく、現在も慎重に治療を続けております。所属する男声合唱団の創立二十五周年記念コンサートもなんとか歌い上げました。

人類が未経験の長寿時代に入って戸惑うことばかりですが、長寿だからこそ見えてきたことも沢山あり、まだまだギリギリまで生きてご恩返しをしなければなりません。一日頑張って生きれば医学が追いついてくれます。それにはボーナストラックを利用するのが一番です。生きている、そのことが我々にはボーナスなのです。

「十三詣り」の思い出

藤原　道夫

二、三年前のこと、桜を見るために京都は嵐山の法輪寺を訪ねた。桜の風景を眺めながら階段を登ってゆくと、本堂前に「十三詣り」と書かれた大きな看板が立っているのが目にとまった。そうだ、自分も遠い昔に十三詣りに参加したことがある。記憶が定かでないところもあるにしろ、その時の感慨が蘇ってきた。そのことを記そう。

　両親の配慮により、小学二年生の時に下の妹と二人して浦和市から福島県西会津の山村にある父親の実家に移った。生活は激変した筈だ、親とも他の兄弟とも離れ、都会から祖父母が住むがらんとした大きな田舎の家に住む事になったのだから。しかしすぐに田舎の生活に慣れ、特に不自由な思いをした記憶がない。ただ同年齢の男の子に比して体力が劣っていて、走っても相撲をとっても勝ち目がなかった。これは劣等感となった。しかし田舎の生活が体によかったせいで年とともに体力がついていった。それに両親の配慮が有難かったのは、戦災にあうことがなく、また戦後も食料は何かしらあったこと。

　小学六年生になった春（ほとんどの生徒がこの年に数え年で十三歳になる）、学校の恒例行事となっている十三詣りに参加した。行く先は柳津（やないづ）、そこに虚空蔵菩薩が祀られているお寺がある。学校でお詣りについて説明があったのか覚えていない。お年寄りの人たちが「虚空蔵さんにお詣りすると知恵がつく」と話していた。

　十三詣りの当日、汽車に乗るのがうれしく、みんな（五十人ほど）遠足気分になってはしゃいでいた。磐越西線上野尻駅から蒸気機関車に乗って一時間余で会津若松に、会津線（現只見線）に乗り換えてまた一時間ほど、ようやく柳津駅に着いた。その後どのように虚空蔵さんにお詣りしたのかとんと記憶にない。丁度お昼時になり、お寺の後ろの崖の下、只見川に架かる橋の上で弁当を広げた。竹の皮に包まれた梅干し入りのおにぎり二個、胡麻塩がついていて、たくわん二切れが添えてあった。そ

れにゆで卵と夏ミカン一個ずつ。水は古いアルミの水筒の中に。みんな黙々と食べた、お腹がすいていたのだ。橋の下には川の水がしぶきをあげながら流れていた。

帰りは徒歩だった。郷里から柳津までは、往きはコの字をなぞって汽車に乗り、帰りは空いた口を下から上に歩く、という位置関係にある。帰路も楽しかった。幸い天気は高曇り。山並の街道を五十人ほどの小学生が二列になって歌を唄いながら歩いて行く、そんな風景は当時ならではのことだろう。車は走っていない時代だった。歌を大体覚えている。「むかしむかし　そのむかし　椎の木林のすぐそばに　小さなお山があったとさ～あ　あったとさ……」。これを訳もなく唄い続けた。調子がよく単調な道を歩き続けるのに気分が高まった。

どれほどの時間歩いたのか、三時間くらいだろうか、日が暮れる前に郷里の村の入り口に辿り着いた。そこから三々五々それぞれの家に帰ってゆく。

自宅に戻った時に、不思議な感覚が湧いてきた。「みんなと一緒に歩いて帰れた！」。やりとげた満足感が溢れ、疲れも感じていなかった。その時まで持っていた体力不足という劣等感が、体からふわりと抜けて行ったような気分だった。これは、大げさにいえば、生涯忘れることのできないできごとだった。今思うと、心身ともに一人前に成長をとげる時期に入りつつあったのだ。

十三詣りは現在も行われているのだろうか？　この文をまとめることを思いついた時、郷里（現西会津町）の教育委員会に電話で問い合わせてみた。児童数が昭和二十年代に比べて激減しているものの、今は父兄によって講が組まれて十三詣りが行われているとのこと。それを知ってなぜかほっとする気持ちになった。

数え年の十三歳は、成長過程での大事な時期であり、何らかの行事を行うのは意義あることと思う。成人式がなかった自分にとって、当時学校の行事として参加した十三詣りは、記念すべき体験として記憶されている。

水辺によせる想い

福本　多佳子

台風一九号がもたらした被害から三ヶ月が過ぎた日曜の朝、ようやく多摩川河川敷の野球場から少年チームの明るい声が響いてきた。まだ試合が出来る状態にはなっていないが、ある程度の整備がほどこされバルコニーの下では、二グループの少年野球チームがトレーニングを始めていた。台風の後、世田谷、大田区、川崎市の多摩川河川敷のサッカー、野球場はいずれも使用不能となりバッティングセンターで練習している少年たちの姿がテレビに映っていた。対岸の川崎側の河原にはトラックで持ち込まれた土の山が現れては消える。目の下にあるテニスコートも何度か土で覆われては、降る雨で水面下へと隠れ、また上から土をという作業が続いていた。今日のテニスコートは明るい茶色で輝いている。

十何年か前の一時帰国時、多摩川の上空を白鷺が飛んでいるのを見て「川が綺麗になったんだ」と思った。その後「鮎が多摩川に……」といった記事も見た。そして現在、バルコニーから川の上を飛んで行く鵜の群れが水面に降り立ち、口にくわえた魚を取り合っているのを見るのは嬉しい。鮭を釣り上げてサイズを測った後、川に戻している男性を見てこれが東京かと感動した。週末にはカヌーやボートを漕ぐ人々、鷹も飛んでいる。多摩川の自然環境がこんなに改善されるとは二十～三十代の頃には想像できなかった。

十月になって、多摩川流域の台風爪痕の視察とばかりに自転車で羽田空港まで行ってみた。途中、明るい日差しの下、橋下の階段上部でホームレスの人々が談笑していた。ちょうど、新聞でホームレスの人々のために衣服が寄付され、みんなで分け合ったと言う記事を読んだところだった。明るい笑顔を見てほっこりとした気分で通り過ぎた。桜の季節にまた空港へ向かい、羽田勤務だった七十年代初頭の姿を思い浮かべながら走り回ってみたい。当時の職場、国際線予約課はジェットハンガーのあるライン整備ビルの二階にあり、窓の前には海老取川、対岸に工場が見えていた。寂れた雰囲気だった。シフト

勤務のため、時間帯により車通勤をしていた。環八工事が進むと、環七から環八へとルート変更した。中原街道を越え、しばらく進むと大きな寺の裏口にぶつかる。そこで迂回、多摩堤通りに入り、また環八へと戻るのだが時に車での通行が可能な多摩川土手道への乗り入れを試みては、川沿いの抜け道探しを楽しんでいた。

　工事が完了し、ここが通行を遮っていた所だと思いながら見上げていた寺が、今や家から徒歩十五分の距離にある。天平年間に行基により開創され、のちに空海により再興されたという光明寺だ。高く築かれた石垣の上に鐘楼がある。墓所や建物の移設には時間と労力、金がかかったであろうと推測出来る。ネットで見た光明寺池の周囲を歩きたいと思ったが「工事中」の看板と高い塀とで、覗き見ることも叶わなかった。

　八歳の秋、大田区馬込から杉並区高井戸に引っ越した。家の前の林から切り出された杉の大木が我が家の塀沿いに並んでいた。小鳥のさえずりで起き、庭にはヘビやトカゲが出没、春はレンゲの花でピンク色に染まった田んぼの畦道で澄んだ湧き水に手を浸し、夏の夜に駅に降り立つと、眼下に拡がる水田からのカエルの合唱が賑やかに響き渡っていた。

「水辺にまつわる旅」というと、限りなく各地の情景が浮かんでくる。シリコンバレーでは水辺でくつろぐペリカン、鴨、各種の鷺をあかず眺めた。そしてハーフムーンベイのビーチで見た太平洋に沈んで行く真っ赤に輝く大きな夕陽は圧巻だった。カーフェリーでの英仏海峡横断を目指し、ドイツからイギリスへの単身ドライブを実行、往路はベルギーの港オステンデから夜中のフェリーに乗船した。予想外の荒海だった。早朝の船上でドーバーの白い崖を見上げ安堵した。復路は時短ルートをとフォークストーンからフランス・カレー行きのフェリーに乗り込み、ベルギー経由帰着した。北ドイツの夏のリゾート、ジルト島へは浅瀬に築かれた土手道を走る車専用貨車に車一台ずつが、まるでアリの列のように乗り込んで行くのが面白かった。自分の車の中から海を眺めているうちに本土から島へと運ばれる。パリでセーヌ川沿いを車で走り、ノートルダム寺院を仰ぎ見た時の感激も懐かしい。水辺がらみの情景は優しく、長く心に留まっている。

ハインリッヒの法則

廣澤　重穂

二ヶ月に一度の掌編小説勉強会。毎度毎度、勉強会が終わるたびに次回作のテーマに悩まされる。

頼りになるのは、助けを求める住所録でも、貧苦を記した貧乏録でもない。日々あれこれ綴った備忘録だ。

有象無象に書き散らされたなかには、「三ツ星マークの昆虫ソムリエ」や「絶滅危惧種の逆襲」や「神はサイコロを振らない」（アインシュタイン）といった意味不明のものもある。「ユーチューバーの悲劇」だって今日的テーマとして面白そうだ。しかし物語には程遠い。

さらに頁をめくる。「ハインリッヒの法則」が目に飛び込んできた。その言葉に、品格と哲学が感じられる。社会の本質を示すかのような響きだ。

ちなみにハインリッヒの法則とは、「一つの重大事故の背後に二十九の軽微な事故があり、そのまた背後には三百の小さな異常が隠れている。それゆえ些細な異常にも目を向け、危機管理を徹底しなければならない」というものだ。特にメーカーではよく知られた法則だ。

二〇一八年から一九年、ボーイング機の墜落事故が相次いだが、事故に至るまでに幾つもの軽微なトラブルがあったに違いない。些細な事故をきっちり検証しておれば、大事故につながらなかったはずだ。

これを物語に出来るほどの腕はないが、〝小さな事故は大事故の予兆〟というアイデア、利用できそうだ。元高級官僚の、池袋の交通事故もこの法則が当てはまるかもしれない。

よし、これだ！

とりあえずこのアイデア、酒飲み友達に披瀝してみた。「この前の池袋の自動車事故、これを小説にするってのはどう？　大事故の前に幾つもの予兆があったはず。その予兆を通して老人の行動や心の動き、家族の反応、社会情況を描く、というもの」

「取材、できるの？」

ごもっともだ。取材する体力もなければ、粘りも、ずうずうしさもない。

溜息が洩れる。やはりテーマを誤ったか。とはいえ、
「じゃあ法則の流れだけを頂戴して、大事故が起こる、それを探ると中ぐらいの事故が、その事故の前には無数のトラブルがあった、っていう物語を作るか……」
「それじゃ当たり前過ぎて、面白みに欠けるわよ」
しばらく思案をした後、彼女はさらに続けた。
「その法則、ギューっとひねってみたら?」
そして考えたのが、次のようなプロットだった。
粗大ゴミ扱いされ、冷たくあしらわれている老齢のダンナが、離婚されないのは財産目当てに違いないと、妻の殺害を計画する。殺人と知られぬよう、細かな事故に見せかける。大事故になりそうな歩きスマホや暴走自転車に妻を巻き込ませるのだ。法則が示すとおり、数が重なれば、中には死をもたらす大事故にもなるはずだ。
だが妻、ヒヤリとしたりハッとしながらも事故から免れる。変だと感づいた妻がダンナを問い詰める。ダンナ、ハインリッヒの法則を利用した殺人だった、と白状。
すると妻、
「そんなこと、考えている暇があったら、日々の小さな幸せ、見つけなさいよ。三百の小さな幸せを感じられれば、中ぐらいの二十九の幸せになれるわよ。そしてその中ぐらいの幸せは、ど~んとでっかい幸せの予兆でしょ。ハインリッヒの法則って、そんなことじゃあないの?」
と、オチ。これで完璧だ――。
ついでに言えば、この完璧な物語を、残念ながら勉強会の諸氏は読んでいない。そう、妻の殺人計画に至る前に、著者自身が完璧に挫折してしまったのだった。

ハインリッヒの法則が〝法則〟であるならば、たとえ稚拙なものでも三百も書けば、なかには中ぐらいの作品が二十九はありそうだ。そして一つぐらいは賞をゲットするような、ドでかい作品につながるかもしれない。
今度こそ、今度こそとは思うものの、しかしいまだに実を結んだためしがない。
ちなみに、はずれ続けるバクチ打ちが「今度こそ当たるはず」と考える心理を、専門用語で〝ギャンブラーの誤謬〟というらしい。

ミュンヘンのビール祭り

平尾　富男

大学の同級生だった女性が、ドイツ人と結婚してミュンヘン郊外に住んでいる。初めて彼女の家を訪ねたのは今から一五年以上も前の秋、ヨーロッパを巡る旅のハイライトとして六日ほど滞在した。

丁度運よく有名なビールの祭典『オクトーバーフェスト（Octoberfest）』の時期に重なったので、ビール好きとしては本場のビールとそのお祭りを大いに楽しむことが出来たのは幸いだった。ドイツ、バイエルン州の州都ミュンヘンで開催される世界最大規模の祭りである。一八一〇年以来ミュンヘン市内中心部のテレージエンヴィーゼ（テレーゼの緑地という意）と呼ばれる広大な場所で九月半ばから十月上旬に開催され、毎年約六百万人もの人が訪れる。ドイツ各地からは勿論、近隣のヨーロッパの国々以外に、世界各国から、文化的にも歴史的にも見どころの多い都市ミュンヘンの観光を兼ねて、このお祭りに押し寄せてくるのだ。

友人夫妻の車で訪れた広大な会場には、夕闇の下に巨大なテントに包まれたビアホールが幾つも黒々と建ち並んでいた。巨大テントの多くは、ミュンヘンのビール醸造所が直営するビアホールなのだ。その会場内では、現地の人だけでなく、この時期を目掛けてドイツ各地、否世界中からビールファンが押し寄せ、それぞれ一リットルジョッキを片手に飲めや歌えの大騒ぎをする。

そのビアホールの中でも、五メートル近いライオン像が入口に立つレーヴェンブロイのテントでは、ブラスバンドによる生演奏で賑やかに盛り上がる。

ビール王国の名に恥じない、ビールに合うドイツ伝統料理も見逃せない。日本でも広く知られ好んで食せられている酸味のきいたキャベツの漬物「ザウアークラウト」や、カツレツのように薄く伸ばしたお肉に衣をつけて揚げたシュニッツェルである。

個人的には、「Wiener（ヴィーナー）Schnitzel」と呼ばれているドイツの国民食で、仔牛肉を使ったものが好きだ。友人宅でも何度かご馳走になった。その他にもド

イツ名物の各種ソーセージも忘れてはならない。但し、欲に任せて日本人の小さな胃袋にあれやこれや取り込むのは少々苦しい作業となりそうだ。

会場となるテレージエンヴィーゼはミュンヘン市街地近くにある四十ヘクタール以上もある大広場で、テント内外合わせて九千席も収容する。この祭りの期間中にこの広大な会場に押し寄せる観光客の利用に供せられる。

隣接する広大な駐車場に車を停めて、日本からの暫しの居候がはぐれて迷子にならないように、大勢の来場者に混ざって適当なテーブルに落ち着く場所を確保する。点在する野外ビアホールに赴き大ジョッキに並々と注がれた生ビールを購入して、暗い夜空に瞬く星を仰ぎながら友人夫妻と、そして周囲の見知らぬ参加者たちとお互いのジョッキを触れ合わせながら、日本人には少々アルコール度が強いドイツ生ビールを喉から五臓六腑に流し込んだ。

爽やかな夜風が頬を撫でドイツ語の会話には全く付いていけないながらも、賑やかな話し声の渦と朗らかな笑い声と、周囲の人懐っこいドイツの隣人たちと「フェスト」の楽しい渦の中に溶け込んでいった。友人夫妻と英語で会話しているのを聞いて、見知らぬ人が東洋から来たらしい訪問者に笑顔で「Cheers!」と叫びながらジョッキを差し出してきた。

友人夫妻から迷子にならないように、空になったジョッキを手に近くのビール販売テントに向かった。広大な敷地に大勢の群衆がひしめき合いながら大騒ぎしているのだ。夜の帳はすっかり降りているから、夫妻から逸れたら、この会場から車で一時間も離れた郊外に住む友人の家に帰ることも出来ない！

好きなビールも余り飲み過ぎたら、酔ってトイレに駆け込んだ帰りに夫妻と居た場所に戻れるかどうか分からない。実際、便意を催した際には、友人のご主人に一緒にトイレに行ってもらった。情けない話だが、そんな不安を抱えながらも遠い異国のお祭り騒ぎの楽しい会場で、飲む程に酔う程にオクトーバーフェストの楽しさに浸っていった。

最近では日本各地でも開催されるようになったそうだが、未だ一度も出掛けて行ったことはない。

王昭君

原田　信

盛唐の詩人・杜甫は詠っています。（前半四句）
　群山万岳が荊山に向かってなだれはしる処
　王昭君の育った村がまだ残っている
　匈奴に送られるため漢の宮廷を去ったが
　そこには砂漠が果てしなく広がっていた
　今はかの地の黄昏の中に青塚だけを留めている

李白は次のように詠います。（『王昭君』四句）
　昭君玉鞍を拂い　馬に上って紅頬を泣く
　今日は漢宮の人　明朝は胡地の妾

杜甫は次のように続けます。（前詩の後半四句）
　美しい顔は醜く描かれた肖像画で天子に
　知られただけ　月夜には魂が故国に帰るという
　千年後の今日も　琵琶語りは蕃族の言葉を
　まじえながら恨みの心をはっきりと述べている

「昭君を詠ずる詩はこれを絶唱と為す。余は皆平々たり」　清の沈徳潜の批評です。

この詩は、『詠懐古跡五首』の一つで、四川省の中心「成都」で安穏な数年を過した後、揚子江を下って三峡の近くに滞在した五五才頃の作と推定されています。五つの古跡は滞在地の近くでした。

昭君は杜甫より八百年ほど前の前一世紀の人です。画家に賄賂せずに醜く描かれたため、匈奴の王に嫁がされました。昭君は後に明妃・明君とも呼ばれました。青塚・セイチョウは昭君墓。墓地の草が彼女の恨みでいつまでも青いという伝説からです。

ところで杜甫は、この詩を作る前の数年間、成都で当時の四川省長官・厳武の厚遇を受け、浣花渓（カンカケイ）に草堂を作りました。この前後の何年も家族を連れた流浪の旅に追われましたから、ここでの生活は、最も安心できた時だったでしょう。

この場所に杜甫からほぼ四十年後、薛濤（せっとう）という女流詩人が隠棲します。容色は勿論、詩作にも書にも優れた妓女で、杜甫を崇拝した著名詩人の元稹（げんしん）にも親しく仕えましたし、草堂の土台や柱は百年後にも残っていました。でも薛濤の伝記にも詩にも、杜甫の名も草堂も出てきません。彼女が関心を持たなかったのか、作品の大半が失われたためなのかは判りません。当時、杜甫の詩名はまだ高くなく、「詩聖」の名が確立されたのは約三百年後の北宋の王安石や蘇軾の時代になってからでした。彼女が紙を漉いて洒落た詩箋を作ったという井戸「薛濤井」が今なお残され、立派な記念館もあります。また杜甫草堂は、宋から清を経て現代まで何度も壮大に修復され、大名所になっています。成都は竹の名産地で、二つの名所も竹林の趣きが格別です。

（土岐善麿『杜甫草堂記』一九六二）

さて、現在の昭君村と青塚はどうなっているでしょう。中国の地図を開くと、揚子江の三峡の出口の少し北に「昭君故里」と明記され、また内モンゴル自治区のフフホト市には「昭君墓」があります。陵墓の高さは三十米以上、双方に白い大きな昭君像があります。中国の有名な美女の中でも、生没両方の地が盛大に記念されている例はないようです。昭君の故事は古くから数多くの伝説に彩られ、日本でも源氏物語にも能にも採られ、明治の日本画もあります。中国では今も映画やTVドラマが製作され、哀調を帯びた歌謡曲が人気を集めています。

杜甫の詩（読み下し、少し直しています）

群山　万岳　荊門（ケイモン）（山の名）に赴く
明妃を生長す　尚お村有り
一たび紫台（漢王宮）を去れば朔漠（砂漠）連なり
独り青塚を留めて黄昏に向こう
画図にかつて知られる　春風の面
環珮（カンパイ）（装飾品）空しく帰る夜月の魂
千載　琵琶は胡語をなし
分明（明瞭）に怨恨を曲中に論ず

研究考察―ホトトギス俳句に深層心理を見る

浜口　須美子

信長「鳴かぬなら　殺してしまえ　ホトトギス」
秀吉「鳴かぬなら　鳴かせてみせよう　ホトトギス」
家康「鳴かぬなら　鳴くまで待とう　ホトトギス」

ホトトギス俳句は、人それぞれに個性があり、人さまざまな性格を物語る。まずは家族に問いかけたところ面白い結果が出た。

私「鳴かぬなら　お願い鳴いて　ホトトギス」

以前娘に「お母さんはよく「お願いいやから」って言うよね。怒られるよりプレッシャーきつい気がするわ」って言われた。私は「お願い！」でなんとか人生を凌いできたようだ。ホトトギス俳句で私の依頼心が露呈した。

娘「鳴かぬなら　鳴くのと替えて　ホトトギス」

彼女は決して口数は多くない。端的に表現する。子供の頃近所の友達が「おじいちゃんに買ってもらってんええやろ」って自慢している。そこで、娘が一言「チョウダイ！」小さなお友達はびっくりして泣きだした。そう、想定外のひとこと。ホトトギスが鳴かないなら、鳴いてほしいとか、待つとか、現状に固執しない。駄目なら次ッ！って取り替える、比較的クールな表現だがよく聞けば、「鳴きたくない時は鳴かなくていいし、鳴きたい時に鳴けばいい！」と言うのが真意。人それぞれに、得意な事を無理せずにできたら、世の中楽しいやんって思っている娘だ。

息子「鳴かぬなら　鳴く時言うて　ホトトギス」

サッカーと将棋が好きな彼は、有効利用とか、効率的とか、その類の言葉が好きだ。彼は、いつだって先読みをしている。だからこその社会人。だからこその営業マン。スケジュール管理が好きで段取りしぃ！（段取りをすることが好きな人）いつ鳴くとも知れないホトトギス。じっと待つより、待ち時間の有効利用を考えるタイプ。

夫「鳴かぬなら　私が鳴きます　ホトトギス」

眠いなら寝たらいい。鳴かないなら鳴けるものが鳴けばいい。物事は複雑に考えたらややこしい。単純に、その場その場を切り抜けるタイプの夫だ。

母「鳴かぬなら　お好きなように　ホトトギス」
九十九歳だからこそ言える言葉。そういえば、命令も強制もしない母。「すべてあなたの自覚に任せます。お好きなように」って言われて育てられた私。強制より命令より強い言葉、お好きなように！
「鳴かぬなら　こまりまんがな　ホトトギス」
「鳴かぬなら　せめて笑って　ホトトギス」
「鳴かぬのか　へんとうせんか　ホトトギス」
「鳴かぬなら　せめて句を吐け　ホトトギス」
困る、笑う、そしてホトトギスに呼びかける、しかもダジャレで和ませる。最後に不如帰の文学的要素がキラリと光り、只者ではない。困ったとの表現も、少し大阪弁でデフォルメして、難儀やなぁ程度の困り方。「せめて笑って」は漫才で言う、突っ込みで、相手が「そんなアホな～」と返せる言葉をすでに用意している。これこそ用意周到。「扁桃腺」と「返答せん」は、さすが柔軟な頭。「座布団五枚あげて」の笑点大喜利世界。「鳴いて血を吐くホトトギス」の中国故事をさりげなく取り入れて、♪ニクイ　ニクイ♪　ちょっと困った顔しながら、でも笑顔は絶やさず、ダジャレ好きで、少しオヤジギャグが過ぎて周りに引かれることもあるけど、教養満載でも謙虚。私の尊敬するお兄ちゃんの作。
「鳴かぬなら　耳を澄ませよ　ホトトギス」
「ついついホトトギスの人格（鳥格？）を尊重」との但し書き付き。この俳句の登場（人）物は、ホトトギスと自分。ホトトギスを責めず、聞く側の自分の襟を正す人。相手を責めず、常に自分を反省するエエ人。私の大切なお姉ちゃんの作。
家族、知人、友人に協力していただき「すぐには思いつかないよ」って言いながら、「実は優柔不断で、ええかっこしいやから、変な事言われへんって思うと何も言えない性格やねん」って、言えないことの性格判断さえ自分でしてしまう頭脳派もいた。今回は家族兄姉編。
以上、私の勝手な推察、いい加減な想像でまとめてみた。こんなどうでもイイ話に乗ってくださった皆様に感謝。
「ホトトギス俳句で深層心理が見える」これホント！

「保守」それとも「革新」

野瀬　隆平

「共産党が保守で、自民党が革新」である、と考えている若者が少なからずいるという。憲法をかえることに断固反対する共産党が保守的で、改憲しようとする自民党が革新的に見えるのであろう。

憲法の問題だけではない。経済についても、自民党が次々と新しい政策を打ちだして実行しているのに対して、野党は従来の考えにこだわって斬新な提案が出来ないでいる。どちらが革新的でリベラルな政党に映るのかは明らかである。

最近、若年層に自民党の支持者が増えている。だがイデオロギー的に右傾化したというのではない。自らの就職やそれに続く実生活を考えたときに、どちらが有利で将来が保障されるかを基準に判断しているだけの話である。これまでの様な保守と革新、右派と左派という単純な軸で全体像を正しく捉えることが出来なくなっている。

いわゆる進歩的と云われるA新聞が、こと経済の問題になると従来の考え方に固執して極めて保守的であるのも、同じことだ。日本でも話題となっているMMT（現代貨幣理論）についても、この新聞の論調は批判的で、従来通り財政規律を守ることを金科玉条と考えて「緊縮財政」を求める。

平成の30年間、世界を見渡しても日本だけ経済が低迷しデフレが続いていた。色々な理由が考えられるが、やはり賃金が上がらず個人消費が伸びなかったことが最大の要因だろう。

大胆な金融緩和によって、確かに銀行にはお金が行き渡るようになった。しかし、その先には流れて行かない。切実にお金を必要とする人がいても、返す当ても無いのに借りるわけには行かない。また、民間企業もお金を借り設備投資をするにしても、作った製品を買ってくれる人がいないと判断したら、なかなか踏み切れない。すべては個人消費にかかっているのだ。

幸い日本は国全体としては、生活に必要な物やサービ

スを生み出す力があり、事実過剰なほど創り出している。しかし、それを必要としている所得の低い人や若年層には十分行き渡っていない。

個人に資力がない時には、政府が代わって借金をしてでもお金が行き渡るようにし、個人消費を促す必要がある。この様に積極的に財政出動すべきときに、消費税を増税してお金を吸い上げるという全く逆の政策をとってしまった。アクセルとブレーキを踏み間違えたようなものだ。行き着く先は、残念ながら格差と相対的貧困の拡大であり、社会の不安定化である。

この様な政策をくい止めることが出来ない野党もだらしがない。単に数合わせで野党が連合して、政権をとろうとしても駄目だ。確固とした独自の経済理論を持ち、それに基づいた政策を打ち出せないでいることが問題なのである。

例えば、現代貨幣理論について、自民党の国会議員には数年前から会を開いて勉強している人もいるが、野党の人たちはどう考えているのだろうか。

少し期待が持てるのは、各地域において市民レベルでこの新しい理論を勉強し政策にどう生かせるのか、議論する集会が開かれていることだ。何度かそのような集会に参加したが、一部野党の人たちも参加して、積極的に動き始めているのも事実である。

この理論、同様の主張を永年にわたりしてきた者にとっては、目新しいことではなく、正しいと確信しているが、広く議論されることを期待したい。

日本の経済をこれからどうすべきかを考えるとき、アメリカと中国の争いという外的な要因や、少子化という内に抱える大きな問題を無視することは出来ない。しかし、自分で変えられないところに原因を求め、独自に出来ることから逃げてはいけない。

長期的には、成長戦略が必要であることは確かであるが、すぐに効果を期待することは難しい。

平行して、速やかに効果が現れるような方策、端的に言えば政府の借金をあまり気にせず、必要なところに思い切って予算を充てる政策をとるべきである。

渋沢栄一と昭和以降の政財界のリーダー

野上　浩三

渋沢栄一の偉大さ

渋沢は江戸末期から昭和にかけて、株式会社組織による会社を五〇〇社以上設立して日本経済の近代化に貢献した。未踏の世界に踏み入り、専心日本国の発展のために大きな功績を遺した。

東京都の飛鳥山公園にある渋沢史料館の案内書に「渋沢栄一が生涯かけて貫いた努力」として三項目が掲げられ、第一項目は次のように謳われている。

「株式会社組織により、多くの人々の知恵と資金を集め、道義に則った、活発な企業活動を展開して、豊かな社会を実現する」

渋沢は官民双方の分野で活躍したが、一貫した精神は「道義」と「誠実」であった。

それに比し、昭和以降のリーダーの中には公益より私慾、己の名誉、失敗の隠蔽などに堕した例が多い。三越事件に始まり、オリンパス事件、東電事件、東芝事件、日産事件と文字通り枚挙にいとまがない。

日本の実質賃金の低さ

テレビ番組でOECD作成の一九九七年を一〇〇とする主要先進国の実質賃金の推移を示すグラフを見つけた。二〇一六年の時点で、スウェーデン（一三八）、オーストラリア（一三一）、フランス（一二六）、イギリス（一二五）、デンマーク（一二三）、ドイツ（一一六）、アメリカ（一一五）、日本（九七）となっている。日本は最下位でしかも減少している。

番組のパネラー達は「原因は？」と首を傾げていたが、原因は円高である。円は一九八五年のプラザ合意以降一ドル＝二五〇円から現在の一ドル＝一一〇円へと円高になった。二〇一一年には七五円五二銭を記録した。円高は現在まで三五年間もわが国を苦しめている。

A社の例で考えてみよう（製品の原価を五万円、アメリカ市場の販売価格を二五〇ドルと仮定する）。

プラザ合意以前は一万二千五〇〇円の利益が得られた（二五〇×二五〇円ー五万円＝一万二千五〇〇円）。しか

し、現在の一ドル＝一一〇円の下では二万二千五百円の損失になる（二五〇×一一〇円－五万円＝▲二万二千五百円）。一ドル＝七五円五二銭の時の損失は三万一千一二〇円にものぼった（二五〇×七五・五二円－五万円＝▲三万一千一二〇円）。

A社はこの苦境を技術革新と労働賃金の圧縮で切り抜けてきた。この上労働賃金は切り詰められない。

労働賃金は一ドル＝一一〇円の下でプラザ合意の前の二・二七倍になっている。円高の是正こそ、A社が生き延びる為の手段である。目標値は一ドル＝一五二円。

この値は、相場予測の常套手段に従い、プラザ合意前の二五〇円への半値戻しの六掛けを現在の一一〇円に足すことによって得られる。

但し、挙国体制で、プラザ合意の時にアメリカ政府が行なったような戦略と戦術を講じる必要が有る。

中曽根元首相の責任

プラザ合意において中曽根元首相は「強い円は富国強兵」という己の信条を実現しようとした。「経済大国になった日本に相応しい強い円」という言い方をした。心づもりは「最初は一ドル＝二二二円、その次が一ドル＝二〇二円までといったところ」であった。

しかし、ドルに対する世界の信頼が厚く直ぐにはドル安・円高にはならなかった。そこで、望ましい円・ドル相場を一ドル＝一七〇～一八〇円程度に設定し、徐々にこのレベルまで誘導する方策が実行された（以上は船橋洋一著『通貨烈烈』を参考にして作文）。

一国の首相が自国通貨を強くしたいなどと国際的に表明したために、世界に大量に渦巻く投機資金の餌食にされ、想定外の円高になってしまった。

この世紀の大失敗は一般に知られていない。強力な箝口令が敷かれたに違いない。後の森友・加計問題における官邸の対応をみれば十分あり得る。政府関係者からは強い円を肯定する発言が続いた。元財務官の榊原英資氏などは『強い円は　日本の国益』という本を書いた。不都合な『通貨烈烈』は書店から消えた。

第二次安倍政権（二〇一二年）以降漸く円高是正の動きが出てわが国の経済はある程度は正常化した。もっと早く円高が是正されていたら……残念である。

冬の旅 ―― 奈良から近江へ

新田　由紀子

新宿発の夜行バスは車体を大きく回して桜井駅前に滑り込んだ。外はまだ暗い。暮れの都会の喧騒をとどめた暖かい車内から路上に降りる。六日間の旅の荷物を詰めたリュックを背負うと、終点五条を目ざして小さくなるテールランプを見送った。

ＪＲと近鉄を抱える桜井の駅は明るく光り、早くも通勤客を飲み込んでいる。構内のコンビニでパンとスープの朝食をとると、駅向こうに見える三輪山へ向かった。

山辺の道から大神神社に入って境内奥の狭井神社で登拝を申し込み、鈴のついた白いタスキをもらう。山は磐座や禊場もあって神秘的で清浄感に満ちているが、あちこちに去年の台風の補修が見られて痛々しい。登るのは二度目のせいか感興も少し薄らぐ。二時間ほどで往復し、鳥居の横で温かい素麺に熱燗少々のお昼にする。

二日目、奈良の常宿遊山ゲストハウスを発って奈良駅から二駅目で下車。地図を見ながら帯解寺、円照寺、正暦寺、弘仁寺と、十二キロの山里を歩く。途中で迷ったりもするが、これが実に楽しい。スマホＧＰＳをＯＮにすれば、チカチカと現地点とルートを示してくれてゲームをしているような面白さがある。

この日と翌日は、古い邸宅に宿泊する。長い廊下で露地を廻ると数寄屋があって、ここを個室利用できる。夕食時はスーパーの総菜とカップ酒を前に台所に陣取り、外国人客の観察だ。居間の炬燵で窮屈そうに座る女性、襖や障子を神妙に見入る男性。日本家屋のサイズに合わない彼らの立ち居振る舞いに異文化を思う。

さて、数寄屋の茶室。炉廻りを避けてダブルの布団を敷き、枕を一つ置く。贅沢な眺めだ。念のために障子や躙り口を開けてみると、いきなりの外気。ヒーター二台をつけてもまだ寒い。ま、これもありかと、タオルと石鹸を持って銭湯に暖まりに行った。

三日目は春日山の麓から禰宜道を通って高畑へ。どんより雲垂れた市街の底に転げ落ちるように白毫寺の石段を下りて行くと、新薬師寺だ。界隈の入り組んだ道筋に

昔歩いた記憶が蘇る。

翌日は朝から雨。近江へ移動して近江富士こと三上山に登る予定を順延し、奈良国立博物館へ。ロッカー泣かせの大きなリュックを警備室に預けてひと悶着するも、しみじみと仏像を仰げば大満足。雨に煙る奈良公園を後にして駅へ向かう。予定不消化で浮いた予算を、特製海鮮天丼と生ビールにあてると、旅の後半近江へ発った。

琵琶湖線は京都駅で乗り換えだ。合間にデパ地下へ直行して老舗のおせちパックを買い込む。近江八幡の二泊はユースホステルはやめて、足回りのよい駅前ホテルにした。地酒と小魚煮も買い足してチェックイン。

茶室で着ぶくれて寝た翌日のホテルの一夜は暖房過剰で七転八倒。朝はユニクロ極暖を脱いで出る。湖畔の名刹長命寺と八幡山を登るのだ。長命寺の雲衝く石段に青息吐息していると、氷雨まじりの強風が吹き荒れてきた。湖面も波立っている。空を睨んで八幡山縦走は諦め、お堂の廂の下でおせち弁当を開ける。繖山・老蘇の森・石塔寺と、万葉の蒲生野逍遥の渾身のプランも見送りだ。寒風に押されてまっすぐに日牟禮八幡宮から駅前まで小一時間歩き、派手な看板の回転寿司で湯豆腐に鮨三皿と熱燗で小腹を温めた。

最終日は元旦。今日こそは近江富士と、登山靴にストック装備で野洲駅に降りた。あろうことか、登山口行きバスは頑として「元旦運休」。憮然とタクシーの窓を叩くと、はい行かさしてもらいますと出たが、御上神社の畑中に降って湧いた初詣客に立ち往生。えらいなあ、こらぎょうさん出てはりますわ、ほなここで、と降ろされる。

里宮の人出を逃れ、眼前にそびえる三角錐へと目標を定めて靴紐を締める。富士こと三上山は笑っちゃうような四百メートルの里山だがなめてはいけない。表登山道は岩場続きの難路、一方裏道はまあまあとか。膝痛があるので岩場の下りは辛い。ままよと登りに難路を選んだが、登るにつれて岩また岩。ひいこらと這い上がったご褒美に新春の雪を刷いた比良の展望。眼下を新幹線が一筋に東へ走る。わが家の枕はさぞ冷えているに違いない。

野洲から米原、大垣と乗り換えて名古屋に着けば、旅は終わりも同然。構内でおでんと焼き鳥を熱燗で締めて令和二年の初日の夕闇を新幹線の座席に収まった。

ジャパン AS ONE TEAM

西川　武彦

日課の散歩でぶらついていると、入り組んだ細い路地から、青い目の男の子が、同じ背格好の黒い目の子供とじゃれ合いながら現われた。後ろには母親と思しき日本人女性が…。この街では時々出会う情景だ。

坂を下りてシモキタの繁華街に出ると、外国人のカップルが、スマホを眺めながらあちらこちらでぶらついている。なぜかこの街にはコーケシアン系が多いようだ。

歌の練習で毎週通う新大久保では、日本語より韓国語が飛び交って、お店も韓国系が多い。現役時代、何度も訪れた京城か釜山の怪しげな裏町にいる気分だ。

新大久保からの帰りは、歌舞伎町を抜けて新宿まで歩く。途中、コンビニで安い赤ワインを買う。この辺りの売り子はタイとかベトナム人だろうか。流暢な日本語を操り、サービスも日本人と変わらない。

たまに銀ブラすれば、幅広い歩行者天国には、姿と会話から中国人と思しき男女が溢れている。

帰りに渋谷に寄ると、ここは日本人の若い男女が多い気がする。街によりたむろする人種が異なる感じである。

我が家を振り返れば、暫く前まで、英国籍の男性が家族にいたし、親戚にも外国人と家族を構える者が何人かいる。

現在、下北沢の家では筆者の老夫妻が二階に住み、一階には数名の日本人の女性がホームシェアしているが、三年前までは、フランス人、韓国人、台湾人などもいた。界隈には同じような家が散在するようだ。

二〇一九年のスポーツ界を沸かせたトップニュースは、ラグビーのワールドカップで、日本チームが初めて決勝トーナメントに進出したことだろう。

世界の強豪スコットランドを破っての快挙だ。海外出身者でも日本代表になれるラグビー独特の資格規定がもたらしたものだ。リーチ・マイケル主将のもと、心が一

つになって勝ち進み、楽しませてくれた。多国籍者の力が相乗効果を生んでワンチームとなったのだ。
近年のスポーツ界を眺めると、他にも野球、サッカー、バスケット、テニス等々、数多くの競技で同じような多国籍効果が見られる。日本もそういう世界に仲間入りしたのだろう。

視点を転じて、来日する外国人の数の変遷を眺めてみたい。筆者が航空会社で国際線旅客の営業企画部門に配属になった一九六四年、日本は海外からの観光客に門戸を開き、東京五輪が開催された。とはいえ、その年の来日外国人は三十五万人にすぎない。
それが二〇一三年には一千万を超え、二〇一八年は三五〇〇万、二〇一九年も右肩上がりは止まらず、東京五輪の今年は四千万ともいわれている。欧米から遠く離れた日本が、英・独・仏・伊という観光大国と同じレベルに達するのだ。
要因としては、格安の航空運賃が定着したのが大きいし、日本が、いろいろな意味で西欧並みに成熟したことが大きいだろう。普段着で旅ができるという感じか。
日本人が語学下手なのは余り変わっているとも思えないが、言葉の問題は、SNSが通訳になり翻訳者になって、「ガイド付き」の一人旅が出来るようになったことが最大の原因に違いない。東京五輪が終わってもその傾向は止まるまい。

年末のT新聞に、「にっぽんルポ」と題して、岩手県のカトリック教会の模様が、特集的に大きく報じられていた。フィリピン人の牧師はタガログ語で主の祈りを唱え、信者たちは仏式に両手を併せて合掌している。ご聖体を授かる髪を茶色に染めた女性は、苗字が日本姓の「フィリピン嫁御」とか…。
混在・混合は止まることなく進み、人口減が避けられないこれから、日本の伸びしろは、国の諸制度を調整しつつ、ONE TEAMとなって、日本を盛り上げていくことしかないのかもしれない。二一世紀半ばには、そのような「ジャパン」になった日本を、筆者は千の風になって空の上から感慨深く眺めているに違いあるまい。

「ビオトープ」への憧れ

長尾　進一郎

私が幼い頃、家の周りには空き地や緑が多く残ってい て、我が家の庭にも昆虫や小動物がやって来た。春のモンシロチョウやシジミチョウ、夏のアゲハ、トンボ、蝉、カブトムシ、トカゲ、秋のコオロギ等々数え切れない。また庭に小さな池があって、そこで飼っていた金魚や、庭に住んでいるらしいヒキガエルも仲間だった。おかげで生き物と親しみながら育つことができた。

庭はその後も残っているが、両親が居なくなってからは手入れも滞り、今は私が時々行って雑草取りや落葉掃除をしている。最近は家の周囲の緑も減り、庭で見られる生き物の種類も年々少なくなっているのが寂しい。

十年ほど前、水場のある庭が忘れられず、この庭に池を復活させることにした。直径二メートル弱、深さ数十センチメートルのお椀状に地面を掘り、壁面には近くの石屋で買ってきた石を並べ、防水セメントで隙間を埋めた。素人工事の悲しさで水漏れが止まらず困ったが、下げ止った水面の位置に必ず漏れ箇所がある筈なので根気よく探し、ようやく水漏れはほぼ止まった。

すると次の夏にシオカラトンボが飛んで来た。つがいで水面に卵を産み付ける。翌年になって池の底をさらうと多数のヤゴが確認でき、初夏にはトンボが巣立つようになった。水草を伝って水から出たヤゴが、夜のうちに羽化し朝に飛び立っていく様子を初めて目にした。トンボも蝉と同様に、幼虫と同じ形の抜け殻を残していく。ひと夏に十匹以上が巣立つこともあった。

また、毎年二月末頃になるとヒキガエルがどこからともなく集まって産卵するようになった。近所に水場が少ないことも背景にあるようだ。普段は暗くならないと姿を見せない蛙だが、この時ばかりは昼間からオスが現れて池で待ち、鳴き声でメスを呼ぶ。子孫を残す執念を感じる情景である。そして春になると真っ黒なオタマジャクシが泳ぎ回り、やがて体長一センチメートルにも満たない蛙が巣立って行く。その後の消息は定かではないが、

大人の蛙にまで成長できる数は多くはないようだ。

　こうした池の生態が三、四年続いた頃だったか、都内で蚊に刺された人がデング熱に感染する騒ぎが持ち上がった。蚊が産卵しそうな水溜りがやり玉に挙がる事態になり、池があると苦情が来そうな気配である。考えた末、ボウフラを食べさせようと金魚を三匹買ってきて放したが、鳥にさらわれたか翌日には二匹しかいない。これは大変と、金網を池の全面に張り巡らせ、ようやく安全になった。生き残った二匹がたまたま雄と雌だったとみえて、一年経つと小さな金魚が泳いでいる。その後順調に増え、三年後に約二十匹となった。一組のつがいから増えたので全員が一族で、色も赤一色で同形の金魚ばかりである。この調子でどこまで増えるかと思っていたが、二十匹位でピタリと止り、それ以上は増えない。恐らく生活圏の規模や餌の量に応じて、自然に個体数が調整されるのではなかろうか。

　しかし池に金網を張ったため、トンボが来ても産卵ができず戸惑っている。やがてヤゴは居なくなり、トンボの巣立ちの姿を見る事もなくなった。こうして、池の主はヤゴから金魚へと完全に移って現在に至っている。ヒキガエルは相変わらず産卵にやって来て金網の隙間から池に入り、オタマジャクシは毎年生まれる。本号のフォト句ページの私の写真は、この池での一コマである。

　はからずも、人工的に環境を少し変えただけで、生きものの生態が敏感に影響を受けることを体験した。何気なく行っている変更が、野生生物には致命的となることがある。また一方で、自然は思ったより逞しく、環境さえ整えばめきめきと成長する一面も見せる。自然の営みの一端を、小さな池の生態の変化によって垣間見た出来事であった。できればトンボにも再び育ってほしいが、狭い池では魚との同居は難しいようだ。

　草木も放っておくとどんどん伸び、今も野生に近いままの庭である。多様な生物が共存する理想のビオトープには程遠い状態であるが、時々行っては生きものを探して観察するのはささやかな楽しみだ。彼らがいつまでも生きられる環境であることを願うこの頃である。

山登りの記憶

中村　晃也

中学二年の夏に友人の兄上に誘われて白馬岳に登ったのが初めての北アルプス登山だった。アイゼンを付けて大雪渓、小雪渓を登り、喘ぎながらも足元に群生する高山植物の花々や、遠く雲海の彼方に聳える剣岳の雄姿を見て山の魅力に嵌まった。

これに味を占めて以後、暇を見つけて近隣の奥多摩（川苔山、御岳山、大嶽山、三頭山、御前山）丹沢山塊、奥秩父（雲取山、金峰山、瑞牆岳）に通った。

雲取山を越えて泊まった三条小屋の主人に、発見後間もない青岩鍾乳洞に案内され泥まみれになったこと。

奥多摩湖が出現する以前に登った三頭山で帰路に迷い終バスに間に合わず、県道をトボトボ歩いているところを丸太を積んだトラックに拾われて氷川駅（現奥多摩駅）までたどり着いたこと。

増富ラジウム鉱泉を経て登った瑞牆山では、夕日に照らされた岩峰の上にブロッケン現象が現れ、こちらが手を振ると虹に囲まれた自分の影が手を振るのを見て感激したことなど懐かしい思い出が一杯だ。

北海道では、阿寒湖畔から雌阿寒岳に登った。胸の高さの熊笹をかき分けて登山路を探していると、忽然とアイヌの古老が現れ、「この先に小川の合流点がある。白い川の水は飲めないが、赤い川の水は飲める。赤い川に沿って登れば頂上まで行く」とのこと。頂上の火口原は荒涼として月面さながら。主峰の阿寒富士の手前にある爆裂火口からの噴煙を眺めているうちに、あのアイヌの老人は阿寒の神様だったのかもしれないと思えてきた。

層雲峡から黒岳までは急登に次ぐ急登で、豊富な雪渓のある大雪山主峰の北鎮岳までの往復がやっとだった。

九州では出張で参加した高分子のセミナーをエスケープして韓国岳に登り、頂上から眼下の火口湖と、神代を思わせる霧島連山の威容に接した。

八ヶ岳には、小海線の甲斐大泉駅からの長いアプロー

チを経て前三頭岳、権現岳を経てキレット小屋に辿り着いたのは日没後だった。翌日は主峰赤岳、硫黄岳、天狗岳を経て、下山路の松原湖までの快適な白樺尾根は印象的だった。二年後、麦草峠から蓼科山までの北八ヶ岳を走破し、分割で南北完全縦走を果たした。その他、入笠山、大菩薩嶺、乾徳山、尾瀬の燧岳、蔵王山、天城山、草津白根、日光白根、乗鞍岳などを制覇した。

登山用のバスもケーブルもない時代の山小屋に一泊するには米二合を持参し、混雑期には互い違いに横臥した上から毛布を掛けられて寝た。トイレから帰ると自分のスペースがなくなっていた。

南アルプスは、ＪＲ中央線から見える白亜の甲斐駒ケ岳に挑戦。梯子や鎖場のある急登に辟易し七合目小屋に一泊。翌日は千米下って北沢峠まで、そこから千米登って仙丈ケ岳に登った。仙丈ケ岳のカールではお花畑が満開で、恋の花黒百合を押し花にして彼女に送った。

帰途、北沢峠から伊那の高遠まで戸台川に沿った道を西日に照らされながら歩いた苦しさは忘れられない。今では北沢峠を通るバスの便があり、まさに隔世の感だ。

北アルプスは、白馬岳（二回目）から五龍、唐松、鹿島槍、針の木岳までの後立山縦走。針の木の雪渓で滑落し散乱する転石で血だらけになった。

燕岳から大天井岳を経て槍が岳までの東鎌尾根縦走（表銀座）。薬師岳から黒部川を渡渉し、雲の平を経て三俣蓮華小屋から、水晶岳、双六岳、と西鎌尾根（裏銀座）の槍ヶ岳までの縦走。烏帽子岳、野口五郎岳から雲の平の池塘を巡る散策では重いテントを捨てたくなった。

上高地から焼岳を経て穂高温泉に泊まり、右俣谷を遡上し滝谷出会いをすぎて槍の肩の小屋に三泊。台風をやり過ごし、槍、穂高の大キレットを突破して、北穂高、奥穂高、前穂高、上高地への縦走。若さゆえの快挙だ。

室堂から立山三山を経て剣沢小屋に一泊し剣岳登頂を狙ったが悪天候のため撤退し、金沢で豪遊した思い出。

学生時代、毎年夏は上高地、冬は蔵王スキー場に行くことを許してくれた両親に感謝あるのみ。

グッド・バイ、昭和・平成そしてＡＩ

富岡　喜久雄

元号が変わって未だ一年に満たない。馴染んだとは言えないが、出典が万葉集からと聞いているからだろうか、朴訥・素朴で何か雅な雰囲気を感ずるのは独りよがりな思いだろうか。

昨今の様々な社会現象を見聞するにつけ、我が身の老いもさることながら、日本社会も老成したものだと実感せざるを得ない。思い起こせば日本は、戦後の焼け跡からガンバリズムで奇跡の復興を遂げ、「ＪＡＰＡＮ ＡＳ ＮＯ１」とまで持ち上げられた。好い気になってエンパイア・ステートビルまで買ってしまったが、その後のリーマン・ショックの到来からの長い停滞。それでも、未曽有の金融緩和で何とか生き延びた。

斯様に我が世代人達は、懸命にそれらを乗り切ってきたのだから、やり甲斐、生き甲斐のある人生を送れたとも言えるだろう。何故なら克服すべき課題があり、それを為し遂げる「やる気」にドライブをかけるハングリー精神があったからである。

今や平成から令和の世となり、貧しくはないが少子化と福祉に傾斜した高齢化社会に相応しい安定と静謐な国作りを目指さざるを得ないと言う。だが、これは何とも退屈な社会ではなかろうかと思えてならない。

豊かな福祉に守られ、ベンチに並んで夕日を眺める老人の多い光景より、裸足で駆け回る元気な子供を叱りながらも、子供を慈愛の目で見守る高齢者の居る社会の方が、希望があって頼もしい。昨今、老人介護に絡んだ殺人や自殺がニュースを賑わせることが多いことから、嘗て国際支援活動で実見したラオスでの在り様の方が、人間的で自然で好ましいと思えてくるのだ。

それは、長女相続の下、親の資産一切を受け継いだ長女が両親を介護するというもので、介護といっても高齢で働けなくなった親たちを、高床式住宅の広い板の間の隅に置いたベッドに寝かせるだけなのだが。

特段の医療も介護もない。これを貧しさ故のみと見るかは意見が分かれようが、日本での高齢家族の葛藤や殺人劇を想うと、後進性とばかり切り捨てられず、あの素朴な生活様式にも実益もある筈だと思えてくる。

昨今、日本の青壮年層も、先行きの見えない漠然とした不安を感じてか、刹那的で元気が無いようだ。

日本にも嘗ては、家族的一体感が残っていたからか、夫の多少の横暴や、父親の子供への叱声や、会社では上司の愚痴も、その理由を半ば理解し、ハラスメントとか言わずに受け流せたのだろう。

最近、青年層からは「**老人は金を残して早く逝け**」とか、医療業界からは「**人生百年時代だ、高額医療を受けて長生きしろよ**」との要請もある。

さてどう生きようかと思案の内に夢想した。

妙齢の女性が玄関先に座って宣うた。

「お帰りなさいませ！　ご苦労様でした。外人さんとの会合はうまくゆきましたか」

「ポケ・トークの具合が悪くて困ったよ」

「そうですか、それでは早速ソフトをチェックします」

その若い女性は、廊下を滑るように去って行った。

「グーグル・ホーム」を内蔵した**ロボット人形**である。

そうなったら「**おら、こんな世は嫌だ**」と逃げ出すしかないから、中山間地に、家賃も只の古民家空き家を探そう。自給自足の生活は健康にも良いらしい。

「朝は朝星、夜は夜星、昼は梅干し」戴いて暮せば
「**人生百年**」も夢じゃない。

そして、あの世からお呼びが掛かれば、
こう言おう。

「阿弥陀堂参りを済ませたら、
ぼちぼち、
こちらから行くから
急がすな」と。

アンダンテ・カンタービレ

塚田　實

二〇二〇年も明けた。友人から「娘が二子玉川のオーキッド・ミュージック・サロンでニューイヤーコンサート公演をするので、是非聴いてやって欲しい」と依頼があり、喜んで出かけた。全員桐朋学園大学卒業の若いメンバーによる弦楽四重奏で、娘さんは第一ヴァイオリンを弾いた。演目は、ハイドン、プロコフィエフとベートーヴェンの弦楽四重奏曲だった。サロンは客席百名の小さなホールなので、音も良く響き、約二時間はあっという間に過ぎた。アンコール曲はチャイコフスキーの弦楽四重奏曲第一番第二楽章「アンダンテ・カンタービレ」だった。優しい調べに暫し聴きほれた。

家に帰って、「音楽之友社」発行の「音楽中辞典」を引いてみた。「アンダンテ」は「歩くような速さで」とあり、「アンダンテ・カンタービレ」は「ゆっくりと歌うように」と解説してあった。「これだ！」

会社人生はまさに「アレグロ」（速く）の連続だった。朝早く寝ぼけながら満員電車に揺られて出社し、夜は深夜残業の連続、徹夜をしたことも数えきれない。残業がないときは、顧客接待と社内交際で飲んだくれていた。二番目の子供が生まれたときは、海外出張中だった。子供の教育は家内に任せっぱなしで、「あなたは子供がどこを受験するかも知らないでしょ」と言われた。留学とニューヨーク駐在時こそ家族同伴だったが、ロンドン、大阪、北京は、子供の教育の関係で単身赴任だった。

ある日突然大腸がんのステージⅣを宣告された。暫く手術と抗がん治療を繰り返し、心ならずもアダージョ（ゆるやかに）・モードに投げ出された。しかし治りかけて体調が戻ると、あっという間にアレグロ・モードに逆戻りした。周りは走っているのに、自分だけがのほほんとしていられない。サラリーマンの悲しい性だ。

やがて会社を去る時が来た。会社を辞めた先輩がいつまでも会社の周りをうろうろするのを見て、自分は絶対

そうしないと心に決めていた。そうすると今度は急に本格的なアダージョ・モードに放り込まれた。アポのないカレンダーを寂しく見つめる。

健康のために公園散歩をしても人と話す機会がない。家に近い駒澤大学の日曜講座に通い、坐禅を組み講義を受けても、仏教に関する知識は増えたが、会話がないので、アダージョ・モードは変わらない。樹木辞典を買って樹木と対話し、園芸辞典を買って花に話しかけた。

そんなとき世田谷美術館に美術大学があるということを知り、通い始めた。美術の基礎を学ぶことが出来たし、何より新しい友人が増えた。これをきっかけに油絵も始めた。創作活動に没頭すると時間を忘れてのめり込む。絵を描くのは下手だったが、時間とともにそれなりの形を成してきた。

美術大学の仲間から企業ＯＢペンクラブを紹介され入会した。メンバーは心優しい人が多く、それに甘えて、「何でも書こう会」や「掌編小説」に参加し、今や「ペン川柳」のプロマネも務めている。会のインフォーマルな活動も楽しい。

いつも締切りに追われながら、文章を書いている。構想を練っても、良いアイディアが浮かばず四苦八苦する。それでも何とか仕上げると、至福の時間が待っている。

同期会や同窓会も増えた。ゴルフや飲み会、偶には旅行もある。海外生活で他社との付き合いも多かったので、定期的に集まっては、わいわい騒いでいる。

なぜか日経新聞はやめられない。まだ会社のことが少し気になるのだ。こちらからは絶対声をかけないが、後輩たちから時々お誘いがある。その時は無理に断らない。厚意を素直に受けるのも大事なことだ。

男の健康寿命と言われる七十二歳は過ぎた。人生はまだしばらくありそうだ。新しいことにどんどんチャレンジしようという気概はある。『苟(に)日新、日日新、又日新』は座右の銘だ。急がず休まずの「アンダンテ」と歌うようにの「カンタービレ」を心掛けながら、創作活動に勤しもう。

加藤九祚(きゅうぞう)先生の出版記念パーティに臨む

田原　敬

二〇一一年、〝島根イン青山〟に於いて、加藤先生の『考古学が語るシルクロード史』の出版記念パーティがあった。

好天の五月晴れで、青山の表参道にて地下鉄を降りると、大きな駅は人で賑わっていた。改札を出ると若い男性のガイドが居た。「〝島根イン青山〟へ行きたいのですが」と尋ねると、アイポッドの電子案内でその場を示してくれた。「六番出口を出て直ぐ左に曲がり、少し行くと大きな道があります。そこを左に曲がってください。この道は〝骨董通り〟と言います。三つ目の交差点を過ぎて右に曲がってください。突き当りを左に曲がりそこでまた聞いてください」

この辺には大分前に一、二回来たことがある。ハイカラな商店や町並みは高級なイメージで、散歩を楽しむ快適な地域である。行き過ぎたかと不安を覚えたとき、向うから二十代の都会的な女性が此方へ歩いてきた。「すいませんが〝島根イン青山〟は何処ですか?」と聞くと、「さあ、知りませんが」と答えながら、彼女はポケットから携帯を取り出して画面を探しはじめた。私は数分待ったが見つからないので、これ以上煩わせるのは悪いと思い「そこいらで訊いてみます」と言った。それでも彼女は「ここを突き当たると青山学院中等部で、この辺一帯は青山学院大学に関係する地域なんです」と言いながら、私に付き添って歩いてくる。とうとう高速道路の下まで付いてきてくれた。

日本人には親切な人が多いが、なんと気立ての良い娘さんだろう。高速道路の向こう側に駐在所が見え、巡査が二人立っている、其処に行くと、隣のビルが目的地であった。ハンドバッグを持って盛装し、どこかへ出かけるところをこんなに親切に！　温かい人情に感謝しながらビルの中央から入った。左手に瀟洒なラウンジがある。二階の受付を通って部屋に入る。まだ数人しか来ていなかったので前の方に座った。少し間をおいて側の年配の

方に話しかけた。戦争中は満州で暮らし、十六歳でソ連に連行され、ウズベキスタンで四年間も労働をさせられた体験談を話してくれた。その地でナボイ劇場を建てた話も出た。「異国での大変貴重な体験を文章にして遺されたのですか」と訊いた。「簡単なものは書きましたが、本ではありません」とのことだった。

間もなく彼の知り合いの男女二人が後ろの席につくと、私との対話は途切れた。私は四年前に知人十人とウズベキスタンを訪れナボイ劇場にも行った。当地で大地震があった際に近隣の建物は全部崩壊したが、劇場は殆ど無傷で残ったので、ウズベキスタンの人々から賞賛され大変評判になっていた。この国は対日感情が大変良く親日家が多い。彼はおそらく八十歳後半の年齢であろう。彼の話をまだ聞きたかったが、用事があったらしく公演の中休みに帰られた。

加藤九祚先生は八十九歳だが大変にご丈夫だった。上智大学在学中に平凡社にアルバイトで働いておられたが、卒業後は二十年間社員として勤務された。在職中から考古学などの研究と翻訳紹介を始められ、一九九八年以降、中央アジアでの遺跡発掘に長年携わられた。ウズベキスタン政府より「ドストリク」（友好）勲章を贈られるなど、当地でも名の知られた方である。三十年以上も中央アジアのトルクメニスタン、ウズベキスタン、アフガニスタンなどの歴史に関係する仕事をされた。中央アジアについての造詣が深く、ロシア語が堪能である。平凡社からロシアのエドヴァルド・ルトヴェラゼ氏の著書の翻訳を出版された。分厚いＡ４版変形の大作であり、じっくり時間を掛けて読んでみたい。

この本はソグド人の文明を取り上げたもので、ウズベキスタンのアラル海に灌ぐアムダリア川とシルダリア川の二つに跨る広い地域にソグド人が住んでいたと書いてある。まだ本を読んでいないので詳細は書けないが、中央アジアのソグド人と古代コーリア（朝鮮人）の間に長期にわたる文化的な交流があったようだ。大変興味深いことである。

首里城と『おもろさうし』

田中　みづえ

二〇一九年十月末日未明、沖縄の友人からのラインに急いでテレビを付けた。黒い空に燃え上がる炎の中に崩れゆく首里城。茫然。そのうち脳裏に歌が浮かんだ。

一　聞得大君ぎゃ
　　降れて　遊びよわれば
　　天が下　平らげて　ちよわれ
ヌ　鳴響む精高子が
ヌ　首里杜ぐすく
ヌ　真玉杜ぐすく（一巻一）

意味は「きこゑおおぎみ（最高神女）が〈降臨して、神遊び（祭祀）をし給うたからには、霊力を受けた国王様は天下を安らかに治めてましませ〉。とよむせだかこ〈聞得大君の別称〉が〈降臨…以下繰返〉。しょりもりぐすく〈首里城内の聖域〉に〈降臨…以下繰返〉。まだまもりぐすく〈首里城内の聖域〉に〈降臨…以下繰返〉」

この歌との出会いは二十年前、夫の転勤で沖縄に住み始めた頃である。新聞の文化欄で目にした「オモロ講座」に、何だかオモロそう、と軽い気持ちで受講した。

「オモロ」は十六世紀から十七世紀にかけて王府が編纂した沖縄最古の古謡集『おもろさうし』に収められた神歌である。「琉球の万葉集」とも称されるこの古謡集には、王府や地方のオモロ二十二巻一五五四首が収められている。「オモロ」の語源は「思い」という説もある。

前述のオモロ（一巻一）は政治的支配者の王が、宗教的権威者の聞得大君の霊力を受けて王国の太平を守ることを歌っている。聞得大君は王の妹か妃が任命され、その下に首里の神女、その下に島々村々の神女が配置され、それぞれの拝所で祭祀を行った。神女は太平や豊穣を祈るだけではなかった。沖縄には「女は戦の魁（ヰナゴー、イクサヌサチバイ）」という諺がある。古い時代、神女たちは戦場で先頭に立ち、男たちが武力で戦う前に呪詛合戦を行った。今も沖縄の女性は強い。

『おもろさうし』は古い言葉で書かれ、また長く埋もれていたこともあり、「一」（始めを示す）や「又」（繰返し）の記号や語彙の意味など未だはっきりしないことが多い。私にとってオモロ講座は謎解きをしつつ古（いにしえ）の琉球を浮遊する時間となった。そして、首里城から下る石畳の坂道（朝ドラ『ちゅらさん』のロケ地！）の下に住んでいた私は、神女に誘われるように、坂を上っては首里城に通った。

首里城は一五世紀初頭に王宮の形が整えられてから内乱や失火などで何度か焼失している。沖縄戦では日本軍が城の地下に司令部壕を置いたので、徹底的に破壊された。それでも沖縄の本土復帰二十周年目の一九九二年、首里城は蘇った。

だが、まだ完全に復元できない所があった。その一つは「京の内」。神女が祭祀を行った聖域で、古には木々が鬱蒼と茂っていた。霊力は天から木々を伝って降りて来ると考えられていたのである。だが、私が通った頃は、低い木がまばらにあるだけだった。ところが二〇一九年春（火災の半年前）、久しぶりに訪れた京の内はガジュマルやソテツ、オオバギ、クワズイモなど南国の植物が生い茂り、神女の祈る声が聞こえてくるようだった。

テレビの画面に目を凝らすと、京の内は、あまり被害を受けていないようである。木々や琉球石灰岩の石垣、そして神女たちの祈りが炎を防いだのだろうか。いつか再び太陽（ティダ）に輝く赤い首里城を訪ね、緑溢れる京の内で、美しく晴れやかなオモロを口ずさみたい。

一　天に鳴響む大主
　明けもどろの花の　咲い渡り
　あれよ　見れよ　清らやよ
又　地天鳴響む大主
　明けもどろの花の　　（十三巻八五一）

「天地にとよむ（鳴り響く）うふぬし（太陽）よ〈光を放射しながら昇る様は花が咲き渡っていくようである。あれ、なんと見事に美しいことよ〉。地天にとよむ太陽よ〈光を…以下繰り返し〉」

（参考　外間守善『おもろさうし』岩波書店）

5G考察

杉浦　右藏

急速な発達　固定電話機サービスを開始して150年になる。日本では自動車搭載移動通信体として40年前の1978年にサービスを開始した。技術的展望では、アナログ方式が第1世代、2000年にデジタル方式が開発され第2世代、第3世代へと発展した。第3世代が複雑で、3・1、3・5、3・9世代へと急進展した。第4世代は技術と設備の関係で頓挫した。結局は3・9世代を3・9アドバンス方式として第4世代と呼ぶことにして第5世代に突入することにした。ドコモは2024年3月で第3・5世代以前のサービスを終了すると発表した。

標準規格の必要性　世界の人間が通信できるためには技術の国際標準が必要だ。モールス通信が発明されてから150年の歴史を持つ国際電気通信連合（ITU）で決めた勧告を遵守した機器を採用する必要がある。5Gは、2015年に2020以降の第5世代ユースシナリオとして勧告された。要旨は三角形で示され、頂点が通信高速大容量化(eMBB)、左に超多数端末接続(mMTC)、右に超高信頼低遅延通信(URLLC)等の目標を具体的に提示した。

基地局と対象範囲が重要　各国は自分たちの案が世界標準に採用されるよう2019年から製品を発売し始めた。メディアはファーウェイ、ノキア、エリクソン、サムソン等の先行ニュース報道として伝えるのみで、装置システムの性能、サービスの範囲と対象、柔軟な互換性など説明していない。各メーカーの広告も細部情報を発表していない。買えば教える状態だろう。買ってガッカリも多かろう。提供サービス社の対象範囲と融通性、拡張性、等の内容が判らないと設備導入は難しい。

周波数割り当て　電波は水の流れと似ている。多く流すには幅を広くする必要がある。電波には使用可能な周波数範囲に制限がある。世界の各国はITU勧告の範囲を工夫して各国とも有料で通信事業者に割り当てている。また誰でも無料で自由に使える部分も指定している。

周波数と届く範囲　電波の周波数をHz（ヘルツ）で表す。NHKの第1放送は590キロHz、テレビは700

メガHz帯、ケータイ電話は800メガ、1・5ギガ、1・9ギガHz帯を主に使っていたが、5Gでは4・4ギガ、4・9ギガHz帯を追加した。更に6ギガ、24〜27ギガHz帯も検討している。周波数が高くなると到達距離が短くなる。800メガHz帯では数キロメートル届くが、ギガ帯になると数百メートル、更にミリ波帯になると数メートルしか届かない。そこで送受信方法に工夫を凝らし、マッシブMIMO方式や多数化小型アンテナ利用技術等を開発した。複数の周波数帯を同時に利用することにより、幅を拡大して大容量情報の送受を可能にしている。

光ファイバーの役割が重要　ケータイ電話機の繋がり方を説明するには長文が必要なので簡単に説明する。無線区間は基地局アンテナとケータイ端末機の間だけだ。上りと下りの回線は別物で、ダイヤル番号はケータイ機が移動するために通話データと別な管理をしている。この三者が一体となっている。要約するとアンテナ基地局の間は交換機が幾重にも設置され、神経の集合経由の形態を成す。特に5G以降の複雑な形態の技術には、光ファイバーネットワークが重要である。

5Gとローカル5Gの話　利用者は5G用の端末機を持たなければいけない。画像には、静止画と動画がある。動画は大容量の回線が必要だ。各種機能のうち使う人の好みを選択する必要があるだろう。スマートホームやビル、スマートシティ、産業自動化、自動車運転などあらゆるモノが5Gの対象となる。競技会場などの数万の観衆が一斉に映像解説などを聞く、視るためには椅子の下に基地局を設ける必要がある。そのため5Gは電波帯の階層を設備することも必要だ。その他、ビルの区画や区画農場の中の作業など、ローカル5Gが使用されると容易に想像できる。対象は無限にある。

5Gの未来　今の時代は通信のみでなく次世代への変革期でもある。ITU勧告が示す5Gは想像も出来ない形で今年2020年に実現することになるだろう。2020年1月に、6Gの総合戦略策定へ総務省が「Beyond 5G推進戦略懇談会」を立ち上げた。人間は近未来の発展を望んでいるが、悪用も同時にはびこり国家間の戦争にも簡単に使える。5Gの進展にはセキュリティの強化が必要で、人間同士の倫理を守る約束も重要だ。

私とラグビー

下山　健夫

　自分は運動神経が無いとは思っていないが、団体球技にはあまり関わってこなかった。昨年度のラグビーワールドカップは事前の盛り上がりは今一つと思っていたが、大成功でにわかファンを多く作って終了した。この状況は今も続いているようだ。

　私にはラグビーには少し苦い思い出がある。営業で当時ビールが社内で最も高いシェアーを持つ地区の一つを任されていた時のことだ。新入社員としてD大学卒のT君が配属されてきて、すでに部下でいたW大出身のK君、当時スター選手ばかりでは無くしっかりしたチーム作りをするという為に採用し、高校全日本メンバーで二十歳になり飲酒ができるようになり営業に配属されたK君と合わせて現役のラグビー部員三名、ラグビー部をリタイヤしたN君と、これまた会社としては初めてのワイン担当女性営業二名合計六名を見ながら、自分も担当を持つということになった。

　当時私はラグビーのルールも全く知らず、アメリカ留学時に全米の有力校として唯一息抜きとして親しんだアメリカンフットボールの知識しか無く、全く似て非なる競技だとの認識さえも持ち合わせていなかった。特にT君は当時全日本のメンバーで翌年ワールドカップでフランス遠征、スポーツ雑誌の表紙にNo８の彼がスクラムから顔を少し上げている所があり、理由が判らず目立ちたいからかと言ってしまい、ポジションからと教えられ大変失礼なことを言ってしまった。翌年のバレンタインデーにはさすがに彼の机の上だけには社外から山のようなチョコレートが贈られていて他のメンバーとご相伴に預かった。

　会社は当時プロとしてでは無く通常の雇用であり、五時半までは酒飯店さんを訪問し、以後週三日は府中の会社グラウンドで練習というハードなスケジュールをこなしており、夏合宿、シーズン中の遠征前は彼らの担当を、残る私ともう一人でカバーする必要があった。T君の二年先輩K君は大学花形WM戦に故障もありながら出場、

自分の所から崩れたことを悔いていた。
　私の様に流れに任せてきた人間とは異なり、彼らは運動という世界のなかで若い時より自分自身の力を相対的に判断し、野球からラグビーへ、又進む学校も自身の判断のもと決めて来ているのは彼らの強みだ。仕事の面でも、すぐに自分の強みを見つけ我々が決めてきたノルマをこなして成果が上がるようになってきた。但し私はラグビーも会社の顔の一つであり、精一杯取り組んで欲しい由言ってはいた。
　当時、彼らのプレーグラウンドはトップリーグの今の秩父宮等だけでは無く、対抗各社の持つグラウンドで行われることもあり、私もなるべく応援に行くようにしていた。幸い彼ら自身の精進でK君、T君両名ともに日本選抜チームへ選ばれたという報告を受け、どこのチームかは忘れてしまったが秩父宮へ、初めてまだ小さかった子供を連れて車で応援にいった。この日はめったに東京では無いことだが雪がやまず、残念ながら試合中止になり両君には控え室から彼らの桜のジャジー姿を見せてもらい、手を振り別れた。息子にまだ幼稚園生だった娘をたくし地下鉄で先に返したが山手線が雪で動かず、私は車を移動して歩いて帰ったが、二人がなかなか帰ってこず心配したのも思い出である。
　現役引退後の彼らはどうかというとT君はラグビー部の監督として部を日本一にして、仕事でも以前に私が携わった事業を統括する等活躍、N君、K君達もそれぞれ十分に社の重要メンバーとして活躍している。彼ら自身の努力が大きいが、若い時から経験を積んだ決断力が評価されているのであろう。嬉しい限りである。
　又数年前、小学校から我々を仕切ってきた同級生から、彼女ら女子高校の同窓会館で講演会があると集合の声がかかった。こんなに多くの男性が参加した講演会は無いとの同窓会幹事のコメントがあったほど男子達が集まった。講演者は我々の同級生、旧姓Kさんが三十代半ばから女子ラグビーを始めて、今女子ラグビー協会責任者をしているのでその紹介と応援を依頼するものだった。私の部下達は三十代前半で引退していると思うと、さすがにわが母校女子のパワーだと脱帽した。

令和元年のフットボール

志村　良知

令和元年のスポーツと言えばラグビーすなわちラグビー・フットボールである。

ラグビーには全く興味も関心も無かった人たちが熱狂し、病院の待合室で爺婆たちが「今夜はスコットランド戦だね」とテレビ観戦の楽しみを話題にした。

実はラグビーは「にわかファン」がグラウンド・レベルで観戦してもちっとも面白くないスポーツである。ラグビー経験者の中には「見せるものではない、自分でやるものだ」と言ってはばからない人もいた。それはラグビーを面白いという人がいないことへの負け惜しみに聞こえた。

世界で最も競技人口が多く、観戦して楽しむ人も最も多いサッカーに比べると、大男がごりごりと揉み合うばかりでいかにも展開が遅い。局面打開の前への大きなキックも折角取ったボールを敵に渡すのが前提だと分かると、キックへの興味は半減する。観衆が最も沸くオープン攻撃も、対戦するチームの実力が伯仲していると高校レベルでもワールドレベルでもなかなか見られない。今回のワールドカップでも、決勝トーナメントになってからは接近戦ばかりで、それが売りのオールブラックスでさえ、オープンにはほとんど回せなかった。

ラグビーという競技のルールは、敵のゴールラインの少しでも近くに陣地を進めないと圧倒的不利になるようにできている。折角のボールを大きく前に蹴って敵に渡してしまうのも、ボールの支配権より陣地獲得の方が重要だからである。

ボールより前に出てはいけないのに、とにかくボールを前へ運ぶ、というゲームの基本原理に忠実な大男たちの献身的プレー、すなわち接近戦が試合時間のほとんど全部を占める。それがラグビーである。

実はこの接近戦がグラウンド・レベルでは勿論、スタンドで観戦していても面白くない。実際、何十メートルも向こうでの微妙なプレーを肉眼で見ていて分かって面

白いと思えるのはラグビー経験者でも一部らしい。
密集の中でのルールは難しい。グラウンドで選手たちがホイッスルの瞬間一斉に審判を見るのは何が起きたのか判らないからだという。その審判が判定を知らせるジェスチャーは二十種類以上ある。にもかかわらず「コラプシング」だ「オブストラクション」だとスクラムやラックの中の戦いこそラグビーの神髄だと「にわかファン」に思わせたのは一体何であろうか。
競技場で実際に観戦した延べ百七十万人の人たちは、経験者か、元々のラグビーファンであろう。大会中に「にわかファン」になった人たちのほとんど全部は、パブリック・ビューイングを含めてテレビ観戦しかしていないのは確かである。
テレビの中継技術は三段階に分けられる。現場で撮影し、それを送る放送局側のハード技術。カメラワーク、編集、実況などのソフトウェア技術。電波を受けて実際に目で見える映像にするテレビ受像機の技術である。
私は以前『悠遊』に2020年東京オリンピックはテレビ中継に革命を起こすだろうという趣旨の事を書いたが、今回の中継はその一端を見る思いだった。一体何台のカメラで追っているのか分からない多彩な映像、すぐさま、そして角度やカバーする広さを変えて、繰り返されるリプレイ、スローリプレイ、それに即座に適切な解説が入る。家庭で見ているテレビ画面は、展開する両軍選手全部を収めるロングショットでも体や動きの特徴、背番号が認識でき誰なのかわかるデジタル高精細大画面。録画して静止画面にしてもその映像は劣化しない。「ジャッカル」でも「オフロード」でも繰り返して見られる。
ラグビーをブームで終わらせないためには、「にわかファン」の足をスタンドに運ばせ、そこで面白いと思わせ、居つかせなければならない。それには試合の質もであるが、「にわかファン」に質の高いテレビ中継を与え続けるのも重要である。プレーする選手と共に「にわかファン」を作ったテレビ中継の責任は重い。

次は『ふるさと留学』を！

清水　勝

昨秋、深山の紅葉を観たいと秋山郷（長野県栄村）に出掛けた。掌編小説の材料探しも兼ねていたので、地域の人とも親しく話をした。

秋山郷は秘境として売り出しているものの、豪雪に見舞われる厳しい環境もあって、人口は年々減少している。

秋山地区には五つの集落があり、五十年前に比べると住民は半減し、現在235人となっている。出会う人々は元気な高齢者ばかりで、子どもの姿は全くない。訊けばここには小学五年生の男児が一人いるだけだという。

何が辛いかと訊くと、皆さんが卒業した思い出深い秋山小学校が、児童のいなくなる二年後には廃校になる可能性があるということだった。住民全員がＰＴＡ会員の心構えで小学校を見守っているだけに、何とか存続できるよう新たな児童が転入して欲しい、と語っていた。

全国の町村では、少子化の影響と都会志向もあって、毎年三百余校が廃校になっている。残されるのは高齢者だけとなり、村や町に活気がなくなって行く…。

返礼品の魅力もあって『ふるさと納税』は定着しており、地方への経済的支援に大きな力となっている。次は地方が元気になる活性化支援を行う必要がある。観光開発もその一つではあるが、地域住民との繋がりは弱い。

そこで提案したいのが『ふるさと留学』である。

調査によれば、小学生の走ったり、跳んだりする運動能力が大幅に落ち、さらには視力も低下しているという。その背景には野外で遊ばず、室内のゲーム遊びが中心となっていることも一因だ。また、自然との交わりが不足しているため、動植物の知識や心の豊かさにも影響があると言われている。

環境の変化によって、子供の成長を促す「ＮＰＯ法人全国山村留学協会」が設立され、いろいろな試みが行われている。年間の山村留学生は五百名ほどであるが、これがもっともっと増えて欲しいと思う。

留学制度には、ホームステイ型、寮・合宿型等がある。一年間となると三十代の親の経済的な負担と、親子が離

れて生活する不安も生じる。

そこで、孫が夏休みに帰省する期間を延長する形、すなわち、親の故郷の小学校に転校し、祖父母宅から一年間通学する孫もどし型の『ふるさと留学』だと受け入れ易いのではないだろうか。

もちろん、本人が「やってみたい」という気持ちが前提で、且つ、祖父母側に孫を受け入れる態勢がなくてはならない。

こうした祖父母と孫の関係を活用した『ふるさと留学』だと受け入れる町村側の負担も小さく、また我が子を転校させることへの両親の不安も和らぐだろう。そして何といっても、お祖父さん、お祖母さんの生きがいにもなる。両親にとっては経済的な負担も小さく、いつでも子供の様子を探ることもできる。副次的には祖父母と親とのコミュニケーションも増すに違いない。

さらにそういった留学児童がいれば、地域の活性化とサポート役を担う高齢者に張り合いも生まれるだろう。また、その地域の子どもにも刺激になるに違いない。

ただマイナス面もある。自主性を育むために親から一年間離しても、祖父母が孫を甘やかしてしまっては意味がなくなるという課題である。

それを防ぐためには、『ふるさと留学』の狙いを祖父母、両親ともしっかり理解しておかなければならない。

その狙いは、

①新しい環境で自主性と積極性を身に付け、成長する

②自然を相手にした野外での体験や遊びに興味や楽しみを見つける（ゲームやテレビ漬けから距離を置く）

③田舎の魅力に気付き、自然や土地の特色に関わる（地域イベントに積極的に参画する）

④地域の子どもや大人との繋がりを持ち、対応力や順応力を知らぬ間に磨かせる

なお、いろいろな事情で田舎を離れた親にとっても、改めて故郷の魅力を再確認できるのではないだろうか。その故郷を思う親の気持ちを、『ふるさと留学』を通じて子どもにも味わわせて欲しい。

《参考》都会の小学校でのイジメ問題から、母親の故郷秋山郷へ留学した今村和人を主人公にした掌編小説『秋山郷での和人くん』を書いた。

羅門の独り言

三　春

うー、さぶっ！　あの人が寝返りを打つたびに僕はベッドから転げ落ちそうになる。ぐーんと大きく伸びをして、まずはキッチンへ。前の公園からラジオ体操の音楽が聞こえてくる。今日という一日の始まりだ。

僕の名は羅門。でも、夜中に退屈してあの人の上に本を落とせば「オイッ、らも蔵！」だし、らも左衛門、らも之丞、らも兵衛、らも吉など気分次第でいろいろさ。

生後三か月で両親から引き離されて売り飛ばされそうになったけど、縁あってこの家の養子になった。だからあの人は母さんじゃなくて三春さんだ。その頃の僕は小豹のように敏捷で野性味たっぷり、絹のような光沢と手触り、輝く瞳ですべての人を虜にしたそうだ。待遇は中の下だけど、妙な服を着せられたり、赤ちゃん言葉で話しかけられたりしないのはありがたい。あれから早や十二年。粋で鯔背（いなせ）な男前のベンガル猫、それが僕だ。

ここにはルイという三春さんの息子も住んでいる。僕にベタ惚れで、帰宅すると真っ先に僕の姿を探すし、時にはギュッと抱きしめるんだ。人間でいえば六〇過ぎのオッサンだぜ、若造に抱かれるなんて真っ平ご免だね。

僕には「開かずの間」なんて存在しない。ドアのレバーに飛びつけば、家中どの部屋だって開けられる。サッシの引き戸だけは歯が立たないけど、ガラスをキイキイ引っ掻いてミャーミャー悲しげにルイさんを見つめれば必ず開けてくれる。でも最近はベランダにもあまり出たくないんだ。窓の隙間から胸いっぱいに風を吸いこんで、空を渡る雁の群れや、蜜を集める蜂や蝶を観察するだけでいい。ルイさんが僕のために窓を開けてくれる、それを確かめたいだけかもしれない。

図体はデッカイけど、見かけによらず繊細でね、病院通いしたこともある。最初はあの恐ろしい去勢ってやつだ。女の子に会う機会すらないのに、僕のための去勢だなんておためごかしに決まってる。二度目はひどい嘔吐を繰り返して憔悴しきったとき。集中治療室とは名ばか

りの狭いケージに監禁されて、入院二日目で危篤状態に陥った。自宅で看取るようにと言われて連れ帰られた僕は、三春さんの不眠不休の看病で三途の川からUターンできたんだ。奇跡的な生還とか不死身の猫とか、医者は苦し紛れのおべんちゃらを並べたけど、僕に言わせればあの医者はぼったくりのヤブだね。見知らぬ顔、相次ぐ検査、投薬、点滴、注射、流動食、その繰り返しが僕を追い込んで生気を奪ったんだ。あれ以来、僕の具合が悪くなっても三春さんは決して病院に連れていかない。僕の生命力と運命に任せようと心に決めたそうだ。

　その後も様々な故障が僕を襲った。その度にげっそりやつれるくせに、一週間もするとケロリと回復するもんだから、「男は皆んな大袈裟ね」とからかわれる。でも、高血糖だけは元通りとはいかなくて、インスリン注射と食事療法（不味い！）で凌いでいる。あ、三春さんがいま注射器を手にした。さぁて、今日はどこに隠れようか。かくれんぼが僕たちの新しい遊びだよ。

　屋上から街を見下ろすと、首輪をしたヒモ付きの犬はいても、猫の姿はさっぱりだ。いつか見た野良猫たちも保護とやらを口実に拉致されちゃったのかな。

　それでこのごろ思うんだ、あてがい扶持に甘んじて惰眠を貪る毎日でいいのかと。だから玄関で待ち伏せて、ドアが開いた瞬間に飛び出してみたけど、階段室をおっかなびっくり探るだけで、本物の脱出まではいかないんだ。生まれてから一度も大地を踏んだことのない世間知らずの僕は、外の世界が怖くてどうしても道路に出ることができない。昔ここで暮らしていたガチャピンという娘は隣のビルに飛び移ろうとして落ちて牙が折れ、モシモシという名の小母ちゃんは夜遊びに出てトラックに轢き殺され、バガボンドなる優男は放浪の旅どころか鬼嫁キキに蹴り殺されたそうだからね。

　そんな臆病な僕だけど、次こそは外の世界に踏み出そうと心に決めている。自由と冒険の世界、路地裏の世界へ。

　ねえ、そこの君、君も一緒にどうだい？

中国はどこに向かうのか

児玉　寛嗣

ソ連の崩壊により、ロシア、東欧圏も徐々に資本主義圏に組み込まれて世界の経済が繋がった。従来から潜在的な大国であった中国も大きな変貌を遂げ、政治は共産主義だが、経済は資本主義というかつてなかった体制の国となり、いまやアメリカに伍するところまで力を蓄えてきた。

人、物、金が国境という垣根を飛び越えて世界中を駆け巡るグローバル化の波が隅々まで行き渡っている。

主役はアメリカや中国のグローバル企業や国家権力に支えられた中国の国営、あるいはそれに準じる企業だろう。儲かるところに人、物、金が殺到する。世界中の経済活動がお互いに関連しあっている。例えば中東で紛争が起きれば地球の裏側も立ちどころに影響を受ける。特に大国の動きは他国に大きな影響を及ぼす。アメリカと中国の貿易戦争、貿易摩擦によって世界中の国が影響を受ける。これをいい加減にしてくれ、というのが反グローバルだ。それを徹底的に押し進めれば、経済の網の目が世界中に張り巡らされた状況で孤立して存在することになるが、それは極端に言えば石器時代にでも戻らない限り難しい。

アメリカと中国の対立というより、アメリカ政府をバックにした巨大グローバル企業群と独裁体制の中国国家の対立という構図のほうが近い。この二つの国家の覇権争いであるが、現状はアメリカがリードを保っている。しかし、中国は主役の座の交代を虎視眈々と狙っている。

それを阻止、あるいは遅らせようという動きがアメリカと日本をはじめ西側諸国で起きている。その動機となる最大の要因は中国の政治体制にある。独裁政治のもと、ウイグル自治区に見られるような少数民族に対する徹底した弾圧、国内での言論統制、自由の制限などがそれだ。海外ジャーナリストの中国の現場へのアクセスが制限されているため、なにが国内で行われているか正確な情報

が伝わって来ない。このことも中国への恐怖心を増長している。アメリカと中国が似たような体制であれば、主役の交代にもそれほどの抵抗はないように思われるが、このような状況がそれを難しくしている。

大国の覇権争いの引き合いに出される「トゥキディデスの罠」という言葉がある。これは、古代ギリシャで当時、既成の軍事大国であったスパルタと急速に力をつけ台頭してきたアテナイとの間の構造的な緊張関係から、転じて、既存の大国とそれを追うように台頭してきた国との間の摩擦や抗争を指す言葉として、アメリカの政治学者が作り出した造語だ。両国間の軋轢に焦点を置いた考え方であり、大国間の貿易戦争などを説明している。

中国政府は三十年前の天安門事件の後、国民の不満の原因は貧しさにあるとの認識のもと、経済力を強化し国民を豊かにすることで不満を解消し、国家体制批判の矛先をかわすという戦術をとった。その結果、驚異的な経済成長を成し遂げてきた。その間、政府と国民の小競り合いはあったものの天安門事件のような悲劇が起ることはなかった。この成功体験を世界中、特に発展途上国とされたアフリカや中央アジア、東南アジア諸国に敷衍することでそれらの国々が中国にすり寄ってくると考えている。それによりアメリカとの主役交代の機会を窺う。

「一帯一路」政策がそのロードマップである。狙いは中国ファースト、すなわち、中国標準の世界標準化、資源の独占、革新技術の卓越化などである。さらに強大な軍事力により世界の警察を演じることである。それらはこれまでアメリカがやってきたこと、または、やろうとしてきたことと大きくは違わない。発展途上国が経済を取るか、人間の自由に重きを置くのかで中国を選択するか否かが決まるのだろう。しかし、中国に分があるようだ。これは植民地時代の頸木(くびき)から解放されたアフリカ諸国など発展途上国に対しての西側諸国のケアに問題があったことのつけでもある。西側諸国がどう巻き返すか、あるいは中国体制に内在する矛盾による自壊を待つか、二〇二〇年代の世界の動きは予断を許さない。

豪雨後の朝倉と農業

木村　敏美

二〇一七年七月の九州北部豪雨から二年後の秋、福岡県朝倉市山間の地、黒川も稲刈りのシーズンを迎えた。この地の一人の米農家の方が主催者となり、以前からやっていた小学生対象の稲刈りの体験学習を、今年も残った農地でする事になったが、人手が足りないというので参加した。

秋晴れに恵まれた当日、大人達は一足先に現地に行き、子供達の弁当を食べる場所を整え、三段になっている田んぼの畦道に人数分の鎌を用意して待っていた。

参加したのは福岡市の小学四年生一四〇人で、三台のバスが並んだ。子供達は三班に分かれ、それぞれの田んぼで、稲を刈る者、受け取る者、脱穀機に持って行く者と役目を決め、それが順に廻ってくるようにして作業を開始した。子供達は戸惑いながらも、声をかけあったり歓声をあげたり楽しげで、私は皆が怪我をしないように見守った。早めに終わった所は、落穂拾いをする余裕もあった。

最後に主催者の方が、稲刈りから脱穀までできる大きなトラクターに乗り、皆の前で刈り残った稲を刈って「今はこうして機械でできるようになったが、米作りの原点は、人力でやる田植えと稲刈りである」という話で締められた。その後子供達は、近くの栗林の木の下で弁当を食べ、見送られながら帰路についた。

この黒川地区は山奥という事もあり道路もかなり復旧したとはいえ、まだ完全ではない。米と梨農家が殆どだったが、その数も以前の三分の一程になってしまったという。それでも主催者の方は、子供達の体験学習を続けるのは、「体験する事で必ず記憶に残る。この文化や思いを伝えたいからだ」と話された。稲刈りの後に、目を輝かしてまだやりたいと言っていた子がいた。心の中でそう思った子や記憶に残った子はもっといるはずだ。

豪雨後の活動として黒川の主婦達が、土砂で埋まった

場所に沢山のコスモスを植え、人を呼び、その花びらでドレッシングを作り商品化した。市では豪雨の土砂を利用して、流域部の農地に真砂土と粘性土を混ぜ、実証実験をして田植えをした。又大学生のボランティァと地元の農家の方達が協力して荒れた土地に共同農園作りをして懸命に復興へ動いている。大震災の地、宮城からは、再生のシンボル桜の木が贈られ、応援の力になっている。

又三十年程前から医師の中村哲氏が「ペシャワール会」を立ち上げ、干ばつに苦しむアフガニスタンで、医療奉仕だけでなく、現地の人々と堰や用水路をつくり、一六〇〇以上の井戸を掘って農業にも貢献していた。戦乱の続く現地で水を確保する方法には、江戸時代に朝倉で創られ今も役立っている山田堰をモデルとされ、何度も朝倉を訪れられている。その交流から朝倉で保存されていた日本の伝統的な農機具、足踏み脱穀機や、藁くずや籾を選別する唐箕（とうみ）という機具も贈られるという。しかしながら氏は二〇一九年十二月に現地で凶弾に倒れ帰らぬ人となった。ガンベリ砂漠に用水路を作って緑の田畑に生まれ変わった耕作地を背に微笑まれている氏は、農業の大切さ、命の大切さ、平和の尊さを語りかけておられるように思う。現地の人々と築き上げたその思いは、江戸時代の朝倉の人々が知恵と工夫で切り開いた農業への思いと重なり、国を超えて大勢の人々の心の記憶に刻まれて残っていくことだろう。

災害の問題は今世界中に広がり、地球環境の問題として捉え、自然と共存していく方法を考えるしかないのではなかろうか。日本の農業の歴史は昔から厳しい自然と闘いながらも、どんな田舎にも鎮守の森を作って五穀豊穣を願い、自然への感謝を大切にしてきた。

昔から伝えられた手仕事の田植えと稲刈り、一束の米の重み、一粒の米の重みはあの日の子供達の記憶に残ったに違いない。

先人の知恵を

川村　邦生

ここ数年、毎年のように全国のいたるところで自然災害が発生している。しかもその規模たるや想像を絶する。

昨年の自然災害にしても東日本は広範囲に襲われ、復旧に多大な時間と労力、費用を要している。

この傾向は今後も続くと懸念され、日本全土いや世界規模で深刻な問題になっている。避けられないことかも知れないが、天災による悲惨な被害のあまりにも多いことには驚かされる。

災害の歴史には先人からの貴重な教えや、メッセージが残されている。むろん先進技術による災害防止策も必要であるが、過去の教えなどを知っておくことも防止につながる。

東日本大震災では、津波の被害が非常に大きかった。それを教訓に、津波からの避難を呼びかける標語として「津波てんでんこ」がいわれている。これは東北地方の一部地域で古くから言い伝えられてきた「命てんでんこ」がその元となっているそうだ。「てんでんばらばら」の「てんでん」に東北特有の「こ」がついた。つまり、津波が来たら、取る物も取らず親兄弟も構わず、各自てんでんばらばらに高台へ逃げろという警句なのだ。これで多くの人が救われた。ともかく津波の危険性があれば自分で自分を守れとの意味だ。

釜石市内の小中学校では、当時登校していた生徒全員が生存し話題となった。「釜石の奇跡」といわれた。日頃から「津波てんでんこ」を標語にして防災訓練をしていたからだ。一方悲惨な結果となった宮城県石巻市大川小学校では、生徒職員併せて１００名弱が津波に飲み込まれて亡くなった。生徒の一部は裏山に逃げたが、殆どは集団となり北上川堤防付近に避難した。そこに北上川を逆流した想像を絶する津波が襲い皆を飲み込んだ。

日頃避難訓練は行われていたが、残念ながら「てんでんこ」は教えられていなかった結果であった。過失がなかったかが裁判で話題になった津波事故だ。

過去の大津波でたくさんの被害者が出た所には、津波到達地点を表わす石碑が残されていたり、また、津波被害を地名として残すケースも全国各地にある。宮城県名取市余田では先の震災時、津波で多くの人が亡くなった。「余田」は東北の一部地方の方言で「津波」そのものを表す言葉である。

大阪の難波は浪速ともいわれる。この言葉も津波そのものだ。先人の知恵が地名、言葉に残っている。

災害が起こった後ハザードマップが注目される。それをチェックすることも重要だが、古くからの情報で災害発生の可能性が高い地域がわかる例もある。古地図には過去に先人が残した様々な情報が詰まっている。

千曲川は流域が曲がりくねっており氾濫場所が多い河川として古くから有名であった。新幹線の車両が浸かってしまった赤沼地区は地名そのものの沼地跡だ。

先人は次世代へ名前で土地の状況、危険性を引き継いでいる。

長い歴史の中で天変地異にあった場所は多い。その災害状況を地名に残すことで、次世代は災いを予見し身を守ることができると考えたのであろう。

時の流れの中で地名が変わり表面的には過去の災害状況や現在の危険性がわからなくなっている。

土地開発が進んだり、市町村合併などにより地名が変わってきている。その結果、先人からの伝承が消えていく。加えて、聞こえが悪い地名は変えようとか危ない地名を隠す意図もある。

疑わしい地域での住まいを変更することは簡単ではない。住む場所の歴史、古地図を調べよく知っておく、その認識を高めておくことが求められる。

先人からの知恵を無視してはいけない。さらに大きな災害を被ることになる。

変わりゆく街渋谷

川口　ひろ子

目下渋谷駅周辺は１００年に一度という大規模な再開発が進行中だ。地下鉄銀座線渋谷駅は東に移動し、多くの建物は高層ビルに生まれかわっている。そんな変わりゆく渋谷の４つのビルに纏わる思い出を書いてみた。

★東急文化会館から渋谷ヒカリエへ

１９５６年渋谷駅東口にプラネタリウムを持つ東急文化会館が誕生した。しかし当時の文化娯楽の中心は星空ではなく映画だ。１階のロードショウ劇場パンテオンの他に、地下１階と６階に３軒の映画館があり繁盛していた。２階フロアには洋品雑貨を扱う銀座の老舗が勢揃いし、５階には三省堂が支店を構えていた。今思えば、どの階にも知的で落ち着いた昭和の雰囲気が満ち溢れていた。ほぼ50年の間親しまれた東急文化会館は２００３年に閉館、跡地に２０１２年地上34階建ての複合ビル渋谷ヒカリエが誕生した。開館間もない頃訪ねたが当時最盛期だった若者向けの雑貨小物のオンパレードで、驚くやら戸惑うやら、消費の変化の凄まじさを思い知らされた。

★東横線渋谷駅から渋谷スクランブルスクエア東館へ

かつての東横線の素朴でいかにも山の手の郊外電車ですといわんばかりの佇まいが好きであった。私は約10年間この沿線にある会社に勤めたことがある。時代は高度成長期、勤務先は急成長していて仕事は質、量ともにきつかった。実力不足に苛立って何度か転職を考えた時期もあったが、何故かこの頃が私の生涯で一番充実していたようにも思える。

思い出多い渋谷駅は地下に潜り、跡地に２０１９年11月高層複合ビル渋谷スクランブルスクエア東館が誕生した。地下より14階までは物品販売、その上45階まではオフィス、屋上は展望台だ。開店間もない頃訪ねたが、１階の人気沸騰のスイーツ売り場には見物客が殺到して大混乱。超高層ビルに変身した駅にのんびりとした昔の面影を追うのは無理だ。早々に退散した。

★東急プラザから渋谷フクラスへ

約50年の歴史を持つかつての東急プラザ、私は開店当時からお得意さんだ。Ｂ１の食品市場や大部分を占めるレディスファッションの店、書店、カルチャー教室、レストラン等、衣、食、教養と、全館が女性にご奉仕を打ち出しているかの様なビルであった。２０１５年建物老朽化の為閉館となり、２０１９年12月高層複合ビル渋谷フクラスとして再開した。

早速思い出の地を訪ねてみた。地上18階建て、１階はリムジンや長距離バスのターミナル、中間階は商業施設、高層階はオフィスゾーンだ。期待の東急プラザは昔のように全館ではなくビルの中間階のみで、かなり縮小した感じだ。夢よもう一度と意気込んで出かけたが寂しい限りだ。このビルの多くの部分を占めるのは今日急成長しているＩＴ産業のオフィスだ。私はこのような世の中を生きているのだ。頑なに昔に拘るのはやめよう。時代に置いて行かれる。

★東急東横店からスクランブルスクエア西館へ

２０２０年３月末、東急東横店は営業を終了し、７年後には超高層ビルスクランブルスクエア西館として再開する。以下若い頃から今日まで長いお付き合いの東急東横店の思い出を少々。

敗戦から10年余り昭和30年代の駅周辺にはまだ多くの闇市が残っていて、現在のハチ公広場は水天宮、浜町方面への都電のターミナルであった。

当時の東横店は上流様御用達の店で私が買物できる様な百貨店ではなかった。しかし西館８階にあった歌舞伎を演ずる東横ホールにはよく通った。邦楽や落語ファンの両親の影響で私も芝居が好き。客席に座ると忽ちお江戸の昔にタイムスリップだ。そこは、気兼ねなく自分自身でいられる私の特等席であった。

あれから60余年、思い出多い渋谷の街はＩＴを核に、大変身中だ。私の感傷は胸の奥に仕舞って置き、新しい渋谷でゆっくりと自分の居場所を探すことにしよう。

世間の常識に取り残されて

大野　昰

最近日本の新聞に載る記事を見ると違和感を感じます。一例を挙げると「年金だけでは定年後が心配で、定年までに二千万円を貯金する必要がある」という趣旨の記事が紙面を賑わせています。

僕がこの話に納得できないのは、「自分の財産は死ぬまでに使い切る」という発想です。

この議論の延長上には年金を何歳で貰うと一番得をするか」というのもあります。

兎に角重箱の隅をつついておおらかさがありません。

僕の考えでは、「生きている間は世間から一目置かれるような生き様をする」ことです。その為には生きている間の年間収支を常にプラスに保つことを勧めます。

我々の年代は恵まれていて気が付けば「二度目の就職の給与と年金プラスアルファーが同レベル」ということになっていました。

何故それが変わったのか。昭和も終わりに近づいた１９８０から９０年代にパイオニアという会社が中高年管理職の大量首切りを実施したのです。これが現在も続く給与が上がらなくなった引き金でした。

ではその時までは貰えた我々の給与は何処に行ったのか。どうも役員給与と配当に回ったようです。

赤字会社の社長が一億円以上の年収がある、などはその典型例です。今の後輩は気の毒ですが、それには思想の問題もあります。我々の世代はカール・マルクスを信奉し組合運動に精進しました。もう一人マックス・ウエーバーを加えてもよいでしょう。この二人から資本主義の本質について叩き込まれていました。

我々が新入社員だった頃は、客先に行っても「俺は京大で滝川学長を缶詰にした」などという豪傑がいて、学生運動ができない奴は付き合っても貰えない、という雰囲気がありました。それがいつの間にかごますりばかりの企業社会に変わってしまったのです。「大企業は不沈戦艦」という意識がサラリーマンの堕落を招いたのではないでしょうか。それが平成不況の原因です。

最近違和感を持つ言葉に「就活」があります。少なくとも我々の世代には無縁の言葉でした。

私の学科では就職を何と言ったか。「都落ち」。

優秀な奴から学校に残って「目標はノーベル賞」。企業も「欧米に追いつけ、追い越せ」で社員の勉強に協力を惜しまなかった時代でした。今、吉野さんの受賞で、旭化成が企業で最初のように言われていますが、これは単純にマスコミの不勉強の結果です。

われわれの時代から帝人の大屋晋三さんは社員にフルブライトの試験を受けさせ合格すれば会社の金をつけて留学させていました。それが根岸英一さんです。

何故都落ちかは説明がいるかも。当時は工業地帯と言えば京浜地区、四国の別子と北九州、それに軍関係の施設を利用した四日市、岩国、徳山などがコンビナートとしてやっと出発する頃でした。千葉では川鉄がやっと製鉄所を建設中で、石油化学はまだ先の話でした。

京浜地区にある限られた会社を除けば、大多数の企業は西の方に工場を持っていました。そこに行くのですから、東京の学生にすれば都落ちです。

我々の同窓会は五月と十一月に東京か京都でしたが、これは学会の時期と場所に合わせたものでした。

もう一つ気になる言葉に「終活」があります。

正直言ってまだ何も考えていません。現状は大動脈弁を牛の心膜に取り換えて、身体障害一級ですから、猶予はないと思うべきでしょう。医者には不整脈の対策で七種の薬、今でも四種の薬を飲まされています。免疫力が落ちているのが心配です。やっと欧州まで飛行機に乗れるようになりましたが、医者から見ると心配の種のようです。

弁の寿命は十年から二十年。十年経ったらその時の技術レベルで考えよう、と構えています。その十年で何をやるのか、やれるのか。

へそ曲がりなので、「収支のバランスをとる」のモットーを守って行きます。何故できるか。死んだときに自分と一緒に消えるものにしか興味がありません。

買い物には全く興味がないのです。死ぬときには持って行けません。幾つになっても「知識の吸収」にスティックしています。

デッキチェアトラベラー

大森　海太

ヒマなときに歴史の本などをめくっていると、世界中に行ってみたいところが山ほど浮かんでくる。OBペンクラブ諸氏からは駐在時代、あるいは退職後、海外のアチコチに旅行された話を聞かされることが多く、じつに羨ましいが、資力、体力、孫の相手などで思うにまかせない。というわけでもっぱら開高健いわくところの、デッキチェアトラベラー（書斎の憂鬱）の世界を駆けめぐっており、その一端をご披露したい。

まずは文明発祥の地メソポタミア。いにしえのシュメール人の都市国家跡やバビロンの都などは砂に埋もれて、どれほど残っているか分からないが、せめてバグダードなりとも行ってみたい。

そこから肥沃な三日月地帯、シリア、パレスチナなどテロ多発地帯を抜けてエジプトに至る。以前カイロ近郊ギザのピラミッドに行ったとき、乗せられたラクダが突然走り出し恐くてしがみついていたら、土産物屋の前でピタリと止まったのには恐れ入った。

アフリカ大陸北岸を西に進み、かつてのカルタゴ（現チュニス）、『望郷』のアルジェ、モロッコのフェズ、マラケシュ、ハンフリー・ボガードの『カサブランカ』など垂涎の地を経由してイベリア半島に渡る。

スペインは多文化の国で、マドリードとトレドには訪ねたことがあるが、そのほか北の聖地サンチャゴ、レコンキスタ発祥のレオン、異色のバスク、南のアンダルシア地方にはセビーリャ、コルドバ、グラナダなどイスラム統治時代の余韻が色濃く残されている。さらに東のカタルーニャ地方は言葉が南フランスの方言に近く、最近は独立運動でニュースを賑わせた。

そこから地中海を東に進むと、死ぬまでに一度は行ってみたいと思うのがシチリア島である。最初に入植したのはフェニキア人（一部ギリシャ人）、ポエニ戦争のあと古代ローマの支配するところとなり、その後イスラム

勢力が根を張ったが、十二世紀ノルマン人が王国を築き、その跡を継いだフリードリヒ二世（フェデリコ）、アンジュー伯シャルルに続いて、十三世紀後半からアラゴン連合王国（後にスペイン）の所領となり十八世紀にいたる。歴史好きにとってこんな面白い所は滅多にない。

　ヨーロッパ本土に渡れば、歴史的遺産は数えきれないほどあるが、敢えて一つに絞れば、かつてのブルゴーニュ公国からハプスブルク領となり、オランダ独立戦争を経て今のベネルクス三国の一部となったあたり。さらにその南で、カール大帝のカロリング王国が三分割されたうちの中央フランク、近世ではエルザス・ロートリンゲン（アルザス・ロレーヌ）となって、独仏で取ったり取られたりした一帯。これらはヨーロッパの歴史を語る上で欠かせない地域である。またそこから少し足を延ばせばワインで有名なブルゴーニュ地方。まあこのあたりでゆっくり二〜三ケ月遊べたら愉しいでしょうナ。

　そのほかにもヨーロッパで行きたいところを挙げればキリがないが、いったんフリダシに戻って、メソポタミアから今度は東に目を転ずると、まずはイラン。イランの思い出については別稿（八〇〇字）に譲るが、アケメネス朝に始まるペルシャの文化は古代ギリシャ人の憧れの的であり、ヘレニズムとなり、またローマ帝国以降の西欧文化にも深く影響を及ぼしている。

　アレクサンドロス大王の遠征をたどって東進すればインダス川に至り、その先はインド。ムンバイとコルカタには仕事で何度か訪れたが、イヤいろんなことがありましたっけ。

　さてインダス川を北上するとソグディアナ。ここにも古来さまざまな民族が去来したが、古くはイラン系のソグド商人。唐のみやこ長安には胡人が胡服、胡瓜などをもたらし、かの安禄山もソグドの出身であった。十三世紀ソグディアナはチンギスハンの蹂躙に遭い、十四世紀にはティムールが都を置いた（サマルカンド）。

　所謂シルクロードに添ってさらに進めば、パミール高原、タクラマカン砂漠、河西回廊を経て中華の地に至るが、紙数が尽きたのでひとまず筆を擱（お）く。

石上露子と杉田久女

大平　忠

石上露子（明治十五年～昭和三十四年）は、歌人であるが、生涯で作った唯一つの詩「小板橋」は、絶唱として名高い。

小　板　橋

ゆきずりのわが小板橋
しらしらとひと枝のうばら
いづこより流れか寄りし
君待つと踏みし夕べに
いいしらず沁みて匂ひき

今はとて思ひ痛みて
君が名も夢も捨てむと
なげきつつ夕わたれば
ああうばらあとも止めず
小板橋ひとりゆらめく

杉田久女（明治二十三年～昭和二十一年）は、近代俳句の先駆けをなした女性俳人であり、以下の代表句は、俳句を嗜む人にはよく知られた句である。

花衣ぬぐやまつはる紐いろいろ
谺して山ほととぎすほしいまま
足袋つぐやノラともならず教師妻

この二人の女性に共通するのは、感性の瑞々しさに加え古典への造詣も深く、その美貌でも名高いことだった。そして、いずれも結婚生活が不幸だったことでも共通していた。二人とも、連れ添った夫が妻の創作活動に理解なく、心が通い合う夫婦とは言い難かった。さらに二人には追い打ちをかける不幸が続くのだった。

石上露子は、本名杉山孝、大阪富田林の、室町時代に遡るという大庄屋の跡取り娘として生まれた。幼児より古典に親しみ、九才から歌を詠んだという。想いを寄せた大学生と結ばれることを許されず（このとき二十六才、「小板橋」発表）、親の定めた奈良の大地主の三男を養子に迎える。この夫が妻の文筆活動を嫌って結婚後作歌は途絶えた。第一次世界大戦後、夫は家の資産の三分の二を失い、家長の責任をすべて放棄、精神を病んだ。この時露子は三十九才。家政の立て直しも肩に背負う。五十才の時、長男京大生、次男三高生と、京都にて親子三人

の生活を始める。これを機に作歌活動を再開した。しかし、その後も不幸が襲う。露子六十才の時、長男が結核で病死、次男はそれから十五年後に自殺を遂げた。露子の晩年は寂しく、富田林の大邸宅で一人亡くなった。

杉田久女は、本名杉田久、大蔵省勤めの官吏の三女として生まれ、東京女高師を卒業し、恵まれた境遇の女性であった。親の望む縁ではなく、東京美術学校の洋画科を優秀な成績で卒業した芸術家を選んだ。小倉中学の美術教師の妻として九州小倉に住んだが、教師としての生活に安住し、芸術に取り組まぬ夫に次第に不満を募らせた。主婦となって覚えた俳句にのめり込むや、夫は妻の俳句作りを嫌い、夫婦仲は冷たくなっていった。

ところで、久女は純真一途な性格で人間関係には無防備なタイプだった。信ずる人には心を全開、頼っていくが、相手は逆に次第に重荷になるのだった。参加した高浜虚子の「ホトトギス」では、早くにその句は認められ頭角を現したが、虚子から本人の気付かぬままに疎んぜられ、昭和十一年、「ホトトギス」を理由も言われず破門除名された。久女は、その後鬱々とした日々を送る。終戦の年、空襲の恐怖も重なったか、精神の破調を来す。十月精神病院に入るも、この年の極寒と栄養失調が主因で翌二十一年一月逝去。虚子は久女の死後も負い目があるのか、破門をした言い訳を綿々と書いている。しかし、それらを読むと内容は虚子の名を汚すとしか思えない。

久女にとってさらに不幸だったのは、彼女をモデルにした小説が、松本清張と吉屋信子によって書かれたものの、いずれも虚子よりの偏った資料と見方によって、歪んだイメージを長く世に蔓延させてしまったことである。

これらは、田辺聖子の五年がかりの労作『わが愛の杉田久女　花衣ぬぐやまつわる……』によって、偏見と誤謬が正され、久女の真の姿が漸く確立されたといえる。

この薄幸な二人の生涯に影を落とした明治生まれの男性たちの女性観は、諸事革新された明治維新でも旧態依然、大正、昭和になっても良妻賢母が一般の常識だった。戦前、男女同権の女性観の醸成が遅れたことが、今も、日本の女性進出が諸国に遅れを取っている遠因であろう。

渋沢栄一と労働問題

大月　和彦

新一万円札の顔になる渋沢栄一は、明治から大正期に日本初の銀行の設立や製紙・鉄道・ガス・建設など数多くの企業・事業を立ち上げた実業家であり、「日本資本主義の父」と呼ばれている。産業経済面での活動だけでなく、医療、福祉、教育などの事業にも力を注いだ。１９１６年(大正５)、七七歳で実業界から引退した後は、社会格差の解消や労資協調など社会事業と労働問題に取り組んだ。

昨年、渋沢栄一の孫娘鮫島純子さんから「祖父栄一に学んだこと」のお話を聞く機会があった。鮫島さんは、祖父は弱い立場の人への思いやりが強い人で、大正期に起こった労働運動に理解を示していた。当時社会の関心を集めた製糸工場の労働争議では労働者側に同情してアカ呼ばわりされたこと、労資融和の団体「協調会」を設立したことなどの話をされた。数百に及ぶ会社の設立や経済界の組織づくりに関わった実業家渋沢栄一のもう一つの側面であった。

第一次世界大戦の好景気とその後の景気停滞で、産業界では賃下げや解雇が労働者を直撃し、三菱造船、八幡製鉄など各地で労働争議が発生した。革命的労働組合主義の影響もあり労資の対立が激化し、争議は長期化した。さらに米騒動を契機に農民運動が盛んになり社会問題になっていた。

実業界を退いていた渋沢は、原敬内閣に資本家と労働者の協調をはかるため労資協調機関を作ることを提言した。政府や実業界に反対意見が多かったが、発起人の選任や基金の募集など設立準備に奔走し、１９１９年（大正８）財団法人「協調会」が設立された。会長に貴族院議長徳川家達を担ぎ出し、渋沢は副会長に就任した。理事に社会政策学者と内務官僚を起用した。

労働問題について、渋沢は次のように述べている。「労働問題という波は年一年、日一日高くなっている。これからも紛糾するに違いなく、ゆるがせにすべきでない。安定した労資関係のためには労働組合も必要、と説いてきた。資本家と労働者の間に立って調停の労を取りたいという自分の初志を実現するため、床次内相から相談を受けて作ったのが協調会である。くり返し言う。協調会に対する自分の覚悟は、素より確乎たる意見・確信があるわけではないが、天より与えられた使命として余生を注ぎ、至誠を以てこれが玉成を期する決心である。」（竜門雑誌１９１９年）

当時米国で起こった排日運動は日米関係を悪化させており、渡米経歴の多い渋沢は事態を憂慮していた。米国の知友から、排日運動の根源は雇用の問題であり、米国労働組合の問題である。米国の労働者大会に日本の労働者代表を派遣してはと忠告を受け、労働使節を派遣したことも労働問題の理解に役立ったと述懐する。

社会運動家で早大教授安部磯雄らと相談して、労働組合の全国的組織友愛会（後の日本労働総同盟）の鈴木文治会長を労働使節として派遣した。出席した鈴木は堂々所信を表明し出席者に感銘を与えたという。渋沢は以後、友愛会と鈴木文治に対し支援している。

協調会設立後、渋沢は責任者として精力的に協調会の活動を行った。理事会、幹部会などへの出席のほか労働争議の調整にも当った。暴力団の介入や児童の同盟休校など泥沼化した野田醤油争議には陣頭指揮をとり終結をはかった。日記に「…野田醤油に争議起こり、既に二百余日に及ぶ。栄一之を憂え、鈴木文治、松岡駒吉と種々折衝し、当協会の添田敬一郎理事をして調停に立たしめ、この日解決す」とある。

渋沢の没後、日比谷公会堂で開かれた協調会、東京市、中央社会事業協会、国際連盟協会共催の追悼会で、「渋沢翁と労働問題」の講演が行われた。

生きる事と食べる事

大津　隆文

十年余り前の或る日、ふっと高校時代の英文法の授業を思い出した。不定詞を習った時の例文が「Man eat to live, not live to eat」。即ち人は生きるために食べるのであって食べるために生きるのではない、だったことだ。若かった私には人はそうあるべきと印象深かった。

そんな記憶がよみがえったのは、当時自分の境遇が大きく変わったためだ。二〇〇七年に六七歳で仕事から完全にリタイアした私は目の前の自由な時間をどうやって過ごすか戸惑っていた。生きていく目標を失い毎日食べるために生きているようで情けない気がしていたのだ。

これまでの人生を大きく区切ると、生まれてから学校を出るまでの学習期、社会に出て仕事に励んだ勤労期となるが、では次なる第三期をどう生きたらいいのか（これは古代インドの人生の四区分、すなわち学生期、家住期、林住期、遊行期では林住期になろうか）。途方に暮れて先輩や知人の意見を聞いてみたところ、

「これからこそ人生の黄金の収穫期、大いに楽しんだらいい」「一日一日を大切に今日が人生最後の日と思って愛おしんで（いと惜しんで）過ごされよ」「今日この日から新しい人生がスタートすると考え前向きに生きてほしい、チャレンジに遅すぎることはない」「後は死へ向かっていくだけ。安心立命の境地に如何に達するかだ」等々の貴重なアドバイスをいただいた。それぞれに説得力があり出来るものなら是非実行したいと思った。

中でも安心立命の境地というのは魅力的だが、人生の終末についての切迫感はわかない。どうすべきか迷っていた二〇一〇年末のある日、いいアイディアが浮かんだ。その日から三千日過ぎると自分は七九歳、ちょうど当時の日本人男性の平均寿命だ。これから毎日、一食一食を大切に食べていこう。それが三千日も積み重なれば「もう自分は十分食べた。平均寿命にも達したので思い残すことはない」という心境になれるのではないか。

このプランを実行し始めた当初は一回に三十分くらいかけて大切に食事を食べていたし、残りはあと何日とき

っちり数えていた。しかし、時とともに日数のカウントは月単位となりさらに年単位となり、気がついたら昨年（二〇一九年）三月に三千日目を迎えてしまった。ところが十分食べ切ったという心境にはほど遠く、まだまだ食べたいという気持ちに変わりはない。

確実に訪れる人生の終末を本気で自覚し、その日を平静に迎えられる心境に達するのは容易ではなさそうだ。千日回峰行のような厳しい修行で目指す境地を、三千日とはいえ食事で代替しようとするのは安易にすぎた。

人生の第三期を迎えた私が戸惑っていたのには後半生をかけてやりたい目標、あるいは打ち込むことのできる趣味を持っていなかったこともある。家内もこれから毎日家にいられるのだろうかと心配、いや警戒していた。

しかし幸いそれは杞憂だった。縁あって俳句を始め、また高尾山へのハイキングにはまったのだ。二つのハイクはともに費用が余りかからず経済的であり、基本的にはマイペースで没頭できるところが私の性分に合っていた。さらにOBペンクラブに入会できたのも大きい。多士済々の仲間から大きな刺激を受けている。

この第三期のありがたいことはストレスから解放されリラックスして過ごせることだ。仕事はやり甲斐があるがストレスがつきものである。反面仕事を離れ社会との関わりがなくなるのは気楽だけど寂しい。この点で様々なボランティア活動によって社会貢献と生き甲斐を実現しているシニア達は立派と尊敬する。だが、ボランティア活動にもストレスはあるだろうから私には荷が重い。

こうして人生の最終コーナーを日日是好日と平凡に過ごしているが、一番幸せを感じるのはやはり食べることである。育ち盛り、食べ盛りが戦後の貧しい時代だったので、ひもじい思いをしなくていい時代になり本当に嬉しい。また、食べ物に対する好き嫌いは全くなく「ハンガー・イズ・ザベストソース」で、何を食べても美味しいのはありがたい。

食べるために生きるのは次元が低いかと悩んだ。しかし人生の第一、第二期では食べること以上に大切なことがあるが、第三期では食べることが幸せの源泉になっても、凡人には許されるのかもしれない。

さてあと何回食べることを楽しめるのであろうか。

縄文文化の新しい知見

大越　浩平

縄文時代は、日常の生活や祈りの中に、高い文化を築いていた事が、（心理学、文化人類学、宗教学、民俗学、言語学、神話学、哲学等の知見を取り入れ）次々に判明してきた。高度な技術によって作られた、途方もない迫力ある造形美を表している土器や土偶の数々。

岡本太郎は「これらを見た時、心がひっくり返る思いだった。人間生命の根源。その神秘を凝集し、付きつけた凄み。私はかつてこんなに圧倒的な美観にぶつかったことはなかった」と驚く。幕末から明治を生きた漂泊の画家、蓑虫山人は亀ヶ岡遺跡で縄文土器の発掘を行い、収集品を描き、土器を花入れ等の道具にして楽しみ、茶道の旦那衆たちも「亀ヶ岡物」として珍重した。

２００９年、ロンドンの大英博物館の「ザ　パワー　オブ　ドグー」の特別展では2か月半に7万8千人を超える人々が訪れ、ベルギーの展覧会でも好評を博し、仏国や英国からも人がやって来て、彼らは「日本にはピカソが何人いるんだ？」と驚嘆した。

日本では従来、縄文時代が野蛮で原始的な時代と軽視されてきたことには、理由がある。

明治維新後、日本は天皇制に始まり、近代国家であることを世界に示すため、弥生時代以前は野蛮な原始時代として無視してきた。また戦後は生産性の向上が人類を発達させるという考えが主流を占め、1万年以上たいした生産性も上げていない縄文時代は眼中になかった。

現代人は、合理的で科学的な思考、経済的な価値観を至上とする世界に生きている。縄文人は、男性は狩猟、漁労、女性は採取で、1週間に15時間くらい働く。後の時間は家事育児、家の建築修繕、日常的に使う道具や、縄文人の精神文化を表す道具、土器を創り、祈りの場であるストーンサークルの建設整備、そして葬祭等、結構計画的な生活をしていた。

縄文人は、春分、秋分、夏至、冬至を、山々（神奈備）に太陽が昇り、沈む地点から認識し、春夏秋冬の季節の

変わり目を知り、四季に合わせて狩猟、漁労、採取、栽培を行い、いわば旬の食材を計画的に求めた。生きるだけの食糧があれば十分で、積極的に貯めることをしない。

縄文時代の平均寿命は、15歳程度と言われ、30歳位で寿命が尽きる。乳幼児の死亡率は高く、生と死が日常的にあった。誕生を喜び、死者を悼み弔い、再生を願う祈りがあった。そこに土偶が生まれる。

土偶については納得出来る説明が少なく、歯がゆかったが、縄文人は死と再生、甦りと祈りを、月に託したという学説を見つけた。満月は欠けはじめ、新月になって闇が訪れ、再び光を放ち、満月となる。そのサイクルは女性の生理とも重なり、呪術宗教的な心性が生まれる。土偶は様々な思いや祈りを込めて創られたものだと言う。思いが叶うと壊されたり、修復して再活用されたものもあった。自立型の土偶が出始めると（5千年前）頭は少し上向きで、ポカンと口を開け月に向かってポーズをとっている。縄文人と月と土偶の関係はまだまだ深い。

縄文人生活の一部を紹介してきたが、縄文人は1万6千年以上前から竪穴住居に定住しはじめ、世界最古と言われるユニークな土器を創りだし、争いごとは殆んどなかった。そんな生活をしている縄文人が創り出す、奇妙奇天烈な土器や土偶を創り出す精神世界、生き方に想いを馳せる。これからの縄文考古学には、学会の枠を超えた、タブー無き横断的な研究を期待したい。

地域ごとの特性を生かし、1万6千年以上自然と共存共栄した縄文人の文化は、日本人の心の原点といえる。花見、紅葉狩り、月見、雪見等、四季を楽しむ心は縄文精神そのものだ。

昨年は天皇の代替わりに伴う「大嘗祭」が行われた。神に献上する、麻織物と麻衣服「あらたえ」に、絹織物と絹衣服「にぎたえ」が神座に置かれる。神饌においては「粟」と「稲」が献上される。麻と粟は縄文人の象徴であり、絹と稲は弥生人の象徴だ。この祭祀は縄文と弥生の共生を示す。縄文文化が脈々と引き継がれている。

私の履歴書

大泉　潤

昭和十一年に生を享け、八十四年経った。日本人男子の平均寿命に近い。お蔭様で人生多くの経験を積むことができた。過ぎ去りし日々を懐かしみ記録にとどめたいと思う。

生まれは名古屋市中区、今のテレビ塔の近くであった。両親は一旗揚げようと東京に出て、神田神保町の錦華公園の近くに住まいと事務所を構えた。父は印刷関係の仕事で、各大学の卒業証書ほかの印刷物の原稿、表札、ゴム印の文字を書いていた。書体は楷書、行書、篆書、などすべてに通じていた。

昭和十四年太平洋戦争の激化によって、世田谷区へ移転した。京王線の駅から甲州街道を西へ、そして竹林の中の寂しい道を行くと、建てたばかりの住宅が十棟ぐらい櫛比している。そこで烏山小学校へ入学した。なぜか学芸会の舌切り雀のお爺さん役を仰せつかった。机を並べた舞台の雀のお宿に招かれ、重箱のご馳走が出た。美味しいお芋が入っていた。

三年になると都心の爆撃で空が真っ赤に燃えるようになった。父は湯治先の城崎温泉へ疎開する決心をした。夜行列車の窓から眺めた琵琶湖の広さが今も目に浮かぶ。

あてにしていた宿は舞鶴に近く、傷痍軍人の施設になっていた。食料不足で、買い出しに行っても農家は売ってくれない、山奥で開墾した畑で握りこぶしくらいに大きくなった南瓜は気がつくとなくなっていた。志賀直哉の『城の崎にて』の情緒の香りは味わった。

終戦となり杉並を経て、渋谷区に落ち着いた。オリンピックセンターは、当時米軍将校の宿舎があり、将校の奥方から地元の中学生に、英語の指導をして頂いた。クリスマスにご招待があり暖房完備、豪勢な料理に目を丸くした。

高校、大学は幸い自宅通学で友人の誘いで始めたラグビーに打ち込むことができた。日本経済の高度成長期にあたり、勃興期の高度成長を謳歌する石油化学会社に入社した。会社退職まで主として合成樹脂の開発営業に携

わった。おかげで日本国中、関東、関西、九州の各地を転勤した。合成紙の種を求めて米、加、独、仏、英、北欧を一か月かけて三人で探索したこともあった。これが今や雨風に強い広告用紙、折り畳んでもすぐ開く選挙投票用紙として花開いた。

余暇のスポーツとして、全三菱のラグビーに参加し、関西、九州の各チームと転戦した。今でも親しく交流が続いている。其のご縁もあって、退職後日本ラグビー協会の事務局に奉職した。世界のラグビーチームと連絡を取り、遠征、受け入れの折衝なども担当した。国際ラグビー協会のバーナム・ピュー会長、英国ラグビー校のピーター・グリーン校長の穏やかな人柄は特に魅力的だった。

わが人生最大の遺産はラグビー場二面の建設である。日本ラグビー協会代表チームの練習グラウンドとして江東区辰巳に、一橋大学ラグビー場を国立市にいずれも最高のスペックで完成した。これが小生の遺産です。

ハイカイクラブ

内田　満夫

あるグループの入会申込書の趣味欄に、「徘徊」と初めて書いたのが三年ほど前だ。

リタイア後のシニアライフを模索するなかで、徐々にできあがった自分なりのスタイルがあった。人には「街歩き」と説明していたのだが、ある時ハタと気がついた。自分のやっていることは、世間で話題の「徘徊」ではないのかと……。

週に数度、六甲山裏の塒を「家出」して、神戸おもてに出動する。美術展、映画、ギャラリーを中心に、各種イベント、フェア、見学会、体験会などを覗く。話題や珍奇なスポットを探索し、プチグルメも味わって一日を過ごす習慣が定着していた。

「老人が徘徊して何が悪い」と開き直ったつもりだったが、元の字づらのままではさすがにイメージが悪い。そこで「ハイカイ」と称することにしたのだが、片仮名になったことで印象が一気に明るくなった。ハイには「High」、「ハイカラ」、カイには「快」の心地よい響きもある。ハイカイに必要なのは、好奇心と遊び心と少しばかりの小遣いだけだ。

「家出」だから、「一人」が基本である。家族やご近所や職場などの日常から脱出して、自分の行きたいところへ行き、見たいものを見、会いたい人と話し、したいことを楽しむ。誰でもいつでもすぐにできる。一人歩きの気楽さ、自在さは密の味だ。

ところが世間には、私と同じような楽しみ方をする仲間がすでにいた。「ソロ充」とか「ぼっち」とか「ひとり旅」とか、一人の時間を大事にする楽しみ方は最近の流行なのだ。「私も同じだ！」という顔見知りが徐々に増えていく。

楽しいといっても、一人歩きには一抹の寂しさがつきまとう。充実の一日であればあるほど物足りなさも募る。誰かに「成果」を吐き出して、共感してもらいたい思いにかられるのだ。同好者同士のつながりが何か持てないものか？　それがずっと頭にあった。

趣旨に賛同する仲間もチラホラ現れてきたので、それまで見ず知らずだった四名がコアメンバーとなって、「ハイカイクラブ」なるものを発足させたのが二年前だ。また、ハイカイ精神を呈して街歩きするシニアを、「ハイカー」と呼ぶことにした。

クラブと言っても、会則なし、会費なし、名簿なし、一人一人が主役である。オブリゲーションも一切ない。各ハイカーは自分一人の時間に加え、同好仲間との時間をも楽しもう、という魂胆である。「一人だけど独りじゃない」は、クラブの謳い文句になった。

根っからの「真正」ハイカー、ボランティアとの二足草鞋の人、ミニサロンのリーダー、素人アーティストなど、いろんな人たちが寄り合っている。メンバーそれぞれが存在感を持ち、それでいて一緒にいてとても気の休まる気楽な連中だ。

各ハイカーは普段から自分のプランで多忙だから、一堂に会して行動することは滅多にない。それでも四月の花見、八月の暑気払い、十二月の忘年会は定例となってきた。

クラブの総会を兼ねたこの懇親の場では、各自のハイカイ自慢、みやげ話、失敗談が飛び交って、大いに盛り上がる。十名前後が集まるようになっているが、お互いがすべて、それまで出会いのなかった新しい顔見知りなのだ。

ハイカー同士のやりとりは、専ら携帯のショートメール機能を活用する。「今日は〇〇辺りをハイカイ予定です」、「いま△△をハイカイ中」などの連絡が、頻繁に入ってくる。タイミングが合えば近くでランチ、夕刻なら居酒屋で一杯ということにもなる。

またファミリーレストランの場を「ヤドカリ」して、月イチのサロンの場も設けている。立ち寄ればそこには必ず誰か、仲間の顔があるという訳だ。楽しいフリートークは毎度、二、三時間の長きにも及ぶ。

街なかでは、同類らしき高齢者の姿が確実に増えている。山のハイカー同士がするように、街なかで見ず知らず同士が、「やあ」「こんにちは」と気軽に声をかけあう姿を夢想する。シニアにとって街なかが、自然な居場所となっている光景を……。

戦災で焼失した生家と疎開の思い出

上原　利夫

八十五年前に、わたしが生まれた大阪市西区靭（うつぼ）の町は、今は広い靭公園になっている。北から南へ五つの通りがあり、その一つ靭下通一丁目四番地に生家があった。今は跡地に五階建てのワンルームマンションが建ち、一階はレストラン。大阪へ行ったとき、ここで食事をすることもある。この通り（靭下通）の西端に、わたしの母も学んだ靭幼稚園がある。一昨年はわたしの孫が一年間お世話になった。幼稚園の横に大型マンションが建ち、戦前から靭に馴染んでいた年輩者も住み、靭の薔薇園を楽しんでいる。

靭国民学校一年生の昭和十六年十二月八日の朝礼で、日本軍が真珠湾を攻撃したと聞いた。わたしは米国がどこにあるかも知らず、不安だった。学校から帰り、中の間（居間）で火鉢を囲み、父から話を聴いた情景を想いだす。二年生の時、靭国民学校が隣の学校区の東江（とうこう）と合併し、西船場国民学校になった。靭下通から西船場への通学は遠かった。校舎の壁に書かれた「米英撃滅」「撃ちてし止まむ」をみんなで唱えた。

この頃に学校の給食制度が出来た。昼食の味噌汁とコッペパンがおいしかった。食器の弁当箱を肩からぶら下げて登校した。生活物資が配給になり、倹約の時代に入った。三年生の夏（昭和十八年）生後半年の弟の安全を守るため、母に連れられて一歳上の次姉とわたしが一緒に甲子園の別荘へ疎開した。そこには父方の祖母が住んでいた。西船場へは阪神電車と大阪市電で通学したが、楽しかった。しかし、甲子園に近い鳴尾に飛行場が出来たのでここも安全ではなくなった。四年生になって、南海電車高野線の我孫子（あびこ）前（まえ）の寓居に移り、難波から大阪市電で西船場へ通学した。

ところが、二学期から西船場校は島根県へ集団疎開することになった。次姉とわたしは大阪府下貝塚へ集団疎

開となり寓居に近い住吉区遠里小野（おりおの）校へ転校した。しかも疎開せず大阪に残ったのは、小さな弟がいたからだったが、昭和二十年三月十三日夜の大空襲で大阪は焼けた。当時、わたしは住吉区遠里小野の寓居から、赤く染まった北の空を不安げに眺めたのを思い出す。頭上を敵機の編隊が南から北へ飛び、大阪の中心に焼夷弾を花火のごとく投下した。靭の家には夜は誰もおらず家族全員無事だったが生家は全焼した。空襲の二日後、わたしは父と一緒に歩いて靭へ行き焼け跡を確認した。店の間を通り内玄関に据えてあった二つの大きな金庫が寂しく立っていた。母が買い集めていた陶器類は溶けて変形していた。情けなかった。その帰り米兵らしき焼死体を見た。米軍機に乗っていたのであろう。焼け出された人が怒りを込めて、この焼死体を棍棒で殴りつけていた。

大阪の大空襲のあと集団疎開に参加した。疎開先は浄土真宗の寺で、毎日経典を唱えた。生家の宗旨も同じ真宗だったので、覚えたお経は役に立った。弟があぶない大阪に住めなくなったので、次姉とわたしは集団疎開から戻り、母と弟と一緒に奈良県の吉野川流域へ縁故疎開した。ここは父が五条中学時代の知り合いで、父は農業組合の嘱託になった。大阪の寓居には、女子挺身隊に徴用されていた長姉と学徒動員で働いた兄が留守番をしていた。七十五年前の終戦はそれぞれの場所で迎えた。田舎暮らしの次姉とわたしは、六年生と五年生だったが、同じ教室で校長先生から教えてもらっていた。都会では得られない経験だった。

和歌山県に入り吉野川は紀ノ川になる。父は紀ノ川のほとりの高野山への登山口・学文路（かむろ）の玉屋旅館の生まれである。この旅館は石童丸の悲話で有名である。すなわち、「出家した父を探しに高野山の寺を尋ねた石童丸が、父と名乗らなかった僧と別れて玉屋旅館へ戻った時、女人禁制のため宿に残した母は亡くなっていた」という話である。父は奈良県立五条中学から神戸高商へ進学し、阪神間で過ごし、大阪の商家へ婿養子に入った。終戦後は、妻と三男二女を大阪に集め、戦災に遭わなかった名古屋支店で商売を再開した。

縁

上田　信隆

今回は特にテーマを指定しないということになったが、なんでも有りというのは意外に難しいものだということが分かった。いろいろ考えた末に「縁」を選択した。縁というタイトルの選択とは老いを感じてしまう。

久しぶりに会った友人の話の中に偶然自分に近しい人が出てくることがある。その人とはずいぶん疎遠になっているのだが、ひょんなことで糸がつながりいろいろなことが思い出されることがある。この種の人の印象は大体はよいことが多い。今からでも会ってみたくなる。お会いしての良否は自分の心がけで決まることが多い。

会社関係、親戚縁者等の人間関係では、私たちはどうしても損得がつきまとう。その損得が人とのつながりを邪魔することも多い。特にお金に関わると利害が表面に出てきて友情すら壊すことがある。冠婚葬祭など支出の嵩には問題が起きやすい。お金のことのちょっとしたトラブルは付き合いを複雑にするが、縁を続けるのにある程度お金がかかるのが現実というものか。

一方お金ではなく信条の食い違いで人間関係を悪くすることも多い。政治や宗教などの違いによる口論は後味が悪い。故に人との付き合いや縁を大事に続けるには、ある程度のお金や自分の心がけと同時に相手への思いやりが大事だと思う。

私は企業ＯＢペンクラブに七十歳にして入会し俳句を始めたが、俳句は大変難しく、奥深いものがある。八年を過ぎてもなかなかものにならず忸怩たるものがあるが、最近偶然有名な俳人を知ることとなった。大学の後輩の人であるが、俳壇ではかなり名が知れている人だ。Ｍ氏には年に一、二度しかお目にかからないが、その人となりをよく私の俳句の師匠からお聞きする。Ｍ氏の俳句は勿論うまいと思うが、それよりもＭ氏の俳句に対する対峙のしかたに驚かされると私の師匠は言う。Ｍ氏は句会をするたびに、今日の句会は面白かった、本当に見るべ

きものがあったという。師匠の話ではいつでも楽しく俳句の会に出てくるという。師匠もＭ氏を尊敬していると思うが、そばで聞いている私もＭ氏のことを思い浮かべて楽しくなる。

Ｍ氏は学生時代から鎌倉の高浜虚子邸に出入りしていたそうで、俳句に対する環境も恵まれていたのかもしれない。Ｍ氏がどうやって高浜虚子や星野立子に気に入られたかは知らないが、多分に学生時代からの俳句に対する真摯な気概と人柄が巨匠の目にとまったと思われる。Ｍ氏は今日ゆるぎない実力を披露しているが、お会いすると穏やかな紳士である。努力の人である一方、人との接し方にセンスがあるように思う。お弟子さんも多い。このような方と知り合えたのも私の師匠のおかげである。

私の師匠もまたすばらしい俳人だ。俳句の力そのものもさることながら、選句の力が抜群である。こんなに俳句の指導力のある人もめずらしい。彼と接するうちに自然と俳句の面白さを教えてもらえる。師匠の周りの人は、俳句もうまいが同時に人柄もまた素晴らしい人たちが多い。俳句が座の文学である以上座の持つ力が、あちこちにちらばりそれにつられて皆が研鑽するのかもしれない。何事も上達するのは、最終的には自分の心がけだが、俳句については環境もその一助になると思われる。

師匠を知ったのも今から思うとつくづく縁だと思う。一つだけ私の自慢はこの師匠に近づけた縁を逃がさなかったことかもしれない。多分それは私が俳句を純粋に勉強しようと思った心がけにあったと思う。縁を引きつけたのはこの心がけにたいする神様からのご褒美と信じている。この世に生まれてきて師匠にお会いできたのは幸運そのものだった。人生は短い。せっかくこの世に生まれてきた以上このような幸運を何回もつかみたいものである。

縁は限りなく心がけ次第で広がるものだと思う。大切なことは何度も言うことだが、縁を実らせるのは自分の心がけ次第ということなのかもしれない。

大国の傲慢

稲宮　健一

　飛行機で降下着陸するとき、窓の下は地図を見ているようで、やがて道路が大きく見え、走っている車が見えると人の活動域に戻ってきたと感じる。もっと広い視野で地球を見たのは「地球は青かった」のガガーリンだ。普段の生活圏から推測すると、地球は人類にとって遥かに巨大な存在物と思える。本当だろうか。我々は大気の中で生活しているので、空気はどこに移動しても身近にあると感じられる。しかし、富士山頂の三七七六ｍでは大気が薄くなるのを実感できる。一方、地球の半径は六三七一㎞なので、富士山頂まで大気層があるとすれば、その厚さは地球半径の約二千分の一にしかならい。地球全体の体積に対する大気層の体積の比率は約百億分の一になる。極言すると、地球がリンゴなら、大気層は極めて薄い表皮で、その中で我々は生活している。

　普段の生活の感覚では大気は無尽蔵に在るように感じるが、そうではない。有限な資源である。少し前までは重要と考えられなかったことだが、人の活動に伴って発生する物質が地球の自然に影響を及ぼそうとしている。

　人類が自然を変え始めたのは十九世紀末の産業革命であった。それまで人力で行っていた労働が石炭あるいは石油のエネルギーを使えば機械で代替できるだけでなく、機械により、それまでになかったものが製造できた。即ち化石燃料を使って人為的な富の創造を発見した。機械の力を利用するだけでなく、化学合成により空気中の窒素から化学肥料を製造し、食料増産を可能にした。当然われ先に化石燃料を掘り当て富の獲得に走る。

　エネルギーが欲しいのであって、抜け殻の残りかすに関心はなかった。石炭殻は埋め立て落着。二酸化炭素（CO_2）は広い大気中に飛散させ、雲散霧消で後は責任なし。それでもかつては社会問題が起きなったのは自然に浄化作用があるからだ。

　CO_2は太古の昔から地球の火山活動などで発生し、自然界に大量に分布していた。CO_2は植物の光合成に

欠かせない物質なので大気から植物が吸収する。海水も吸収するので、排出と吸収が自然の絶妙な摂理で均衡して、大気中のＣＯ$_2$濃度は長い間徐々にしか増加しなかった。

しかし、化石燃料を使った産業の近代化は先進地域から発し、二十世紀の永い期間に渡り全世界に伝播していった。それと共にＣＯ$_2$の排出量が徐々にではあるが、確実に増えていった。その影響を予測する人がいても、何が起きるかを誰も明確に断言はできなかった。

今から四十年程前、ラジオの時代東大の物理学の竹内均先生が講話で、「気象は年毎に変化しているが、一年を通じた平均気温は０・５度以内に収まっている。もし、このバランスが崩れると、干ばつとか、水害とか異変が起きる」と話されていたのを覚えている。近頃になり異常気象が頻繁に起きると地球温暖化の影響と叫ばれるようになった。八十億人の暮らす世界にとって大気は決して無限資源ではない。

最近の国連気候変動枠組条約（ＣＯＰ25）の会議では平均気温の上昇が産業革命時を基準として＋２度未満（できれば１・５度）以内に収まるように活動することが取決められた。昨今の台風の頻発、しかも今まで経験のない規模の豪雨や土砂崩れを伴うことは温暖化が原因と思われ始めた。

しかし、その矢先に温暖化は偽情報だと枠組み条約から脱退した米国の決定が世論に水を差した。温暖化の進み方が徐々にしか感じられない茹でガエル効果で感度が鈍かったのだろう。これほど重要な課題より自国の近視眼的利益を優先させる行動は大国の傲慢である。

エネルギーを獲得し、豊かさを実現したい指向は世界中で止まることはない。しかし、自然エネルギーの活用、自然環境と共棲した生き方の創造、ネガワット達成活動などにより効率的にエネルギーを使う生き方を課題にしなければならない。エネルギーに関して世界中で知恵を出す集団知の活動を推進し、活動の顕著な貢献者にはノーベル賞級顕彰を企画しては如何だろうか。

健康問題

市川　忠夫

健康問題への関心が、歳とともに高まっています。身体の健康問題への関心だけではなく、健康問題の対象領域が広がっているのです。

健康を辞書で調べると、「身体に悪いところがなく心身がすこやかなこと」とあります。ここに出てくる〝身体〟と〝心身〟を別の言葉に置き換えると、健康の意味はとても広くなります。人々は、正義、倫理、幸福など高尚な視点から、あるいは、お金、地位、名誉などの現実的な視点から、いろいろと考えを巡らせます。そこで、視点を健康に置いて考えてみました。すると私たちは今、とても大事な時期に生きていると感じられます。

最も身近な健康問題は、自分自身の健康についてです。若い頃から健康の大切さは認識しており、要は食事と運動と思っていました。結婚してからの半世紀余り、食事は家内に任せっきりで、私の関心はもっぱら運動でした。ジョギングやウオーキング、スイミング、サイクリングに関心を持ち、勝手にAトライアスロン（Advanced・Aged）などと名付けて取り組んできました。還暦を過ぎた頃からは、体だけではなく、頭の健康も大事と思うようになりました。しかし、書店に並んでいる脳トレ関係の本には余り惹きつけられません。日誌を手書きする、できるだけ漢字を使う、ラジオやテレビ音声を聞きながら別の作業を行う、などのささやかな脳トレ習慣に努めて来ました。

しかし、周囲に超高齢者が増え、自分自身も後期高齢者になると、体や頭だけではだめで、さらに「心」の健康が大事だと思うようになったのです。ところが、最近の人々の関心は、ＲＩ（人の知能、Real Intelligenceと勝手に名付けました）をすっ飛ばして、ＡＩ（人工知能）に向かっています。教育者、研究者、宗教家の方々も、多くは知力や知識を高めていく視点からの教育（Education）には熱心ですが、知力や知識の衰えていく高齢者に必要な教育（Deducationとでもいうのでしょ

うか?）には力が入っていないように感じます。

最も大きな健康問題は地球の健康についてです。私たちは皆、地球上で暮らしているので、最も身近な問題ともいえます。地球の健康を脅かす病は二つに分けられます。一つは巨大地震・大噴火のような突発的な自然現象に起因する急性病、もう一つは地球温暖化のような人間の長年の営みに起因する慢性病です。

二〇世紀、人間は物質的かつ短期的な利益追求のため、科学技術に力を入れてきました。その結果、巨大地震を無視した脆弱都市の構築、CO2やプラスチックごみなどの廃棄による地球環境の汚染、等々の不健康状態に陥ったのです。今や、全ての人工物質に危険が潜んでいると考えなければなりません。二一世紀に入り、「このままでは、地球は重病になり、人間もいっしょに滅んでいく」ということがはっきりしてきました。

これまであまり日のあたらなかった地球内部の解明、いろいろな人工物質の副作用の研究などに、今の百倍から千倍の力を注がなければ、地球の健康は保てないでしょう。

また、人間の使える物質が有限であることがはっきりしましたので、それに見合った社会の仕組みが必須になります。世の中では、BI（Basic Income 最低所得保障）制度が論じられていますが、本当に必要なのは、BS（Basic Substance 最低物質保障、と呼んでみました）制度などのような物質消費に制限を加える仕組みが必須と感じます。戦後の配給制度を思い出し、渋い顔をする方もおられると思いますが、地球を重病にさせないためには、人々は「心」を鬼にして、これからの数百年辛抱しなければならないでしょう。

ここでは、自分自身の健康と地球の健康という両極の問題を取り上げました。両方に共通している大事な点は、人々の「心」の持ち方です。〝青壮年時代にあった体力・知力〟の衰え、〝二〇世紀にはふんだんにあった物質・エネルギー〟の制約、に対処していける「心」が大事なのです。令和時代、私たちは「心」を一新して、未来に向かわなければならないと思っています。

「海の都」ヴェネツィア随想・探訪記

池田　隆

ヴェネツィア共和国一千年の歴史を語る塩野七生著『海の都の物語』に初めて出合ったのは三十年前のこと。特異な歴史に強い関心を抱き、自分の目でヴェネツィアを確かめたくなる。フランスとイタリアをユーレイルパスで巡る銀婚旅行を兼ね、正月休みに十日間の旅へ出た。当地滞在はわずか二泊三日であったが、その探訪時の記憶は今も鮮明に残っている。

パリ始発の寝台列車はヴェネツィアの対岸からゆっくりとリベルタ橋を渡りだす。車窓から眼下の瀬戸を眺め回しながら、建国時この地勢が蛮族や外敵の侵略を防いだという話を思い浮かべていた。

フン族のアッティラさえ征服欲を覚えないような不毛の地、葦だけが繁る沼沢地に民を避難させた神の御告げ、フランク人の強力な艦隊を多数の小舟で巧みに浅瀬へ誘導し、座礁させた潮汐活用作戦などなど。

二月のカーニバルを控え、この季節は観光都市ヴェネツィアも人出が少ない。終着駅の前より水上バスで、先ずは予約してあるホテルへ。航路のグランド・カナルの河幅は数十メートル、逆S字状に大きく湾曲する。岸辺付近には舫い杭が林立している。

両岸の島は自然の沼沢地に無数の木杭を打込み造成したという。その苦難は想像を絶する。屋根付きの名高いリアルト橋を見上げ、華やかな衣装で賑わうヴェネツィア最盛期の光景を頭に描く。

ホテル裏の舟着場で下船。三ツ星のホテルにしては古びた外観である。やや不満げに玄関から入ると、きらびやかな内装に一転する。部屋もグランド・カナルに面し申し分なし。街の景観維持のために十六世紀の石造り建築を、屋内のみ改装して使い続けている。

ヴェネツィア玄関口の鉄道駅から先は島全域で一切の車両を禁止している。移動手段は水上交通と徒歩のみである。京都や鎌倉の古都も見習って欲しいものだ。

ホテルで休む時間も惜しく、すぐに街へ飛び出す。石畳の路地を気が赴くままに抜けていく。路沿いの建屋の

裏側は細い運河に面し、小舟や中世風のゴンドラが往来する。運河へ排出される下水は、潮汐で一日二回必ず外海に導かれ、汚水が途中で滞ることはないそうだ。自然現象を利用した見事な運河の水理設計である。

迷路のような街を楽しんでいると、ヴェネツィアの中心部、石畳を敷いた広大なサンマルコ広場に出た。アーチが連続するゴシック風の柱廊の先に、時計台、大聖堂、ドゥカーレ宮殿が並び建つ。

宮殿では往時の栄華を偲ばせる黄金階段や数多くのフレスコ画に目を奪われる。だが私の頭のなかは『海の都の物語』の第五話「政治の技術」が占めていた。

作者は語る。下からの民主主義は市民の卑近な欲望に迎合し、ポピュリズムから僭主制となり長続きしない。一方、法王や皇帝の権威を笠に着た上からの君主制は、独裁制を招き、これも何代と続くことはない。

そこで現実主義者のヴェネツィア人はより実害の少ない特異な貴族世襲制度を考え出した。貴族には愛国心と名誉に基づく国政のみを任せ、一切の実利的な特権を与えず、終身制の元首以外の政職は任期一年、留任を認めなかった。元首に対しても権力乱用を防ぐために、数人の補佐官を配し、彼らの同意がなければ何事も執行できないように決めた。特筆すべきは元首を選出する有権者を、選挙と籤引きの繰り返しによって決定する制度である。それにより贈収賄などの政治腐敗を防いだ。

市民は参政権こそ持たないが、行政の権限を保有する。狭い領土のため食糧自給はできない。しかし巧みな経済外交で飢餓を一度も起こしていない。また宗教・思想の縛りは緩く、経済繁栄と文化隆盛の下で市民は盛大なカーニバルなどの享楽にも耽り、満足していたという。

フィレンツェやジェノヴァなど、他の都市国家に比べ、同じ国際環境下で長く独立を維持できたのは、含蓄に富む古代ローマ史の学習や、深い人間研究の成果を活用した政治技術の賜物であろう。ヴェネツィア共和国の歴史は人類の大切な経験の見本である。

科学技術に比較し、政治の分野はかかる貴重な経験を粗末に扱い、進歩が遅い。膨大なビッグデータである人類の全歴史をＡＩで細かく分析し、より優れた新しい政治技術を生み出す時代になったのではなかろうか。

英国、あの頃

安藤　晃二

もう四十年以上前になるが、仕事で英国に三年半程住んだ。妻と小一の長男、五歳の長女を帯同した。

ロンドン西南の郊外サリー地区の町、ニューモールデンに住む。通勤は電車で四十分、シティのオフィスへ通う。駅で毎日切符を買う。発券係のオッちゃんは広い切符棚の前に陣取り跳びまわって切符を采配する。おカネを払うと「Ta!」と来る。究極のカックニーで、Thank you. のことである。この仕事は誰にも渡さないぞ！　最後を締めくくる「Ta!」が合言葉である。

オフィスのビルの名前は、Bow Bells House、角にある Bow 教会（正式名は St. Mary-le-Bow）に由来する。Bow bells（ボウ教会の鐘の音）が聞こえる範囲に生まれた赤子のみが「ロンドン子」だというのも面白い。

Bread Street は、ボウ教会の角から我オフィスに至る短い通り、これが曰く付きだ。日本人が空港のロンドンタクシーに、その行く先を伝えても、先ず通じない。繰り返しても、相手は永遠に判らない顔をする。上司が指導する。「君、ブレッド・アンド・バターと言いたまえ」一件落着、「Oh, Bread Street!」となる。問題は「ブレッド」だ。タクシー運転手の、カックニー訛りに対して強いR音が響かない限り不合格となる。二十年後に、娘が秘訣を教えて呉れた。日本人の大の苦手、お馴染みのRにせよ、Lにせよ、子音の直ぐ後に来る場合は、その子音は「非常に弱く」或いは「発音しない」。さもないと、次に来るRやLの音を響かせる口蓋の態勢を整えることは不可能であると。quickly と試して見れば直ぐ判る。氷解である。

小一の長男を学校に連れて行った初日、担任教師に連行される子供の後ろ姿に不安を感じない親はいない。二三ヶ月も経つと、教科書の「機関車トーマス」の話を、親に英語で読んで聞かせ、日本語で説明を始めたもの

だ。杞憂であった。校長との面談では、「この子は将来大学に行く適性がある、十一歳になったら正式判定試験Eleven plusを受験することになりますが」。小一の子供について、こんな視点での真面目な会話が興味深い。英国の社会構造を反映した振分け制度は現在では限られた形で受け継がれている。

庶民の家でも玄関から舗道に至る間、薔薇の植え込みが続き、裏の芝生の庭ではクリケットの練習位はできる広さだ。林檎の巨木の真っ白な花が青空に映え、咲き誇る、小鳥の囀り、イングリッシュガーデンの薔薇の香りを満喫する。そんな景色を眺める明るいキッチンがある。皿洗いでは、洗剤の泡がたっぷり付いたまま水切り籠に置く。乾くとピカピカ、ボンチャイナの輝きが増す所以である。同様に、イギリスの女性も週一回の入浴後、肌の石鹸の泡は流さず、外食に出かけるときなど、芳香を発する効果がよろしいのだとか。毎日入浴する日本人は英国では「クレージー」である。

裏庭にジャングルジムのある家に、五歳の娘が誕生パーティに招かれた。おてんば振りを発揮した彼女は、あっという間にジムの天辺から芝生に転落、右腕を骨折、近くの病院に担ぎ込まれた。治療は終えたものの痛みが酷く、帰宅もままならず、一晩中泣きながら病院泊となった。未だ英語も覚束ない子供に母親が付き添い、病院からは十分な二人分の夕食と翌朝の立派なブレックファーストまで出された。退院時、母親は費用が全て無料と知り、英国の医療制度に驚かされる。戦後の労働党の政策により、社会保障一般が行き届き、人々の生活は質素ながら不安要因が少なかった。

昨今市場経済中心のグローバル化が世界で格差を広げ、労働者層が犠牲を被るとされ、脱グローバル化、ナショナリズム台頭の動きが起こりつつある。英国では「反欧州移民」という形の動きが現れた。英国はいま、Brexit問題の渦中にある。これから、どの様な国になって行くのだろうか、目が離せない。

出会いと別れ

新井　良侑

「昌子さんが亡くなったよ」と、姉から電話、「うそ！今朝、電話で話したよ」と私。

一昨年の十月二十七日午後七時ころ、姉からの突然の電話であった。丁度、一年前の同じ月に、家人にくも膜下出血で突然先立たれている私には、まさに晴天の霹靂であった。義姉は、私との電話の後に出かけ、親しい友人と昼食会を済ませて帰宅し、午後三時半ころ一人で横になっていたときに、心臓麻痺を起こしたようだ。兄が夕方帰宅したら、家の中は暗く、声を掛けたが返事がなかった。留守かなと思いながら、部屋に入り明かりを点けたら、義姉が横たわっていて、触ったらもう冷たかったということであった。

「良侑さん、親しい人がどんどんいなくなり、年々さびしくなるよ」と言っていた喜寿の義姉は、ピンピンコロリの最期を願っていたとはいえ、あまりにもあっけない終わりに、しばらく言葉を失った。人の命のはかなさが骨身にしみた。

昨年は、私のＯＢペンクラブ入会の世話をしてくれた先輩会員の二人、会社の先輩でもある中川路明さんと濱田優さんが亡くなられた。濱田さんは、たまたま六月に電話した時に入院中で、「もうすぐ良くなるから、退院したら連絡する」と言われたので、朗報を待っていた矢先の事だった。四十年ほど前たまたまヨーロッパの視察旅行で一緒になったのがきっかけで、それから今日まで途切れることなく、いろいろな事を懇切丁寧に指導してくれた恩人である。まともなお礼も言わないままの別れになったのが心残りである。

ある著名な精神科医が、「別れには別離と離別がある。同じ方向に別れた時より反対の方向に別れた方が、別れを強く感じる。前者が別離の感覚、後者が離別の感覚である」と解説していた。

聖路加国際病院の名誉院長日野原重明医師が最後に、「人生は出会いと別れだと言われるが、七十五年のわが

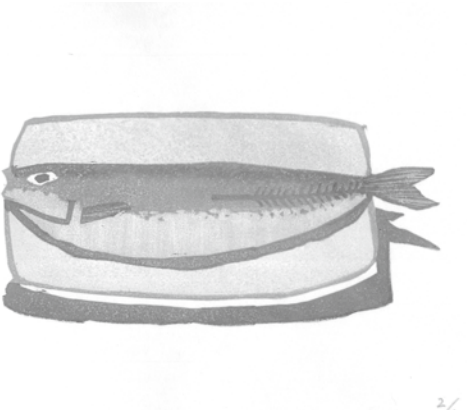
人生も、まさに出会いと別れである。たくさんの患者さんを見送ったが、別れは本当の別れではない。別れた後に、その人との真の出会いがある」と言い残した。医者と患者は、特に難病や不治の病の患者との関係は、人生の不条理に対する戦いの同志であり、同伴者である。日野原氏の患者との別れは別離であり、このような別れの一つ一つが、百歳を超えてもなお現役の臨床医を続ける力の源泉だったのであろう。

昨年、後期高齢者の年齢に達した。幼友だち、親しかった学友、会社時代に格別に世話になった先輩たち、一緒に仕事を取り組んだ仲間たちなどの訃報の知らせが年々増えている。しかし、これらの訃報を知ってもあまり死別感が湧かないのは、私との別れが離別でなく、別離であったからだと思っている。訃報を聞くと、その人と過ごした時のあれこれが昨日のようによみがえる。つい、「あの事はおもしろかったね」、「お世話になりましたね」と声を掛けたくなるが、「ああ、あの人はもうこの世にいないんだ」と自分自身に言い聞かせている。

これまでの私の人生を彩ってくれた数多の同伴者との出会いと別れを、ただただ私の神に感謝するだけである。

正しい者の道は、夜明けの光のようだ、
いよいよ輝きを増して真昼となる。

（箴言第四章十八節）



ヨハネ23世

松浦　俊博

一昨年の大晦日、夕方五時からサン＝ピエトロ大聖堂での教皇フランチェスコによる年末ミサに参加した。二時間のミサが終わり、余韻に浸りながら広場に出るとあたりは暗かったが、広場に設けられたプレセピオには灯りがともり、その前で教皇が人々を祝福していた。振り返ると、日曜日毎に広場に集まる人々に教皇が「お告げの祈り」を行うバチカン宮殿五階の窓が見えた。

ふと、六十年ほど前にヨハネ23世が第二バチカン公会議開会日の夜に広場に集まった人々に語りかけた「Speech of the Moon」のシーンを思い出した。短いスピーチの締め括りの言葉「家に帰ったら子供たちを抱きしめて『これはPopeからのハグだ』と伝えて欲しい」は心に沁みる。いまだに人々の心に残る教皇とはどういう人なのか調べてみた。

ヨハネ23世とは第二次世界大戦の爪痕が残り、さらに冷戦が激化した一九五八年から六三年まで教皇を務めたアンジェロ・ジュゼッペ・ロンカッリのことだ。北イタリア・ベルガモの農家に生まれ、小太りでお世辞にも格好が良いとは言えない。「あら、ずいぶん太った教皇ね」とつぶやいた女性に「私はビューティーコンテストで選ばれた訳ではない」と答えたという逸話は真実味を帯びている。教皇庁高官を代々務めた貴族の出身である前任のピウス12世と比べても、また高齢で即位したことからも、カトリック教会がヨハネ23世に多くを期待していなかったのは明らかである。しかし、五年後に癌で亡くなるまで実に多くのことを成し遂げ「Good Pope」と呼ばれている。カトリック教会が近代化に舵を切る公会議を開催して多くの教会改革を行った。

一八六九年にピウス9世が開催した第一バチカン公会議は、イタリア王国をはじめとする近代国民国家に対抗して、教皇の不可謬性を宣言する時代錯誤的なものであった。翌年、フランスとプロイセンの戦争が勃発した

ため中断して無期延期になったが、彼の後継教皇たちは、誰も公会議を再開して前進させることができなかった。ところが、ヨハネ23世は着任三か月後にサン＝パウロの修道院で十七人の枢機卿を前にして第二バチカン公会議の招集を告げた。「長い熟考の結果ではなく、ふと思いついたこと」だそうだが、そんなはずはない。彼は五十歳前後に長期間ブルガリアの教皇使節や、トルコ、ギリシャなどでの職務を歴任していた。正教会やイスラム教と接した環境の中で、エキュメニズムの精神に従いキリスト教の他宗派や他宗教と対話を積極的に進めることの重要性に目覚めていたに違いない。

公会議の開催は当然、周囲から猛反対を受けたが、幸いなことにヨハネ23世は外交センスのある知恵者でもあった。彼は準備期間中に、賛同する一団を委員会の中心に配置した。また、次の教皇パウロ6世になるジョバンニ・モンティーニを枢機卿に任命した。ヨハネ23世は公会議の方向付けができたころに亡くなったが、後継者のパウロ6世が公会議を見事にまとめた。

公会議には、主要なプロテスタント教会、一〇五四年に相互破門をした正教会の総主教、十六世紀以来対立してきた英国国教会などがオブザーバーとして招待された。公会議は正教会と和解宣言をするなど目を見張る成果を上げた。また、共通の起源をもつユダヤ教やイスラム教との対話の必要性についても言及し、後年のユダヤ教との和解のきっかけを作った。さらに、カトリックのミサはラテン語ではなく、各国の国語を用いることを認めた。公会議の最中に起こった米ソのキューバ危機に際してヨハネ23世は、カトリックの国だけでなく全ての国の国民に対して話し合いによる解決を呼びかけ、戦争回避に一役買ったと言われている。

このような数々の功績により、ヨハネ23世は二〇一三年に聖人になり、二〇一八年にはガラスの棺に入った聖人の遺体は生誕地ベルガモの教会に二週間移された。ローマを訪れることのできないお年寄りや病人など全ての人々と喜びを分かち合いたいという、教皇フランチェスコによるヨハネ23世の教皇就任五十周年の記念だった。

日本人の感性

首藤静夫

昨年のラグビーワールドカップ。日本チームの活躍に国中が沸いた。外国選手との混成チームで、おや！と思ったが、混成の良さが光り次第に違和感がなくなった。スポーツ界では、大坂なおみや八村塁、松島幸太朗など混血の選手が大活躍、国民的スターである。純粋、純血を尊んできた日本人の意識も変わりつつあるようだ。

それに関連して、少し古いが『3重構造の日本人』（望月清文・平成十三年・NHK出版）が面白かった。日本人はいつ、どこから来たかを探る研究報告である。渡来は南方からと北方からの二重構造とする説が有力であるが、作者は三重構造だとする。

望月氏の研究手法はユニークだ。人間の感性に着目した。感性を表現する多くの「言葉」がある。明るい、悲しい、懐かしいなど。それがそれぞれ自分の「五感」の中で何（複数可）と関係するかは民族によって特徴があるという。氏は感性に関連する単語を多数用意して、五感（視・聴・臭・触・味）との関連を世界の人々に調査した。その結果例えばタイ人は、明るい、美しい、広いなどの言葉が触覚と強く関係し、全体的にも触覚との関係が多かった。中国人にもその傾向があった。日本人とは異なっている。それらの民族的特徴を整理し、クラスター分析という手法で民族別に類縁関係をさぐった。

大まかには、ゲルマン系同士やラテン系同士は類縁が近かった。アジアでは、中国、朝鮮、タイの大陸系同士はかなり近く、日本、フィリピン、インドネシアの島国は類縁のものが遠かった。

これらの感性は無意識下で「共通感覚」として子々孫々に受け継がれる。血液型と同様、親の婚姻や環境変化で薄まったり変質したりしないという。そこで現代人の感性分析により祖先に遡れるというのだ。

これらの分析結果を考古学、ミトコンドリアDNA分析など既知の知見と照合し、氏は三重構造の日本人を提唱している。その主張に耳を傾けてみると――

渡来系Ａ　南アジアから北上し、数千年間シベリアにいた民族が結氷期になって南下した。モンゴロイドである。一万数千年前のことだ。この民族は北東アジア一帯に広がり、有史以後も繰り返し日本に渡来した。

渡来系Ｂ　縄文晩期~弥生初期に中国南部、揚子江方面から渡来。日本に稲作を持ち込んだ。欧州のラテン系と類縁。西アジアにいたが東西に分かれた。日本人の一群がラテン系に近いとは面白いが、この二つはまずまず常識的だろう。すごいのは三番目だ。

渡来系Ｃ　Ａ群、Ｂ群よりぐんと古く、三万年前の渡来。原日本人。人類はアフリカから徐々に脱出、地球全域に拡散したとされる。氏の研究では、この原日本人は人類中最も早くアフリカを脱出した民族の一つである。

感性分析の結果、日本人は上記の三つに大別された。細かな分析結果はともかく、最も感性の豊かなのは一番古いＣ群、次いでＢ群だった。各群のレーダーチャートを見ると、Ｃ群の五感面積の大きさとバランスの良さが一目で分かる。自分はどの群に属すのかが気になるが、Ｃ群は全国に広く分布するそうだからご安心を。

彼らは脱アフリカの後、レヴァント地域（シリア、レバノンなど）で数万年を過ごした。当時は緑あふれる沃野であり、そこで豊かな感性が育まれたという。

渡来Ａ（モンゴリアン）とＢ（中国南部から）は類縁がすぐ見つかったが、Ｃ（原日本人）の類縁がなかった。調査範囲を拡大した氏は、ついにポルトガルの一部とスウェーデンの一部に類縁を見つけた。極東の最も古い民族と極西、極北の民族がはるかな昔に繋がっていた。

雄大な仮説ではないか。全て事実かはともかく、スケールの大きな仮説から次の発見が生まれると思う。

我々は大祖先の豊かな感性の上に新たな渡来人（Ａ、Ｂ）を受け入れ、融合し、今の日本人を築き上げたことになる。最近の各種研究では日本は多様な民族で構成され、島国の単一民族とは異なるようだ。

世界中移民問題で混沌としているが、異文化の混在こそ次代の発展の原動力になるだろう。明日の日本がどのような姿になるのか楽しみだ。

変わり者

斉藤　征雄

小林秀雄が昭和三十四年に書いた「歴史」という随筆がある。例によって難解な文章で、内容を理解するのに並大抵ではないのだが、要するに文学者や芸術家の個性の発揮ということについて、「人格」とか「個性」などの観念的な言葉で表現するよりは、日常生き生きと使われる「変わり者」という平凡な言葉の方が、人間の本質を述べるのには適しているという趣旨のことを書いている。

その中で、彼の変わり者の捉え方がおもしろく、なるほどと思わせる。

変わり者という言葉は、「あいつは変わり者で誰も相手にしない」というように消極的に使われた場合には殆ど生きた言葉にならないが、女房が自分の亭主の事を、「うちは変わり者ですが」と語れば言葉として生き生きしてくるという。

変わり者とは、英雄豪傑でも狂人でもないし、あるいは独創的人間とか反逆者という言葉でもぴったりこない。そこには何か親愛の響きがある。そして変わり者は、孤独者を表すよりはむしろ社会性を表している、というのである。

変わり者には、なろうとしてなれるものではない。変わり者ぶったところで、世間はすぐ見破ってしまう。本人にとって普通に行う事が、やる事なす事個性的にしかならない、そういう巧まずして変わり者であるような変わり者だけが、世間から許され、愛されもする。

変わり者はエゴイストではない。社会の通念と変わった言動を持つだけで、自己に忠実に生きているからだということが付き合えばわかる。そういう人間を表現するのに、変わり者という微妙な言葉が発明されたという。

小林秀雄のいう変わり者に、誰が当てはまるだろうか。私は、一休宗純がその一人ではないかと思う。

一休は後小松天皇落胤説が濃厚である。しかし母が南朝の血を継いでいることから宮廷を追われ京都の寺を

転々とした後、近江にある臨済宗大徳寺派祥瑞寺の華叟和尚のもとで修業した。

禅僧として第一級であったが、徹底的に権威を嫌い、華叟の印可の証明すら焼き捨てたという。生涯、野にあって、自らを「風狂」と称した。骸骨をぶらさげて街の中を歩くなど、社会通念などは眼中になかった。

あまつさえ晩年は、盲目の琵琶弾き、森女に出会い愛を交わした。そしてその心を艶詩に詠った。

こうした一休ではあるが、文化人との交流は広く、能、茶の湯、俳諧連歌などに大きな影響を与えたと言われる。また庶民の間でもその人柄が親しみを持たれ、後年「一休とんち話」が成立した。

その反俗性は小林秀雄のいう変わり者に近いと思う。

先年亡くなった樹木希林も、変わり者だった。

文学座に一期生で入り、若い時は悠木千帆という芸名だったが、ある時オークションで「売るものがない」ため名前を競売にかけた結果、二万二千円で売れて名前を改めたという。

六十歳過ぎに乳がんに罹り、その後全身に転移した。それを世間に公表して、闘病しながら凛として女優の仕事を死ぬまで続けた。自分の病気を冷静に受け止めながら、最期まで自然体で生きたのだ。「ちゃんと生きるってことは、何でもないことをやることだ」と。

二度結婚したが、二度目の内田裕也とは長く別居生活を続けた。内田のことを「すべてが好き」と言いながら一方で「結婚なんてね、若い時にしとかなきゃダメなの。物事の分別がついたら、あんなことできないんだから」と言ってのけた。

死後、生前に言ったことが纏められた本がベストセラーになっている。その一冊『樹木希林　１２０の遺言』のサブタイトルは「死ぬときぐらい好きにさせてよ」である。

彼女も、小林秀雄のいう変わり者に通じるところがあるような気がする。女優として個性派であるだけではなく、人生の生きざまが何とはなく面白くて素敵である。自分に忠実に生きたという点で、世間も認める変わり者といえるのではないか。

デルポイの格言 ―鳥海 博さん追悼―

大平　忠

昨年、『悠遊』二十六号に書かれた「日本民族を滅亡させせないために」は、文章に従来にも増して気迫がこもり、鳥海さんの思いが切々と伝わってきました。引用されたデルポイの格言の、特に最後の二行と、添えられた鳥海さんの言葉は、今読むと鳥海さんの遺言だったかのようにどきっと胸に響きます。

・・・・・・・・・・・・

presbutes euboulos（老いては、よき助言を与え）
teleuton alupos　（死に際して、後悔はない）

私も老いた。良き助言者であることを願いつつ、一文を認める。

鳥海さんは、当クラブに入会されたのは２０００年でしたが、顔出しされるようになったのは２００７年頃からでした。お住まいが千葉から娘さんお二人のそばということで横浜市青葉区に引っ越されてからでした。

それ以来、サロン２１に熱心に出席され、常連メンバーとなられました。鳥海さんは、日本の現在の問題点と将来についての課題に、歯切れよく自分の言葉で話されました。これは、常時自分の頭で深く考えていなければできないことだと頭が下りました。中でも、経済、金融問題については、教えて頂いたことが数多くありました。

『悠遊』に書かれた内容を繙くと、安全保障以外の問題については、ことごとく網羅されていたと思います。

中でも、「第二の地動説」を唱えられ、その主旨は、資本主義は人本主義、なかんずく株式会社は「従業員第一」でなければならないということでした。そして、行く着くところは、子供達への全人教育、隣人愛そして国に誇りを持つ人間になってほしいという願いでした。

鳥海さん、天国ではお好きなゴルフをされ、オペラを観、サム・スニード、マリア・カラスとご歓談下さい。

創　作　短　編

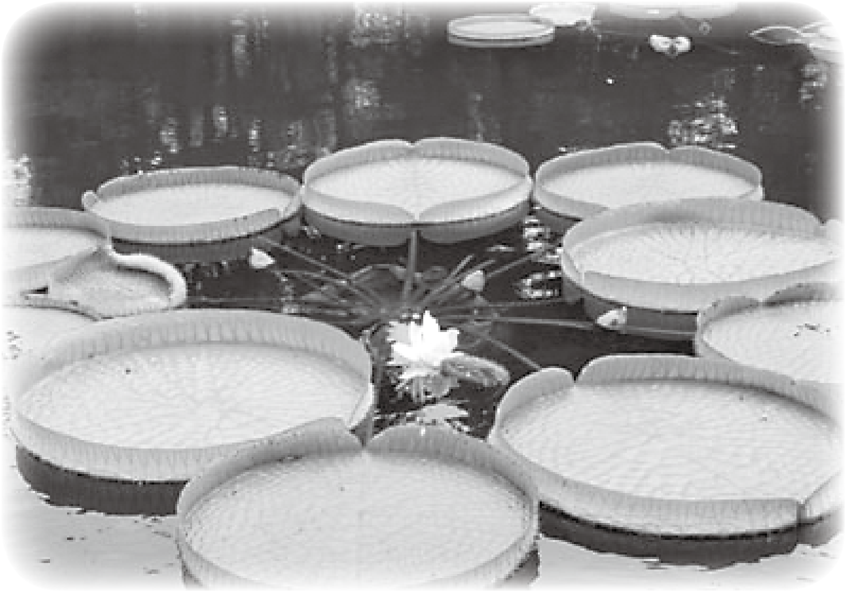


写真　矢澤 正二

日はメナムに沈む

浜田　道雄

夕日は河の向こうに沈もうとしていた。向こう岸の家々やヤシの林は、すでに黒いシルエットになって、紅く燃え上がる夕焼け空に浮かんでいる。

トアンは河に面した広い木造りのテラスに腰を下ろして、いままさに沈もうとしている夕日を見つめていた。考えごとがあったり、心に屈託があったりすると、いつもひとりこのテラスに出て、河の流れを見つめながら考える。それが彼の習慣だった。

いま、トアンはさっきから自分の心に繰り返し問いかけていた。

「あの人たちに『オレはタイ人だ。ずっとむかしから、生まれたときからタイ人だった』と答えた。だが、それでよかったんだろうか」

何度問い返しても、はっきりした答えが出せるものではない。しかし、今日のようなことがあるたびに、これからも繰り返さずにはいられない問である。そのことは、トアンにはよくわかっていた。

今日、バンコクの日本大使館から一等書記官だという二人の男がトアンを訪ねてきた。村人から『モー・ジープン（日本の医者）』とよばれているトアンが元日本兵だという噂を聞いて、真偽を確かめにきたのだという。そして、タイに残留した元日本兵ならば帰国する援助をしたいといったのだ。

戦後連合国に占領された日本もいまは独立し、立派に立ち直って経済的にも繁栄している。もちろん、戦争は終わったのだから軍隊や捕虜収容所から脱走した兵士も罰せられることはない。そんな法律はとっくの昔に廃止されてしまって、いまは帰国に何の心配もない、という。

トアンはいつかこの日が来るだろうと覚悟していた。そして、そのときのための答も用意していた。

トアンの家から五百メートルばかり河を下ったところに、アユタヤ時代の日本人町の跡がある。戦後しばらく

は日本人の姿を見ることはなかったが、近ごろはしばしばその遺跡を訪れる日本人を見かけるようになった。陸から行く道はないから、彼らは上流で舟を雇ってトアンの家の前を通り過ぎて行く。近くの村人にはそうした日本からの観光客相手に土産物を売ったりしているものもいる。だから、いずれは自分が元日本兵だと知られるだろうと思っていたのである。

大使館員には、前から考えていた答えをした。

「オレはタイ人だ。生まれたときからのタイ人で、日本人ではない。何なら、村長に聞いてみてくれ。『モー・ジープン』って呼ばれるのは、戦争中ナコン・ナヨークの日本軍のところで働いていたとき、軍医から傷や病気の手当の仕方を習ったからだ」

二人の大使館員のうち、年かさの方はかなり上手にタイ語を話したが、若い方はまったくできないらしく、トアンの話をいちいち年上の男に通訳してもらっていた。

いま、トアンは沈んでいく夕日を見つめながら、その若い男の眼差しを思い返している。年かさの男はいくつもの質問をし、トアンが答えるのを頷きながら聞いていたが、その調子はどことなく投げやりで、「本人が否定するんだから、どっちでもいいや」と思っている様子が見えた。しかし、若い男はトアンが質問に答えるあいだ、そしてそれを日本語に直してもらっているあいだ、トアンの眼を見つめていた。トアンの心の中まで見ようとしているかのようだった。

夕焼け空はいまや鮮やかな紅色から濃い紫に変わろうとしており、河面には夕闇が広がりはじめていた。トアンはベランダに座ったまま、もう何年も思い出すこともなかった日本の故郷、頸城(くびき)平野の日々を思い出そうとしていた。上越の村々も秋には黄色い稲穂が波打ち、たわわに実る赤い柿の実が今日のような夕日に輝くときもある。だが、トアンに思い出せるのはそんな美しい故郷ではなかった。激しい吹雪の日々。すっぽりと雪に埋もれてしまった家のなかの薄暗いいろり端。来る日も来る日も縄をない、わらじを作り、蓑の修理をする。貧しく陰

鬱な冬の日々の記憶だけだった。あの村には何一つとして楽しい思い出はない。兵隊に取られ別れてしまった、まだ若かった女房と二歳になったばかりの息子のことを除けば。
　あれから三十年近くの歳月が過ぎた。息子はもう一人前になっているだろう。そして、妻は……
　だが、今のトアンには二人の面影をはっきりと思い出すことはできない。歓呼の声で激励する村人の列のうしろで、出征する彼に激しく手を振っていた二人の姿がぼんやりと浮かんでくるだけだった。その後の戦いの日々の凄惨な記憶は何一つ忘れてはいないのに。

　高田の聯隊に入隊したトアンは衛生兵として満州に送られ、さらにビルマに転戦して、戦場で数年を過ごした。それは、来る日も来る日も、敵の襲撃におびえる緊張の連続だった。
　そして、あのインパールの戦いだ。あれは戦争なんてもんじゃなかった。日本軍にはろくな武器もなければ、食糧もなかった。そんな軍隊は英軍とインド軍の前で瞬く間に壊滅し、隊長も将校もみんな我先に逃げた。
　オレたち敗残兵も、ただただタイを目指して逃げた。ジャングルの樹間から夜も昼も絶え間なく襲って来る敵の襲撃におびえ逃げ惑いながら、わずかな踏み跡を求めて道もないジャングルをさまよって、東へ、南へと歩きに歩いた。そっちに行けばタイに行き着く。タイは同盟国だから敵はいない。その思いだけが足を前に進めた。

　武器も食糧もない兵士の逃避行は悲惨だった。ジャングルの小道では、敵の襲撃で負傷した兵士、熱病にかかった兵士、そして飢えた兵士がバタバタと倒れ、死んでいった。衛生兵のトアンはそんな兵士を助けたいと思ったが、薬もなければ、水も食べ物もない。トアンにできたのは、ただ異国のジャングルで無為に死んで行く彼らを、その側で見守ってやることだけだった。
　先に進むにつれ、道端で死ぬ兵士の数は増え、死体はすぐにジャングルの暑気のなかで腐って、悪臭を放った。トアンもまた、自分もすぐにこのようにして死ぬに違いないと思った。だが、それでもまだ必死に歩いた。自分

たち兵士を見捨てた祖国を恨み、絶望しながらも歩いた。あれこそ、「この世の地獄」、「地獄の道行き」だった。

だが、何日もの惨めな敗走を続けたのち、トアンはタイに辿り着いた。そこはこれまで逃げ歩いたジャングルとはまったく違う世界だった。よく耕された水田が広がり、明るい太陽が輝く天国だった。国境の河を渡り、おそるおそる近づいた村で、飢えて疲れ果てたトアンは村人から食べものをもらい、傷や病気の手当もしてもらった。眠り、休むところも与えられた。トアンはようやく辿り着いたこの国に本当の極楽を見た思いがした。

戦争が終わって、トアンは捕虜としてナコン・ナヨークの収容所に入れられたが、そこでもタイの人たちの親切さとやさしさを見た。収容所では虐待されることも、酷使されることもなかったし、食べ物も医薬品もあった。

トアンは衛生兵の経験を生かして、収容所の捕虜仲間だけでなく、近くの村の病人の手当てもしてやったから、村人からは「モー・ジープン」と呼ばれてとくに大事にされた。収容所の生活はトアンにとって軍隊での生活よりも、いや故郷の頸城平野の村で小作人として過ごした日々よりもはるかに幸せだった。

一方、収容所で知った祖国の状況は、トアンの心を暗くするものばかりだった。「激しい空襲で日本全国ほとんどが破壊され、たくさんの国民が殺された」「原子爆弾にやられた日本は、何十年も草木も生えない国になった」「食糧がなくて、多くの人が餓死した」「日本は四等国に成り下がって、もう二度と立ち上がれない」と。

そんなニュースを聞くたびに、トアンの望郷の思いは冷えていった。戦場で祖国に見捨てられたと知ったあの惨めさを思うとき、ビルマのジャングルで無為に死に、腐っていった仲間の兵士の無念を思うとき、彼のその思いはさらに強まった。

収容所近くの村人たちのなかには、タイに残って暮らせといってくれるものも多かった。のちに義父になったパオもその一人だった。パオはトアンのどこが気に入ったのか、「アユタヤのオレの村に行って、一緒に農業を

やろう」と熱心に勧めてくれた。
何回も、何回も考えた末、トアンはパオの手引きで捕虜収容所を脱走し、彼の家族が住むこの河辺の村に落ち着いた。日本の家族との音信はすでに絶えて久しかったし、上越の故郷の惨めだった生活は是非とも帰らねばならないところには思えなかった。そして、あのインパールからの凄惨な敗走だ。自分たちを見捨てた日本は、帰るべき祖国というにはあまりにも遠い存在になっていた。

以来、彼は「タイの農民トアン」となり、パオの娘と結婚して、義父が分けてくれた田を家族とともに耕して三十年が過ぎた。村に病人があると収容所でやったように手当をしてやった。そしていつの間にか医者が農業とともに彼の生業になり、トアンはまた「モー・ジープン」と呼ばれて、村になくてはならない人になった。

「アニッチャム（宿縁）なんだろうな。日本の妻子は縁の薄い家族だったんだ。そしてオレはあのビルマからの悲惨な敗走のなかで死に、タイで生まれ変わった」

「オレはまた迷うかもしれん。でも何回迷っても、やっぱりオレはタイ人のトアンだ。日本人じゃない。オレの人生はここ、このメナム（河）のほとりにあるんだ」

トアンは彼を呼ぶ孫娘の声にようやく腰を上げた。夕日はもうすっかり沈んで、月があがって来ていた。河面に月の光が輝いている。トアンはそこにあの若い大使館員の眼差しを見たように思った。
「あの若い男はオレが元日本兵だと見抜いていたのだろうな。そして、オレが日本を捨てた、いや捨てなければならなかった哀しみにも気づいたのだろうな」

そのとき、それまでトアンの心の奥に引っかかっていた「重いしこり」が音をたてて崩れた。彼は大きく息を吸いこむと、家族の待つ家に入っていった。

宦官李斎・私の恋した貴人

内藤　真理子

「男のお子様とは残念でございます。稀に見るほど貴顕をきわめる相で、もし女子であったなら天子におなりになりましょう」

　唐の都で評判になっている陰陽師、円斎の屋敷にまだ襁褓（むつき）も取れない赤子を男児と偽って連れてきた父親は

「天子とは国の君主ではございませぬか、女子の君主など聞いたこともございませぬ。男だからこその君主ではないのか」そういって首をかしげて帰って行った。

「あれが男であるものか」

　山にこもって暮らしている古老の師、幽斎が来合せていて、客が帰ると吐き捨てるように言った。

「老師は、何をもってそう言われるのか」

「そなたも貴顕をきわめる相と言われたが、竜のような気高い瞳や、鳳凰のごとき首を持つ赤子から瑞気が立ち昇っていたではないか。美しい娘になって宮廷に住まうであろう。行く末が楽しみじゃ」

　娘の名は武姫という。後の則天武后である。十四の歳にその美貌を聞きつけた唐の皇帝、太宗に望まれて後宮に迎えられた。

　私は宮廷お抱えの陰陽師李斎。円斎の息子である。後宮にお仕えする為に宦官となり、今ここにいる。

　ある日太宗に武姫の部屋に行くので供をするようにと命じられた。彼女こそが父の円斎と古老の幽斎が「女なら天子になる」と話していたその人なのだ。太宗は十四歳の妾の所に息子の高を伴い彼を占えというのだ。

　赤子の折、父親に抱かれているのを遠くから眺めたことがある武姫は、目じりのきりっと上がった美しい瞳の、口元が引き締まった気品のある娘に成長していた。十歳の高は年上の美しい少女を見て顔を赤らめた。太宗はそれを横目に、息子に

「駿馬を手に入れたのだが、その馬が癇性でな、調教に手を焼いている。高なら如何するかな」と尋ねた。

「優しく接して気長に調教をいたします」と高が答えた。

それを聞いた武姫は
「私なら、簡単に調教してみせます」
「ほう、どうするのだね」
「鉄の鞭で思いきり叩きのめして言うことを聞かせます。聞かない時には鉄の棒を首に突き立てましょう。それでも駄目なら短刀で喉笛を掻き切ってやります」
　紅潮して目を輝かせながらそう言った。その猛々しい美しさは一瞬にして私をとりこにした。太宗が呆れたまなざしを浮かべているのを見て我に返り、高に目を向けると、うっとりと呆けたように彼女を見ている。太宗はそんな高に「こんな激しさが欲しいのう、そなたにも」と言った。占いを聞くまでもなく答えが出たのであろうが、私は、いずれ高は武姫を后にするであろうと人知れず卜占を立てた。
　次に武姫に会ったのは、今は皇帝となった高の後宮でであった。太宗の死後、彼女は尼となり寺にいたところを、太高の正妻の王皇后に見いだされて還俗し、後宮に今度は太高の妾として舞い戻ったときである。
　武姫は太宗の所で会った私を覚えていた。踝（くるぶし）まである柔らかな布の宮廷服を身にまとい、髪の毛もふっくらと纏めていて以前よりも背がすらりと高くなっていた。
「李斎と申したな、何くれとのう占ってたもれ」輝くように美しくなった武姫はかすかに媚を含んだ目を私に向けた。宦官の私ではあるが身内から突き上げるほどの喜びを感じた。太宗皇帝の宮殿にいる時には凛々しく清楚で、こんな表情を決して見せなかった。御前を辞するときには、布を一反下げ渡してくれた。成長したのだ。
　王皇后には子がない。太高は近頃、名門の出の簫淑妃ばかりを寵愛しているので、王皇后は后の座を奪われるのではないかと心配でたまらない。そこで太高がかつて熱を上げていた武姫を返り咲かせたのだ。彼女なら太高より四歳も年上で、太宗の妾だった人である。親の身分も高くない。尼寺で余生を送る筈の所を救ってやった我を恩人だと崇めるであろう。武姫に、太高の寵愛が移れば皇后の座を失うことはあるまい。
　王皇后の思い通り、太高の寵愛はたちまち簫淑妃から離れ、武姫だけに注がれるようになった。

武姫は皇帝の心をしっかりとつかんでいる。可愛い皇女も誕生した。賢く成長した彼女は周りの者や下働きの召使などに至るまで心を砕き、下された献上品など惜しげもなく与え、今では皆の者をすっかり味方にしていた。

王皇后が何かおかしい、と思い始めたころには、武姫の勢力は侮れないものとなっていた。そこで王皇后はふたたび、かつての敵の簫淑妃と手を結んで武姫を失脚させようと目論んでいる。

「李斎、何なのでしょう、あれは」

その頃、私は目立たない容姿が功を奏して寡黙な宦官ということで武姫に気に入られ、陰のごとく四六時中、傍近く仕えるようになっていた。

「王皇后は、簫淑妃と組んで小蝿のようになにやら企んでいて、目障りで鬱陶しいったらありゃしない。早く引きずり下ろさなければ……」

怒りを含んで紅潮した武姫はそう独りごちた。何と美しいのだろう。私は彼女への焦れる思いを身の内にしまい込むように彼女の言葉を聞いた。

満開の梅が香る穏やかな日であった。

武姫はとろけるような優しい目を皇女に向けて乳を含ませている。皇女はたっぷり乳を飲むとやがて気持ちよさそうに眠ってしまった。ベッドに戻し手を添えて覗き込みながら彼女は、

「王皇后が皇女を見に来るのだが、吉凶は何と出ているであろうか」とつぶやいた。

「何やら不吉な卦ではありますが、武姫さまの志は成就すると出ております」現れた不可解な卦に不安は覚えたが、武姫には障りはないのだと思い返し静かに応えると、彼女は私に目を向け微かにうなずいて部屋を出た。

私は陰のように隠れてそこに残った。

王皇后が部屋に入ってきた。子のいない彼女は微笑みながら赤子に近づき、そっと抱き上げてしばらくあやすと満足して帰って行った。何も起こらなければのどかな春の午後である。

武姫は、王氏が出て行ったあとしばらくして皇女の部屋に入った。生まれたばかりの子は、まだはっきりとものが見えていない。近づいた母を、小さな手足を休みな

く動かし口をすぼめながら顔全体で追っている。その顔に武姫の両手がすーっと伸びてすっぽり覆った。赤子は目を大きく開け手足をバタバタさせていたが、やがてぐったりとしてしまった。彼女はわが子の見開いたままの瞼をそっと閉ざすと私の方を見た。

「この眼球を取り出して持ってくるように」

彼女の目から涙が伝った。私は思わず武姫の顔を見た。

「私は天子になる運命を背負って生まれてきたのです。私の娘よ。そなたを犠牲にした私の生涯をこの目で見届けるがよい」彼女はもう泣いてはいなかった。

武姫様の為ならどんなことも厭わない。激しく打つ胸の動悸を抑えて私は黙って頷いた。

武姫はしばらくしてやってきた高宗を伴って皇女の部屋に行き微笑みながら「姫の寝顔をごらんになってくださいませ」と言い、そっと布団をはいだ。

赤ん坊はもう冷たくなっていた。

「姫、姫、まあ、どうしたのでしょう、こんなに冷たいわ、何があったのかしら、誰がこんなことを、あ、皇后さまが……」彼女は精一杯取り乱し、高宗の胸に取りすがった。

武姫は、私のひそかな卜占の通り、王皇后を陥れ、周りの反対を押しのけて皇后の座についた。

そして王皇后と簫淑妃を、二度と返り咲くことがないように残忍なやり方で抹殺した。

私の恋した武姫は七十六歳で天寿を全うした。

運命を見据え、娘の眼球をえぐり取った激しさで、自分に逆らうものには情け容赦なく過酷な仕打ちをしながらも、庶民の喜ぶ国政を為し、平和な時代が五十年間続いた。

自らも帝位につき国号を周としたが、最後は周りの意見を聞き入れ、太高が亡くなった時、後を継いだ中宗に再び帝位を譲り国号も唐に戻した。

亡くなった時の尊号、則天大聖皇帝、すなわち則天武后。彼女の手には、皇女の眼球の入った小さな壺が握られていた。

「たたら」の郷

大塚　喜子

徴用先の広島で終戦を迎えた山田シメは、昭和二十三年に島根県仁多郡横田村に帰ってきた。美人ではないが、誰にも親切だから、五年ぶりに戻った故郷でたちまち人気者になった。奥出雲のズーズー弁が彼女にかかると、まるで東京ことばに聞こえるから不思議だ。出征前の男と結婚の約束をしたとか…しないとか…シメ自身が何も言わないからハッキリしないが、二十五歳だと言うのに（いかず後家）だと噂する人までいたりして…。

この村は松江藩から任ぜられた七名の鉄師が、一子相伝の製錬術「たたら吹き」を以て、数々の名刀を輩出した事で世に知られている。明治以降、安来に西洋式の製鉄所が出来て、奥出雲の「たたら吹き」の歴史は終わった。

シメは村で二日間の休暇を終えて徴用先の広島の縫製工場に戻った翌朝、朝顔に水やりをしていて、原爆投下に出くわした。顔は助かったが、その分背中を真面にやられた。火勢を掻い潜って、神社の石段に腰を下ろすと、背中の皮膚が、紙切れのようにヒラヒラと足元にずり落ちた。それを帯に巻き付けて、海田市の日赤病院に収容された。

五ヵ月間入院して、一人で暮らせるまでに回復したが、背中のケロイドは消すべくもないと判った。この原爆投下で戦争は終わったのだという。日本は負けたが、大社も宍道の湖も昔のままで、奥出雲は何も変わっていないと聞かされた。

「村に帰ってきなさい…」と家族は言ってくれたが、自分一人が被爆者であることを思うと、決心がつかなかった。市内の被災者用アパートに入居して、昼間は職安の世話で市役所の臨時職員として働き、夜もアパートの隣の洋裁店で働いた。徴用で覚えた縫製の技術が役立って、仕事は楽しかったが、だからと言って背中のケロイドの事は誰にも打ち明けなかった。

闇屋まがいのこともした。始発の芸備線に乗り、備後落合で木次線に乗り換えて横田村に行き、米や野菜を買い付けて、昼過ぎに此れを広島駅のガード下で売った。

村は満州からの引揚者が次々と奥地の三井野原に入植して、開墾を始めていた。

「ピカドンは大社様のおかげで出雲には落ちなかった…」と誰しもが嬉々として言うのを何度も聞くことになって、シメは益々自分の背中のケロイドは誰にも打ち明けられなかった。

買い出しの帰りに山の陽だまりで弁当を食べ終ると、顔見知りの男が、突然襲いかかってきた。思いを遂げた男は「嫁に貰ってやる」と言った。横田に帰らないとなれば、それも仕方ないと思ったが、数日後に納屋の明かりの中でシメの背中を見ると、姿を消した。

間を置かずして、同僚の男が「所帯を持とう」と言った。すべてを打ち明けて背中のケロイドを見せると「それでもいいから」と言ってくれたが、いざとなると男の躯が意思に反していうことを聞かなかった。シメは男の腕の中で「横田に帰らなければなりませんケン…」と口をついて言ってしまった。

戸惑う男を振り切るようにして、シメは先々に何の目算もなく村に帰ってきた。親が納屋を改造した十坪ばかりの板敷の部屋と、続きに風呂も造ってくれた。所帯を持とうと蓄えた八千円で、ミシン2台と裁縫台を揃えて、村の女たちに洋裁を教え始めた。畑帰りの青年や、国鉄の作業員が、通りがてらに立ち寄って女たちを冷やかしていく。農繁期になると、シメは広島の洋裁学校に通って、縫製の腕を磨いた。たちまちシメの家には都会風の風が流れた。

そんな中に陽一というクリクリ頭で、少年の面影を残した二〇歳の男がいた。彼は隣の亀嵩村で代々続いた鉄師の家の一人息子だったが、十六歳で海軍兵学校に入ったものの、半年で終戦を迎え、郷里に帰ってきていた。

父親は終戦の前の年に安来の鉄工所で事故死していて、同じ年に母親も肺を病んで死んだと言う。安来に行けば出雲の鉄師の子なら雇ってくれると聞いたが、その決心がつかないでいた。陽一も原爆症を持っている。直接の被爆ではなかったが、投下二日後の爆心地に派遣されて、救援作業に従事しての被爆後遺症である。

四月、陽一が三井野原で、追い肥を積んだ車を曳いていると荷が急に軽くなって

「…安来に行かないの?」シメさんの声だった。胸がドキドキして、振り返れなかった。このドキドキを昔どこかで経験した気がした。小学校二年生の時に、大社町から赴任してきた若い女先生に、陽一クンの家は「たたら」だったわね…と特別に声をかけてもらった…あの先生の声と同じだったからだ。鉄師の家の子だと皆の前で言われたことが嬉しくて、誇らしかった時の、あの女先生の声だった。陽一は船通山の頂を見据えながら、七〇〇メートルほど無言で荷車を曳いた。登りきった所で二人は石段に腰かけた。

「お互いに大変ね」とシメが言った。

「ええ…」と答えたけれども、何が大変なのか判らなかった。シメは色々な事を聞いてきた。出来るだけ正直に答えたが

「…で、ピカの方はもういいの?」

「僕は間接被爆だから」ここだけ少し嘘を言った。背中のケロイドを連想されたくなかったのだ。それを隠すために何時も首に巻いている手拭いを、この時は膝の上で握りしめていた。最後に

「お互いに頑張ろうね」と言われたが、何がお互いなのか判らないまま頷いて、手ぬぐいを首に巻いた。

二日後に膝まで雪解け水につかって石垣の草を抜いていた時に、シメがさり気なく寄ってきて、陽一の耳元で「明日の夜十時に一人で来てね。裏の戸を開けておくから。誰にも見られないようにしてね」陽一の気持ちは複雑だった。シメが荷車を押してくれて、嬉しくて舞い上がった二日前の気持ちが蘇ったが、同時に、シメに何かを試されているという気もする。一方でシメに抱かれたい、シメを抱きたいとも思った。結局は誘惑に勝てなかった。

「陽一さんもヤッパリ男なのね」子ども扱いされたようでムッとしたが、最早ここへ来たことを後悔する気もなかった。

「一緒に遊ぼうね」シメはそう言うと襖をあけて奥の部屋に消えた。

「入っちゃダメよ。直ぐに呼ぶからネ」

陽一は息をつめて待った。動悸が喉を突く。微かに布団が動く音がしたが、一向に声はかからない。代わりにシメのすすり泣く声が聞こえた。
「いいョもう…。僕は帰るから…」言い終わらない前に、「きてッ」
シメの声は悲鳴だった。血を吐くような声だった。陽一が襖を開けると、シメは素っ裸で布団の上でうつ伏していた。背中は一面に赤銅色したケロイドが縦横にブリッジをなして、うねって、撚れて、擦れた縄のようであった。陽一は声が出なかった。
「判ったでしょ……」絞り出すシメの声は白いシーツに吸われて、半分も聞き取れなかったが、陽一も上着をかなぐり脱ぎ捨てた。
「なんだい…威張るンじゃないよ。見ろ！これを見ろ！」言いながら背中の亀の甲を突き出した。それは広島に救援に行って、焼け瓦の上で野営した時にできたケロイドだった。しかし、シメはシーツに顔を埋めて泣くばかりで陽一の背中を見ようとしない。
陽一はシメの背中に組み付いて不器用に接吻した。
「ね、どうするの？　僕はどうすればいいの？」それを聞いてシメは声をあげてまた泣いた。陽一が呆然としていると
「私のケロイドを見て、それでもこうして背中を抱いてくれたのは陽一さんが初めてよ」そう言いながら、陽一の胸に顔を埋めてまた泣いた。
「不思議なのよね。村の人たちも、私がピカドンにやられたことを知っているのに、ケロイドの事は誰も聞いてこないし、慰めも言わないのよ」
言いながらシメは喉の奥でクックッと笑った。
「闇屋をしていたころ、汽車の中や、駅のガード下で取り締まりにあうと、そっと背中を見せて許しを請うたの。気の毒がって警官の大方は見逃してくれたわ。村に帰ってきてからがそう。不安だから何時も人の顔色ばかり伺ってきたヮ。みんなに好かれていないと不安で仕方がないんだもの…」シメは大きくため息をついて
「陽一さんごめんなさい。こんな自分が怖いの。どんどん曲がっていく自分が怖いの」
シメは陽一の首の手拭いで涙を拭きながら、肩を震わ

せてまた泣いた。
陽一も声を出して泣きだした。過ぎてきた歳月が突然に噴き出したのだ。突きあげてくるものをどうしても止められなかった。
「私たちは出雲の、奥出雲の人間なのに、何故あの日に広島にいたんだ。なんでこんな思いをしなければならないんだ。ケロイドは伝染すると嫌な顔をされ、周りに気兼ねして、遠慮して…私たちが何をしたというのだ」と言いながら、シメを抱いて泣いた。

この日を境に陽一はシメの部屋で暮らし始めた。村では久しぶりの好餌として瞬く間に噂は広がり、二人の評判は地に落ちた。五歳も年下の青年を誘惑して誑し込んだというのだ。が二人にとっては、人の目も噂も、どうでもよかった。シメの家の物干し竿に、陽一の下着が干されるようになって、人々は興味深く成り行きを噂しあった。
二人は村を出ることにした。計画は綿密に練られた。先ず陽一は安来の鉄工所に職を決めた。工場近くに借りた風呂付の一軒家に、二人は目立たないように数回に分けて荷物を送った。当初は心配していたシメの家族が、二人の門出を祝ってくれた。
三月二十日、陽一はシメが仕立てた上着を着て、横田駅六時始発宍道行きの木次線に乗った。満員の通学の高校生等に躊躇して、次発の列車に乗ることになったシメを、陽一は宍道駅で待った。全ては計画通りに進んだのに、シメは現れなかった。

翌日の山陰合同新聞は「木次線午前七時横田発、宍道行きは下久野トンネル手前を速度五十キロメートルで走行中に雪崩に合い、脱線横転。車掌、運転手と乗客の五十六名全員死亡」と報じた。

線路はつづく

馬場　真寿美

カンカンカンカン

遠くで警報機が鳴っていた。電車が動き始めたのだ。

恭子は、鍋をかき混ぜていた手をいったん止めると、視線を上げた。食堂に繋がった薄暗いリビングルームの片隅には、こげ茶色のカバーを被ったアップライトのピアノが置かれていて、その上に載っている古ぼけた置時計の針は、午前五時を少し回ったところを指している。

（急がなきゃ！）と焦る恭子の脳裏に、ふと、いつもの疑問が浮かぶ。

（線路は一体どこから始まって、そして……、どこまで続いているのだろう？）

だけど今、そんな悠長なことを考えている時間はない。何しろ仕事に出かけるまでに、しておかなくてはならないことが山のようにあるのだ。朝、目が覚めたら、今日のように天気の良い日は、まず真っ先に洗濯機のスイッチを入れにいく。そして、洗濯機が唸りながら回っている小半時の間に、年老いた両親の一日分の食事を手っ取り早く作らなくてはならないのだ。

今年で八十九歳と八十六歳になる恭子の父母は、有難いことに身体はすこぶる剛健である。それでも、やはり年相応に色々衰えも見え始め、咀嚼する力、嚥下の力ともに弱くなっているから、なるべく消化の良い柔らかいものを用意するように努めている。一度、弁当の宅配も試してみたのだが、二人の口には合わないようで、結局、食事の仕度は恭子が一手に引き受けることになった。

二人とも降圧剤を服用しているにも拘らず、血圧はかなり高めである。だから、恭子は日頃から、塩分を控え目に極力薄味に仕上げようと心掛けている。

なのに、そんな恭子の思惑に反して、歳を取ると味覚が鈍くなるのか、両親はますます味の濃いものを食べたがるのだ。その頃合いが難しくて、とにかく柔らかい滋養のある食事を二人に摂らせようと思うと、みじん切りにした様々な野菜を加えて、だしを効かせ塩分をなるべ

く少なく済むよう工夫して、長時間煮込んだ雑炊が一番手っ取り早かった。雑炊と汁物だけ用意しておけば、後は冷蔵庫の中から梅干しやらを出してきて、二人で勝手に食べてくれる。

弱火でコトコトと鍋を火にかけている間も恭子は休みなく立ち働いて、次々と家事を片づけていった。自分の身支度まですっかり終えて、出かける準備が整うのは七時過ぎになる。

それが恭子の朝の風景である。

確かに肉体的にはかなりきつかったが、両親が喜んでいてくれさえいれば、恭子はそれで満足だった。

六年前、一人娘の梢を嫁に出した後、恭子が熟年離婚に踏み切れたのも、何も言わずに受けとめてくれる実家の存在が背後にあればこそである。夫は確かにハイスペックだったが、その代わりずいぶんと酷薄な男だった。

せめて娘が嫁ぐまではと、恭子は長年耐え忍んできたのだ。

恭子の両親は、理解があり愛情に溢れた父母だった。大切に育ててもらったと深く感謝している。だから、彼らの老後が満ち足りたものであるよう、二人が幸せだと感じてくれるよう努力することは、恭子にとってなんの苦労でもない。一人娘だから、両親亡き後、恭子にはこの家と財産が残される。離婚に際して別れた夫からも財産分与を受けているから経済的に何の心配もない。

それでも、恭子が仕事に出ているのは、両親と同居する上で、離れている時間があった方がお互いに息抜きにもなるだろうという理由からだった。フルタイムで働くことはさすがに母に難色を示されたので、週に三、四日だけ、音楽教室で受付の仕事に就いている。恭子はもともと音大卒だったたから、結婚している間は自宅でピアノの教室を開いて収入を得ていたのだが、恭子の幼少の頃には、あれほどピアノの練習に熱心だった両親が、年老いた今、ピアノの音すら耳障りだと嫌がり、実家でピアノ教室を開くことは断念せざるを得なかった。

その月の恭子の出勤表が出て冷蔵庫にマグネットで貼られると、出勤以外の日には、両親の病院通い、リハビリ等の用事で、あっという間に埋められてしまうのがいつものことである。それでも、恭子は満ち足りた幸せな

思いを抱えて毎日を暮らしていた。

その日、恭子は仕事が休みだった。

導眠剤を呑まなくては眠れない恭子の両親は、薬のせいか、いまだ起き出す気配もない。時計の針は九時をとうに回っている。恭子はいつものように雑炊の鍋をお玉でかき混ぜながら、知らず知らずチャイコフスキーの曲、〝眠れる森の美女〟の一節を口ずさんでいた。

タタタタタタタタ　タッタッタ♪
ターラ　ターラ　タッタッタ♪
白いタイツを穿いた少女が踊っている。

昨晩、及川繁之に招待されて、彼の娘のバレエの発表会を観に行ったのだ。及川とは二年前、友人に紹介されて知り合った。物腰が柔らかく、温和で誠実な人柄に恭子は惹かれていた。

歳は恭子よりも一つ若い五十一歳で、五年前に細君に先立たれ、実家の助けを借りて一人娘の加奈ちゃんを男手ひとつで育てているのだという。加奈ちゃんはまだ小学生で、友人の話によれば、奥さんが病弱だったせいで、かなり遅くにできた子どもだということだった。舞台で踊っている少女を見ていて、

（どこか梢に面差しが似ている……）

と、恭子は思った。

梢を育てていたあの頃が、恭子にとって人生で一番輝いていた時ではないだろうか。加奈ちゃんを見ていると、娘がまだ幼かった頃の様子が思い出された。

大切に大切に慈しんで育てた娘は、成長してやがて恋を知り、母親の翼の下から大空へ飛び立っていった。短大を卒業してすぐに、学生時代からつき合っていた男性と結婚した梢は、花婿の仕事の都合で海外に渡ったのだ。いつ日本に戻って来られるのか分からない。今度、顔を見ることができるのはいつだろう？

――それはそれでいいのだ。

恭子も納得している。娘が幸せなら恭子になんの不満もない。しかし、頭ではそう分かっていても恭子の心中は複雑に揺れた。

（今はいい。私には両親がいる。だけど、両親を見送った後は……？）

──私は……独りだ。

昨晩、思いがけなく恭子は及川から求婚された。恭子はその場では返事をしなかった。いや、できなかったのだ。そんなことが本当に可能なのだろうか？　私には両親がいるのに……。

──いつまで続くんだろう？

初めて思った。

舞台の少女を目で追いながら、恭子は思い出していた。

（私も、ずっとバレエが習いたかった──）

その憧れは強く、幼い頃、何度も泣きながら母に頼んだが、その願いが聞き届けられることはなかった。バレエでは、将来身を立てることは難しいという理由で──。代わりに与えられたのがピアノで、結局、母の言ったことは正しかったのかも知れない。

だけど──、

（私は、いつも良い娘を演じてきたのではないだろうか？）という疑問が恭子の頭を過る。

別れた夫は、一流大学卒で大手企業に就職しており、家柄も申し分なかった。

（私は彼を本当に愛して結婚したのだろうか？）

恭子は目を瞑り、大きく頭を振った。

（そうじゃない。私は、彼なら間違いなく両親が祝福してくれるだろうと思ったのだ）

私は、無意識のうちに両親の意を汲んで、敷かれたレールの上をひた走ってきただけなのではないだろうか。

（では……、では、離婚は──？）

夫は離婚を望んではいなかった。〝もう一度やり直したい。俺に悪いところがあったなら善処するつもりだ〟と、弁護士を介して伝えてきていた。そう言われると、固く決意していたはずなのに、恭子の心も揺らいだ。無理もない。二十年という結婚生活には、幸せな瞬間だって間違いなく存在したのだから。

あのとき──。

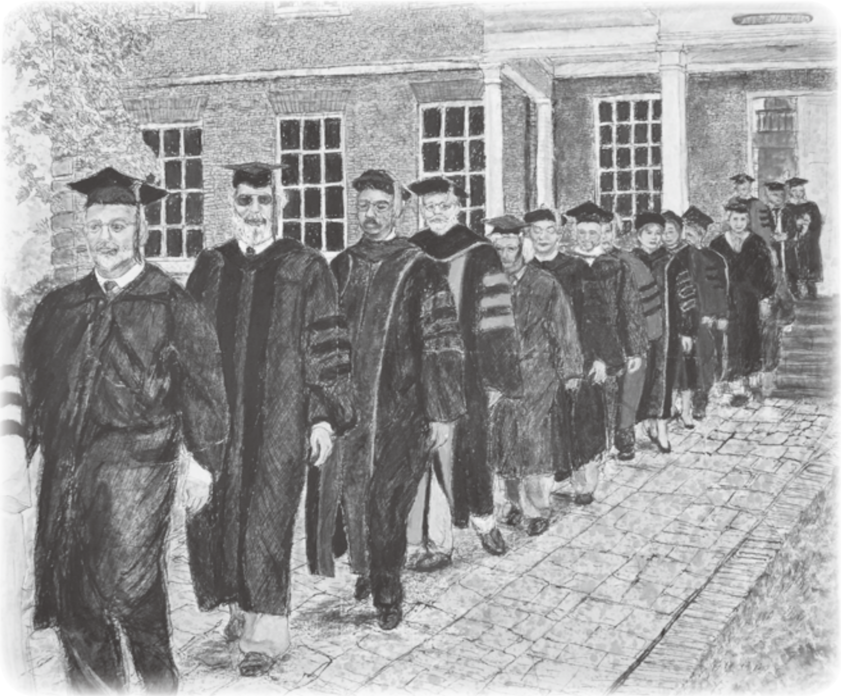
離婚すべきかやり直すべきか、迷い始めていた恭子は、母親に相談しようと実家に電話を入れた。母と交わした会話は思い出せない。ただ、電話口を通して聞こえてき

た、あきらかに機嫌を損ねたらしい母親の声――。
当時、すでに八十の坂を越えていた両親は、二人だけで暮らしていくことに限界を感じ、不安を抱き始めていたのではないだろうか？
そこまで考えて、恭子の頭の中に、今まで思いつきもしなかった怖ろしい推測が、じわじわと、まるでこぼれた墨が浸み出すように真っ黒に広がっていった。

恭子は調味料ストッカーから塩をひとつかみ、そして、もうひとつかみと鍋に加えた。高齢の両親は、いつも恭子の作る薄味の雑炊には不満げな顔をする。だけど、今朝は、きっと舌鼓を打って食べてくれることだろう。

タタタタタタタ　タッタッタ♪
ターラ　ターラ　タッタッタ♪

恭子は軽やかに鼻歌を歌った。



油彩　福本 多佳子

濱田 優さんを偲んで…

西川　武彦

お通夜では濱優さんに会えないと思い、九月四日の告別式に参列してお顔を拝みながら別れを告げました。今から十三年ほど前、掌編小説分科会を一緒に立ち上げたものとして、彼を失ったことは実にさびしいです。

作風は、不肖・筆者こと喜多川雅人の場合は遊びっぽい、いいかげんなものが多いのに対して、濱優さんの作品は、彼自身が主人公のような優しい登場人物たちが多く、必ず優しさの余韻が残る結末になっていました。

彼には、掌編小説とは分野が違う卒サラ川柳シリーズでも小話を書いて貰いましたが、それらも同じ印象だったと記憶しています。

彼と立ち上げた隔月の掌編小説分科会は、二〇二〇年一月に七十八回を迎えました。彼は亡くなる直前まで、同分科会への掌編の提出を一度も欠かしたことはありませんでした。とにかく一緒に沢山書いたものと、彼の優しい人柄、長身の濱優さんの容姿、訥々とした口調の濱優節、やわらかく整った文章などを、懐かしく思い出しています。

筆者も、ときには濱優さんの作品を思い出しながら、それを参考にして、掌編小説分科会の伝統を維持していきたいと思っています。

余談ですが、彼とは奇縁があり、彼が卒業した日比谷高校で彼に英語を教えていたK先生が、ご縁があって筆者の家庭教師だったことを、いま懐かしく思い出しております。「君には英語の力はあるけど、作品を理解する常識に欠ける…」とかで、東大の教養学部で使われていたという英語の小冊子を読まされたものです。この欠点は相変らずかも、と濱優さんを思い出しながら、自省している次第です。

活　動　報　告

写真　野瀬 隆平

『掌編小説勉強会』の著者から一言

『掌編小説勉強会』は、２００７年にスタートし、本年1月で78回を迎えました。その間、６２５作品が生まれました。そこでメンバーの皆さんから一言です。

★平野　塔子（馬場　真寿美）

私が書きたいのは、誰の心の中にも必ず潜んでいる心の闇でしょうか。読んでゾクっとするような作品を目指しています。今までの作品での自信作は『夜叉』です。

★猶惟　寿昭（平尾　富男）

最近は創作意欲が減退していますが、過去の作品では『愛の渦潮』が好きです。ペンネーム「猶惟　寿昭」は母方の苗字「直井」、名は父親の敏（さとし）に因んでいます。

★喜多川　雅人（西川　武彦）

掌編小説勉強会は２０２０年1月で78回を数えるに到り、最近の喜多川作品はショート・ショート的になっているので、初心に戻るべく努めたいと念じております。

★野上　浩三

アガサ・クリスティーの、会話を主体とする叙述方法を真似ています。彼女の全作品約80冊を英語で読み、文学作品としても超一級であると知った結果です。

★野瀬　隆平

自分では小説を書かず、もっぱら批評するだけ。これまでに、およそ五百編を読んだ。作者から作品の意図するところを直接聴けるので小説鑑賞の勉強になっている。

★大塚　喜子

入会して一年半になりますが、隔月に作品を出して、同好の厳しい！意見を聞くのは至福の時です。書くことで身辺の事象を整理できるのも魅力です。

★今日　あした
（内藤　真理子）

今日と明日をの

せた大地がせり上がり、底の見えない深淵が広がる夢を見た。ペンネーム「今日あした」は、昨日に続く今日と明後日につながる明日だと肝に銘じた。

★村野　育雄（富岡　喜久雄）

文章修行にOBペンクラブ、八百字にて鍛えられ、談話室からエッセイへ。さらに長篇の掌編小説に進むも、体験談話も種が尽き目下休筆中。大河小説構想中。

★廣澤　重穂

なんたって読者が主役。〝上手い〟より、下手でもいいから〝面白い〟って言われたい。え、芥川賞？直木賞？メじゃない、メじゃない。いわんや本屋大賞をや！

★とんだ　玉三郎（児玉　寛嗣）

体験や読書、テレビ、ネット等で得た知識。それらをネタに想像力を働かせて話をどう展開させ、小説にするかだ。その過程が掌編小説を書く楽しみである。

★内田　豊文（塚田　實）

毎回、締切りに追われながら、何とか書き上げています。もう二十作を越えました。読み手視点からの発想や、文章力の向上など、随分鍛えていただきありがたいです。

★松谷　隆

小説を書きもしない、でも書こう会の伝統を維持すべく辛口のコメント専門です。特に新入会員の作品は厳しくチェックしています。こうして毎回楽しんでいます。

★福本　多佳子

「ワード」を開け、キーボードに手を置くと、何かを書き出している。すると次々に人が現れ、話の内容が耳に飛び込んでくる。一晩で十枚くらいになるが、その後が大変。推敲段階が生みの苦しみかと思い始める。

★村谷　卓一

今までに発表した作品は、歩きお遍路の体験をもとに『お四国さん』（全五回）と、徳川家康が今の東京に来たとした『家康、東京へ』（全二回）です。

★小道　周帆（清水　勝）

目下、小説の題材切れです。そこで一人旅をしたり、歴史を斜で見たり、しています。いろいろ調べるのは楽しいのですが、あらすじ風になってしまうのは反省。

「何でも書こう会」活動報告

昨年の「何でも書こう会」は、熱海の合宿も含めて二十二回開催で、新しいメンバー二人を加えて三十四人の方が参加され（一回平均十六・四人）、年間合計三六〇余のエッセイが発表されました。

テーマについては例年のように多岐にわたりました。硬派では国の財政赤字や株式会社のガバナンス、世界的な市場主義の行き過ぎなどについての問題提起があり、また宗教にかかわる議論なども取り上げられました。

最も多かったのは紀行文で、国内の名所旧跡、神社仏閣、あるいは近隣の散策、さらには過去も含めて世界各地の珍しい訪問記録など、面白い作品が多く発表されました。文学方面では内外の古典や、それにまつわる奥深い考証、音楽の世界でもさまざまなコンサートの感想文など、味わい深いものがありました。このほか日ごろの身の回りでおこった珍談奇談、海外の小噺などなど、肩の凝らない軟派も楽しめました。

というわけで各々の作品についていろいろな角度から議論が交わされ、午後一時から五時までの長丁場もいつのまにか時が経過していきます。昨年も何人かの方に見学に来ていただき、その中から新しく会員になっていただいた方もおられますが、今年はさらに多くの方をお招きして、何でも書こう会の雰囲気を味わっていただき、一人でも多くこの会に加わっていただきたいと念願しております。皆様のご協力を切にお願い申し上げます。

作品についての感想、議論という点では、内容そのものに関するものが最も多いと思われますが、そのほか文章の構成や表現方法、さらには句読点の打ち方など技術的な指摘もあります。これらを総合して今年度の目標としては、他人に理解してもらいたいテーマについて、ひとりよがりにならず、いかにスッキリ分かりやすく表現するか、肩の力を抜いて、遊び心を忘れないように……というようなことを皆で一緒に話し合っていけたらと思っております。よろしくお願いいたします。

（プロマネ　大越、大森、志村、三春）

サロン21　活動報告

昨年は御代替わりがあり、令和という新しい時代が幕を開けた特別な年でした。平成は残念ながら停滞と沈黙の続いた三十年でした。日本はどんな課題を抱えているのか、経済の沈滞や少子化から抜け出す対策はあるのか、MMTという新しい理論は日本の活性化に寄与するか、などを考えてみました。令和は力強い日本が復活する時代にしたいものです。

国際面では、米中の対決が一層鮮明となり、英国のEU離脱も確実視される状況で、歴史の転換点にあるのかもしれません。グローバリズムとナショナリズムの衝突などにも目を向けて勉強いたしました。

活発な議論を続けることができた一方で、当分科会きっての論客であられた鳥海博さんが三月に急逝されたことは大きな痛手となりました。また、豊富な経験と知見をお持ちの諸先輩もだんだん参加が難しくなってきているのは寂しい限りです。若い会員のフレッシュな知見とパワーが必要です。ご参加お待ちしています。

二〇一九年の各月のテーマとプレゼンターは左記のとおりです。

一　月　平成とはどんな時代だったのか　森田　晃司
二　月　日本の課題　森田　晃司
三　月　東洋倫理の敗北、真実の朝鮮近現代史　浅井壮一郎
四　月　グローバリズムとナショナリズムは兄弟　安田　茂氏
五　月　航空管制について　杉浦　右藏
六　月　成長率はなぜこんなに低いのか　山縣　正靖
七　月　現代貨幣論（MMT）について考える　野瀬　隆平
八　月　夏休み
九　月　日本の近代化は江戸時代に始まる 前編　浅井壮一郎
十　月　なぜ無謀なあの戦争を始めたのか　下山　健夫
十一月　日本の近代化は江戸時代に始まる 後編　浅井壮一郎
十二月　香港動乱と日本にできること　森田　晃司

（プロマネ　森田、下山）

ペン俳句のこの一年

佳句鑑賞　西川　知世

　今年は十三名にメンバーが増え、句柄、視点の多様化が著しい。取りまとめる者として身に余る喜びであった。また、ベテランメンバーの真摯で熱心な作句姿勢も特筆すべきことで、句会はいよいよ充実して活発である。選句、選評の活発な質疑応答もだが、バラエティに富む各句は、浅学の私を鍛えてくれ楽しいことこの上ない。

　吟行は十一月四日、恒例の箱根一泊。旨い箱根蕎麦で腹を満たしたあと、俳句は自然とともに今を詠むことを実証するように、台風十九号の傷跡も痛々しい箱根芒原に句帳を開いた。一句に大風の痛みをとどめようと皆、悪戦苦闘し、収穫を得た。

　二月、村谷卓一（俳号・たかし）、四月、内藤真理子（俳号・まりこ）、長尾進一郎、七月、新田由紀子（俳号・由希）、各氏の参加を得た。

傾ぐもの空を指すもの薄穂に　　西川　知世
雨に伏し地に紅零す山薊
分け入ればざざと風鳴る芒原
痩せてゆく地球にやはし芒原
秋夕焼出水暴れし疵いくつ
冬隣る雲の底なる山上湖

…………………………………………

初風の祓ひ清めよ御代替り　　森田　元斐
移り来し地を産土に花水木
春風のきまぐれに舞ふレジ袋
豊穣へホーランエンヤの勇み渡御
銘剣を抱きつ古墳冬籠り

　平成から令和へ年号が移った。初風は秋の到来を感じさせるそよ風をいい、澄んだ秋の大気を表す季語。元斐句として残したい。同じく風を詠っているが、三句目は春の突風に舞うレジ袋。きまぐれと詠う目線が効いた現代の句で、多彩さは元斐句の特徴でもある。

村谷たかし

藤棚の上に聳ゆる電波塔
車椅子の母と廻りて牡丹園
美濃路来し足の疲れや水ようかん
涼やかや町に燃料電池バス
真中より穂を振り分けし芒原

句柄が豊富で、思い切りのよい俳句を作られる。勢いは作句の原動力であり楽しみ。藤棚の句は近々と電波塔が聳えている下の藤棚、硬質なものと風に揺れる藤の対比が面白い。同じように美濃路を辿る旅の疲れを名物の水羊羹の涼しさで癒す旅上手の句である。

新田　由希

歩道橋渡る額に月澄めり
天高し恒星間を石の飛び
大風の落葉を窓に打つ夜かな
塀の上の落葉一枚揺れにけり
濡れ煎餅焼く店先や宵の雪

一句目は、十月句会初参加の作。秋の空気感がよく出ている。代々木の例会場近くの歩道橋が思い浮かぶ。共感される人も多いはず。二句目は、秋天を突き抜けて宇宙へ作者の思いはつながる。一転、濡れ煎餅の句は夕暮れの町の匂いが漂う。句柄のよさと多彩さは楽しみ。

長尾進一郎

梅雨晴や散歩の犬の前のめり
始発待つホームの下に虫鳴けり
芒原穂先の描く稜線図
草原を渡る風音冬近し
片方の失せし手袋棚の隅

箱根吟行では俳句の基本、見て作るという感覚を捉えられたようである。芒原、草原の二句は見た景を素直に表現された。稜線まで芒が這い上る仙石原、風が音をたてて冬を連れてくると感じた景は今回の吟行の日ならでは。梅雨晴の句は散歩の足らない季節の犬の写生句。

初風呂やお湯をまるめて嬰を抱く　　　　　中村　晃也
膨らみに硬軟のある冬木の芽
チュラ海の藍の濃淡白日傘
浅間嶺に煙立つ見ゆ蕎麦の花
触れ合うて大きな露となりにけり

俳句では初湯（はつゆ）と読み、新年の季語。産湯とは違う。中七の措辞がいかにも年初のめでたさを表現できている。他の四句は、カメラレンズを通して見ているように対象を捉えている。芽も海の藍も煙と花の遠近、転がる露ばかりでなく葉の大きさも見える。

……………………

花みずき母の好みし散歩道　　　　　内藤まりこ
祭待つ団地の広場やぐら立ち
ジョギングのシューズに露や朝ぼらけ
ゴミ出せば見上げる空に鱗雲
天荒れてすすきが原に鬼の見ゆ

花みずきの句は句会デビューの句。初心の瑞々しさが心地よい。四句目までは、身辺詠の秀句。衒いや気取りのないのがまりこ句風であったが、吟行で五句目の句をものにした。見えた鬼は、災害をもたらした台風とも、人の中に潜む鬼とも読める大胆で素敵な句である。

……………………

節くれの枝に梅花のやはらかき　　　　　田中　水え
星月夜白々浮かぶ天文台
コスモスの揺れ宇宙からのシグナル
焼牡蠣や岩砕く波オホーツク
落葉踏む音を残して地下鉄へ

焼牡蠣の句は句会での高得点句。オホーツクを前に食べる焼牡蠣は美味しそうで牡蠣好き、旅好き、酒好きの票を浚った。三句目は映像と聴視の感覚が同じ重量で句の中にある。コスモスが風に揺れるは当たり前の景なのだが、宇宙からの信号が揺らすという感覚は個性的。

首藤しずを

房州や花菜の涯の海の色
独り居の紫陽花雨に濃くなりぬ
奥入瀬の水のとよみや夏盛ん
寄席文字を濡らし無聊の秋の雨
夕闇に景気をはやし熊手市

句会でご活躍である。真摯に句にむきあう姿勢に教えられることが多い。俳句は絵画的で色彩が浮かぶ句が多く力強い。房州の句は、菜の花の黄と海の青さ、窓に見える紫陽花と雨の部屋の影、雨で深くなる寄席文字の墨の黒、夕闇に赤赤灯る熊手市の派手な色の賑わい。

…………………………………………

志村　良知

冴返る日の家苞の卵焼
キャンパスを行く白き腕夏兆す
花筏真ん中割りて真鯉の背
乳牛の霧に臥したる夜明けかな
秋海棠零るる母の九回忌

冴返るは立春過ぎのぶり返した寒気。出来立てでまだぬくみのある卵焼きの土産は待つ人へ足も早まろうというもの。早春の華やぎである。キャンパスの句、夏きざすも季節が変わったばかりの季語。春の日が夏の日ざしにかわったと若者の腕に感じる感覚は繊細。

…………………………………………

斉藤まさお

初夢や寝顔笑む子の握る夢
朝練の掛け声ひびく樟若葉
炎天や乗り捨てられし三輪車
仰向けに傘二つ干す梅雨晴間
ふるさとのわらさ捌きぬ初しぐれ

まさお俳句は対象をみつめる句が多い。子規の言う写生俳句で、句の中に実体があり、その手掛かりで読み手は体験や感情を重ねていく。赤ん坊の握った手と笑み、三輪車、仰向けに干された傘…それらに目をとめ、五七五に落し込む作業を楽しんでおられると拝見している。

大津そうかい

寒暁や明り点れる窓ひとつ
畳屋の広きガラス戸梅雨夕焼
隣国は秋冬よ同じ月仰ぎ
燗番の無口が取り柄雁渡る
穂芒の波こなたへとかなたへと

そうかい俳句は視点の自由さと正確さ。対象を掴みとることに努めておられると拝見する。畳屋のガラス戸、隣国同士で仰ぐ月、燗番の取り柄、詠われてみればなるほどそうだなあと思う。穂芒の句は箱根吟行での句。帰りに若いころ上られた金時山に登られたそうである。

………………………………

大泉　子泉

真直ぐに背伸ばし落葉踏み歩む
子ら集ふタイムカプセル開く春
湖に映ゆ若葉の中の海賊船
瓜揉みの濃い酢の香り大西日
公園へ猫に会いたく露を踏む

身辺詠が得意の子泉さん、一句、五句目はいかにも子泉さんのお姿を彷彿とさせる。十月から体調を崩された。早い回復と句会復帰を祈念している。子泉さんの声のない句会は寂しいかぎり。俳句は鉛筆と紙があれば楽しめる。作句がご療養の日々に力となりますように。

………………………………

安藤　晃二

山茶花の三日の命活けにけり
中天にオリオン捉へちちろ鳴く
富士に落つ夕陽の眩し年暮るる
奥久慈や早暁に輝る冬紅葉
大楠や巫女の鈴の音冴え返る

山茶花は椿に似るが散り際が異なり、儚い花。三日ほどで散るのはわかっているが、その儚さを手元において風情を楽しむ作者。ちちろは蟋蟀のことで、鳴く虫の代表選手。その虫の音が中天のオリオンを捉えていると詠う。りーりーと鳴く声とオリオンはよく似合う。

二〇一九年「ペン川柳」勉強会の成果

二〇一九年も湯河原合宿を挙行、八名が参加しました。自然に親しみ川柳の研鑽に励みました。翌日は町立湯河原美術館を訪れた後、真鶴に足を伸ばし、中川一政美術館の作品に感動、海鮮料理屋では海の幸を堪能しました。

七月から、塚田が平尾世話人とともに世話人を務めることとなりました。伝統の「ペン川柳会」を平尾とともに支え発展させてゆきたいと思っています。

今後ともペン川柳会のご支援宜しくお願いします。

以下ペン川柳子の活動をご紹介します。

（安藤晃二）

【晃二（てるつぐ）】

「釣　り」：釣り糸に軍略託す太公望
「落とす」：巨星落つせめてなりたや星屑に
「　酒　」：無礼講信じて舌禍呑まれ酒
「下がる」：下げたかと先祖見に来る盆提灯
「　稲　」：姥捨（おばすて）や水田が良し陸稲（おかぼ）より

作者は俳句的川柳を詠むのが得意です。姥捨の棚田が思い浮かびますね。巨星は国連難民高等弁務官として大活躍された緒方貞子さんです。

（稲宮健一）

【井波（いなみ）】

「隠　す」：絹の道笑顔で隠す赤い爪
「　株　」：もの言うぞ株で押切る横車
「　稲　」：稲渡来格差スタート弥生の世
「落とす」：落とされてハッと気が付くトリの芸
「　鍵　」：印象派構図の鍵はジャポニズム

時事話題が得意です。「一帯一路」や、会社経営を論じたり多彩です。格差問題にも触れています。また落語のオチに気付く一瞬の遅れはよくありますね。印象派絵画は浮世絵に影響を受けたと言われます。

（岩崎洋一郎）

【不言（ふげん）】

「立　つ」：役立たず言われ納得老いの果て
「　酒　」：「酒ハラ」と言いたいほどに宴乱れ
「下がる」：徳利（とっくり）を下げた狸もセクハラか

「汗　」：冷や汗もかかないほどの鈍感さ
「鍵　」：口に鍵言いつつ漏らすあの秘密

サラリーマン川柳の雰囲気ですね。「下がる」は七月の最優秀句でした。信楽焼の置物が思い浮かびます。「鍵」の「ここだけの話」はどんどん拡散します。柳号が「不言」なのは笑えますね。

【だし】　（大野　昰）

「酒　」：失敗も懐かしくなる酒の席
「金　」：『金の蔵』買ったは良いが大暴落
「株　」：鴨川の水より怖い株相場
「下がる」：下げた株何時まで待とうホトトギス
「餌　」：近頃は釣った魚の餌で泣く

どうしても株相場が気になるようです。白河法皇は「わが心にかなわぬもの」として、加茂河の水、双六の賽、山法師を上げています。

【火酒（ウォッカ）】　（三　春）

「釣　り」：陸釣り（おかづり）に竿は要らねえ金と口
「隠　す」：バレてなおハゲと入れ歯を隠す癖
「金　」：花束や感謝状より金一封
「下がる」：古亭主払い下げますおまけつき
「汗　」：若冲（じゃくちゅう）の奇想思わす汗のしみ

女性川柳子ならではの感覚が溢れています。「釣り」（二月）と「下がる」（七月）は読み手を驚かせます。この二句は最優秀句にも選ばれました。「おまけつきで払い下げ」は怖いですね。

【酔雅（すいが）】　（西川武彦）

「立　つ」：立つ噂昔浮気で今病気
「酒　」：樽酒をちびちび飲んで賞味切れ
「金　」：財布にはお金押しのけ診察券
「落とす」：落とすのは昔は女今財布
「落とす」：空の旅落ちる・落とすは皆禁句

老いの悲哀を笑い飛ばしていますね。脱帽です。「立つ」（一月）「金」（五月）「「落とす」（十月）と三句も最優秀句に選ばれました。これからも楽しい川柳が待ち遠しいですね。

【我々好(ウイスキー)】

「立　つ」：煙すら立たぬ男のモテ話

「金　」：老眼鏡むかし金縁いま一〇〇円

「稲　」：オレ晩稲(おくて)傘寿でようやく熟年期

「鍵　」：鍵っ子は古稀になっても独居老

「餌　」：疑似餌でしょ？あっさり女に見透かされ

（浜田道雄）

老いの悲哀を笑いで包んでいます。男と女の情愛は得意分野です。「傘寿でようやく熟年期」なら人生はこれからですね。元気に活躍する我々好さんが目に見えるようです。

【酔深(すいしん)】

「釣　り」：糸切って逃げの一手の釣られムコ

「立　つ」：寝て起きて立ってまた寝るお正月

「汗　」：稲妻に冷や汗かいてヘソ隠す

「汗　」：汗かいてフェロモン爆発夢心地

「落ちる」：入試でも入社試験も皆落ちた

（平尾富男）

生活感が溢れていますね。外遊で数か月間のブランクがありましたが、ペン川柳会の世話人・重鎮としてまだまだ頑張ってもらいます。

【損得(そんとく)】

「酒　」：身を削る度合いで決まる吟醸酒

「下がる」：また災害頭が下がるボランティア

「稲　」：老妻も稲刈る手には日焼け止め

「落ちる」：気になるな昔の友の落ちる先

「鍵　」：大切な鍵入れ箱の鍵どこだ

（細谷　博）

目配りの広さと深さに感心しきりです。「酒」は三月の最優秀句に選ばれました。最近は農家の女性のイメージもすっかり変わりました。

【零門(れいもん)】

「立　つ」：立つ座る『よいしょ』の声でやっと出来

「下がる」：「頭が高い」下げられませんメタボ腹

「下がる」：血圧が上がる下がるも妻次第

「稲　」：稲光妻も隠した二段腹

「餌　」：油断すな釣った魚もエサを食う

（松谷　隆）

生活に寄り添った句が多いですね。「妻」絡みの佳句

も多いです。「稲」（九月）と「餌」（十二月）は最優秀句でした。「下がる」の二句も笑わせますね。今年は台風で檸檬（れもん）の被害も大きかったそうです。

【明迷（めいめい）】　（八木信男）

「酒　」：酒飲めぬ師匠高座で大虎（おおとら）に
「隠　す」：隠しても隠してもバレ怖い妻
「株　」：乱高下株より恐い血圧値
「株　」：ダメ親父死亡保険で株上がり
「汗　」：非正規も同じ分だけ汗流し
「鍵　」：鍵っ子は老いて今度は名札下げ

取り上げる題材も幅広く、磨かれた句が多く、作者は優秀句の常連です。「株」（血圧値）（六月）と「汗」（八月）は最優秀句に選ばれました。社会を詠む川柳の基本に沿った表現は上手いですね。

【安兵衛（やすべい）】　（山縣正靖）

「釣　り」：釣り好きよ三途の川で何を釣る
「金　」：金メダルフェイクだろうとみな噛（かじ）り
「株　」：特朗爺奴（とらんぷめ）つぶやく度に株下がる
「落とす」：まゆ玉を前に落とすとノックオン
「鍵　」：鍵探し今日も半日忙しい

作者は経済の専門家です。時事話題をタイムリーに取り上げています。まゆ玉はラグビーボールのことです。昨年はワールドカップで盛り上がりました。

【拿々（だだ）】　（塚田　實）

「隠　す」：黒塗りで隠してみたが裏読まれ
「下がる」：京歩き上がる下がるで道迷い
「稲　」：パワハラに負けず耐え抜き稲実る
「落とす」：濡れ落葉払い落とすもまといつく
「鍵　」：合鍵はあなただけよで通い詰め
「餌　」：餌撒いて鯉は来れども恋は来ず

まだ新人の川柳子ですが、幅広いジャンルで川柳を詠み、頑張っています。これからも先輩川柳子の指導を得て、研鑽を重ねます。「隠す」（四月）と「鍵」（十一月）は最優秀句に選ばれました。

（世話人　平尾、塚田）

ペン・フォト句会

二〇一一年にこの会が産声をあげ、二〇一九年十二月で百回目の開催となった。八月を除いて毎月一回の開催だから約十年掛かったことになる。これだけ続いたことについて、参加されたフォト句会員に感謝したい。

フォト句作品集「フォト句で遊ぼう」が二〇一七年四月に刊行されてからあっという間に二年が経過した。

百回記念のカレンダーを作ろうという結論になったのは昨年十一月のフォト句会であった。翌年のカレンダー制作には時間とのギリギリの勝負だ。新たに作品を募集する時間もなく、これまでの投稿作品からカレンダーに相応しいと思われる作品を抽出し、全員の作品をまんべんなく用いるような配慮が必要であった。

最初の問題点は、フォト句会の会員数は十三名、カレンダーの紙面は十二ケ月分だから、一番出席率の悪い会員の作品を割愛せざるを得ないことだった。ところが、カレンダーの十三枚目に翌年の全月を記載する面があり、画像は十三枚必要なことが判り窮地を脱した。

制作部数は、ＯＢペンクラブ会員に一部ずつ進呈するとして約六十部、フォト句の全会員に十部割り当てると百三十部。そこで制作部数を二百部と決定した。

中村が会員各自の作品から画面のきれいな作品を選び、相応しい月に割り当てる構成を担当。

美術監督の三春さんが月めくりのカレンダーをネットからダウンロードし、原型を制作し、二百部制作を前提として和歌山県の業者を発掘し価格を交渉した。

費用面では、ＯＢペンクラブへ出版助成金を申請し許可され、それに併せてフォト句会各員の出資額を決定。予算の不足分はフォト句会の会費の剰余分（埋蔵金）を充てることにした。

新入り会員の長尾さんが、発注原案の細部修正並びにカレンダーの配布と集金の担当と大筋が固まった。

企画発案から二週間で立派なカレンダーが出来上がった。皆様のご協力に改めて感謝申し上げる次第です。

（プロマネ　中村晃也）

英語を読もう会 2019年の活動報告

英語文献、主に報道記事、論説、文芸作品などについてメンバーが、各自の趣向により輪番制でプレゼンを行い、内容についての議論、英語表現のポイントをシェアする。

開催月	題　　名	担当名
1　月	“JAPAN RISING” The Iwakura Embassy to the USA and Europe Cambridge University Press KUME KUNITAKE（米欧回覧実記より）	大泉
2　月	The Clash between Trump and the Federal Reserve（FRBと大統領との意見の確執）	森田
3　月	Fed's Powell predicts solid but slower growth in 2019 Fed aims to set new course by enlarging $4 tril. balance sheet（パウエル FRB議長の両院における経済見通し報告）	安藤
4　月	The post-Brexit relationship with Europe is still obscured by fog（メイ首相のＥＵ離脱交渉難航、肝腎なのは将来の対 EU 関係の構築にあり）	安藤
5　月	Venezuela China Debt Chinese Loans Socialism（中国一帯一路政策、原油をカタに巨額融資、相手国の政治崩壊のケース）	森田
6　月	Merkel at Harvard: Tear down ‘walls of ignorance’（メルケル氏、ハーバードの卒業式で基調講演） Organizers Worried about Beer Shortage at Rugby World Cup（ビールが足りなくならない様に）	安藤
7　月	A new era requires a new model in Japan（日本が令和の新時代に抱える問題点についてＦＴ記者が意見開陳）	大泉
9　月	Circulating in China’s Financial System: More Than $200 Billion in I.O.U.s（中国の巨額不良債権裏事情）	森田
10　月	Whither Central Banking?（中央銀行「特に日本と ECB」のマネタリー政策一本槍を批判）	安藤
11　月	No, wealth inequality has not ruined American democracy（格差が金権政治をよび民主主義を崩壊させることはない、民主党ウォレン候補への批判）	森田
12　月	Hong Kong democrats cheer landslide victory in local election amid political crisis (Reuters)（区議会選挙で民主派圧倒的勝利） China Risky Endgame in Hong Kong（中国の危ない香港政策）	安藤

「何でも読もう会」はリフレッシュの会

この四月、「読もう会」は満三年を迎えました。十名ほどのメンバーでやっています。

月に一回、午後の三時間半をかけて二冊ずつ読んできました。しんどいという声が出て、今は一冊にしています。その分、議論の時間が十分とれます。余った約一時間を「メンバーズタイム」としました。自分の好きな話題、得意な話題を毎月交代で紹介する時間です。文学に限らず、絵でも旅行でも自分の道楽でも何でもありです。

昨年は下記の本を読みました。ながめていると懐かしく感じます。それにしても呑兵衛先生が結構多いですね。荷風や開高、百閒の各先生はともかく、あの太宰先生も『津軽』では大酒しています。太宰の印象が変わりました。読後はこれらを材料に、ワイワイとグラスを傾ける訳です。次第に「何でも飲もう会」になっていきます。

ある人たちは『阿房列車』よろしく「青春18切符」を片手に、二泊の各駅の旅を楽しんだとか。

二〇一九年に読んだ本

二　月	『日の名残り』	カズオ・イシグロ
	『歓楽』他2編	永井　荷風
三　月	『羊と鋼の森』	宮下　奈都
	『出家とその弟子』	倉田　百三
四　月	『李陵』	中島　敦
	『阿弥陀堂だより』	南木　佳士
五　月	『津軽』	太宰　治
	『珠玉』	開高　健
六　月	『山の音』	川端　康成
七　月	『兄の殺人者』	D・M・ディヴァイン
	『阿房列車』	内田　百閒
九　月	『日本の面影』	ラフカディオ・ハーン
	『小説渋沢栄一』	津本　陽
十　月	『かくれ里』	白洲　正子
	『海上の道』	柳田　国男
十一月	『名もなき道を』	高橋　治
十二月	『天平の甍』	井上　靖

（世話人　首藤静夫）

ホームページ関連

昨年、ホームページの顔であるトップページの改訂を行った。若返ったというご意見の反面、最初に見たとき使い方が分からず戸惑った、というご意見も頂いた。

ホームページに関しては内部での議論も活発で、いかにも堅苦しい、初めての人、我がクラブに興味を持っていただいた人にフレンドリーでない、会員の交流の場としても使いやすいとは言えない、などの意見があり、諸所改善の余地があることを感じている。

しかしながら、資金潤沢とは言えない我がクラブ、改善していくには相当な創意工夫が必要である。

昔は、フォートランやベーシックといった「杵柄」を取っていた人もいるではないか、今時のＩＴ技術も怖がらず面倒がらず勉強しよう、という会員勇者からの呼びかけもある。

ホームページへのトータル・アクセス数は漸増で、昨年も過去最高を記録した。

新しいコンテンツ（作品）の発表は相変わらず盛んで、毎月数十件に上っている。新規の掲載作品が多い「８００字文学館」では、掲載直後の作品へのアクセスが目立って多いのも最近の特徴で、題名を工夫し、内容も充実させるなど、アクセスして読んでいただくための努力が実りつつあるのであろう。

三年前、著作者検索システムを導入して以来、アクセス数は急増してきたが、最近伸びに一寸陰りが見えてきた。そこでというわけではないが、エッセイ中心だった我がホームページに、今年から「掌編小説」作品を掲載開始した。エッセイともどもご愛読頂きたい。

（プロマネ　志村良知）

クラブ活動を振り返って

二〇一九年

（会員への敬称略）

一、**役員**

前年に引き続き左記の役員が会の運営を務めた。

名誉会長　西川　武彦
理事・会長　清水　勝
理事・副会長（総括）　安藤　晃二
理事・副会長（総括）　大越　浩平
理事・運営委員長　宍戸　三春
理事・事務局長　志村　良知
理事（広報・渉外）　首藤　靜夫
理事（財務・活性化推進）　斉藤　征雄
運営副委員長　塚田　實
会計担当　長尾進一郎
監　事　池田　隆

二、**年度方針**

1、会員の増強
特に六十歳代の入会促進
2、更なる活性化を目指す
月例会参加者三十五名以上
分科会の更なる発展、活性化

三、**各月の活動報告**

一月例会（十五日）

・新年落語会＝立川ぜん馬師匠
『井戸の茶碗』
落語に関する質疑応答
・新年会（十五日）
会員三十九名、ゲスト五名参加。

二月例会（二十一日）

・会員講演＝西川知世
『俳句の縁・人の縁』
・二〇一九年版会員名簿確定配付 会員数六十五名。
・第十一回何でも書こう会熱海合宿（十四・十五日）

三月例会（二十一日）
・会員講演＝村谷卓一
『地域伝統文化継承活動』に対する助成活動
・新会員＝澤田陽太郎
四月例会（十八日）
・ゲスト講演＝博雅会・岩佐堅志氏以下三名
篳篥・龍笛・笙による雅楽演奏と朗詠
雅楽・『平調調子』『越天楽』『陪臚』
朗詠・『嘉辰』
・『悠遊』二十六号配付
・逝去会員（八日） 鳥海博さん
令和元年
五月例会（十六日）
・『悠遊』二十六号合評会。
・新会員＝吉田眞人
六月例会（二十日）
・会員講演＝都甲昌利
『四つの国に住んで』

七月例会（十八日）
・ゲスト講演＝鮫島純子氏（エッセイスト）
『祖父・渋沢栄一に学ぶ』
八月（夏休）
・逝去会員（二十七日） 濱田優さん
九月例会（十九日）
・ゲスト講演＝森忠彦氏（毎日新聞社）
『EUに学ぶ外国人労働者の問題点』
十月例会（十七日）
・ゲスト講演＝現役国際線CAさん
『CA生活を経て感じたこと』
・ペン川柳の会＝湯河原・真鶴遠足＝（三十・三十一日）
十一月例会（二十一日）
・会員講演＝大塚喜子
『連合赤軍「あさま山荘事件」余滴』
・ペン俳句会＝箱根仙石原一泊吟行（四・五日）
十二月例会（十九日）
・会員講演＝清水勝
『私のキャリア教育・キャリアコンサルタント』

・ペンフォト句会＝令和二年カレンダー発行

・退会会員＝阿部典文さん、倉藤金助さん

（いずれも十二月）

二〇一九年は、会員数六五名でスタートした。期中、鳥海さん、濱田さんと二人の会員が長逝された。鳥海さんはサロン21の論客として活躍され、膨大なデータを駆使し、鳥海経済学ともいえる独自の経済論を展開された。濱田さんは何でも書こう会と掌編小説勉強会の重鎮で、柔らかなユーモアに包まれた作品を発表された。また、女性勧誘の名手で、女性会員獲得に貢献された。ご両名の冥福をお祈りしたい。

発足三十一年、創設期からの会員はさすがにいないが、ベテラン会員はやはりお年を召し、企業の雇用形態が変わり六十代はまだ働き盛りとあってリクルートはままならず、高齢化はどうしても避けられない。

昨年には会長方針により、活性化プロジェクトが設置され、会の運営と各勉強会の活動運営、見直しを行い、各勉強会は盛会が続いているが、毎月の月例会への出席者が減っているという厳しい現実もあり、新会員の獲得もなかなか難しい。

この中での光明は女性会員で、会の運営も含めて我が会も会の名前に反して女性無しでは考えられなくなってきている。

来たれ六十代、そして女性たちよ。

（事務局長　志村良知）

氏　　名	主　な　活　動　分　野
高橋　由紀子	俳句
田中　みづえ	エッセイ、俳句
田原　　　敬	書こう会、エッセイ
塚田　　　實	書こう会、掌編小説、川柳、絵
都甲　　昌利	書こう会、エッセイ
富岡　喜久雄	書こう会、エッセイ、掌編小説、英読会、読もう会
内藤　真理子	書こう会、エッセイ、掌編小説、読もう会、俳句
長尾　進一郎	書こう会、俳句、フォト句
中村　　晃也	書こう会、俳句、フォト句、写真
西川　　武彦	エッセイ、掌編小説、サロン２１、川柳、写真
西川　　知世	俳句、エッセイ
新田　由紀子	書こう会、読もう会、俳句、フォト句
野上　　浩三	書こう会、掌編小説
野瀬　　隆平	書こう会、掌編小説、サロン２１、読もう会、写真、他
馬場　真寿美	書こう会、エッセイ、掌編小説
浜口　須美子	エッセイ、写真
浜田　　道雄	書こう会、エッセイ、読もう会、川柳、写真
原田　　　信	エッセイ
平尾　　富男	川柳、書こう会、掌編小説、サロン21、フォト句、他
廣澤　　重穂	掌編小説、エッセイ
福本　多佳子	読もう会、掌編小説、絵、
藤原　　道夫	書こう会、エッセイ
細谷　　　博	川柳、エッセイ
松浦　　俊博	書こう会、エッセイ
松谷　　　隆	書こう会、エッセイ、掌編小説、読もう会、川柳
松田　　昌康	フォト句、エッセイ
三　　　　春	書こう会、エッセイ、川柳、フォト句
村谷　　卓一	書こう会、掌編小説、俳句
森田　　晃司	サロン２１、英読会、エッセイ
八木　　信男	エッセイ、川柳、絵、会員談話室
矢澤　　正二	エッセイ、フォト句、写真
山縣　　正靖	エッセイ、サロン２１、川柳、絵
吉田　　眞人	書こう会、エッセイ

会員名簿（五十音順）

氏　　名	主な活動分野
浅井　壮一郎	書こう会、サロン２１
新井　良侑	エッセイ
安藤　晃二	書こう会、英読会、俳句、川柳、フォト句、他
池田　隆	書こう会、エッセイ、サロン２１、読もう会、フォト句
市川　忠夫	書こう会、英読会、サロン２１
稲宮　健一	書こう会、エッセイ、川柳、
岩崎　洋一郎	川柳、エッセイ、会員談話室
上田　信隆	サロン２１、俳句
上原　利夫	書こう会、エッセイ、サロン２１
鵜飼　直哉	エッセイ
内田　満夫	書こう会、エッセイ、会員談話室
大泉　潤	書こう会、英読会、俳句
大越　浩平	書こう会、エッセイ、フォト句
大津　隆文	書こう会、エッセイ、俳句
大塚　喜子	掌編小説、読もう会
大月　和彦	書こう会、読もう会、フォト句
大平　忠	書こう会、エッセイ、サロン２１、会員談話室
大野　昰	川柳、エッセイ、サロン２１
大森　海太	書こう会、エッセイ
川口　ひろ子	書こう会、エッセイ
川村　邦生	エッセイ
木村　敏美	書こう会、エッセイ、絵
金京　法一	エッセイ、サロン２１
児玉　寛嗣	書こう会、掌編小説
斉藤　征雄	書こう会、エッセイ、読もう会、俳句
清水　勝	書こう会、エッセイ、掌編小説、読もう会、フォト句
志村　良知	書こう会、エッセイ、読もう会、俳句
下山　健夫	サロン２１、英読会、フォト句
首藤　静夫	書こう会、読もう会、俳句、絵
杉浦　右藏	エッセイ、サロン２１
曽山　清德	英読会、川柳

編集後記

▽今年は年明けから、新型コロナウイルスの感染が世界的に広がり、人びとを不安に陥れています。ＡＩだ何だと言っても、所詮人類はそれほど進化しているわけではない、ということを実感させられます。『悠遊』は今号から、松浦編集委員のセンスで表紙の題字を一新しました。木村さんの絵も斬新で全体が新鮮な印象になったのでは、と思います。今号も、いい出来栄えの『悠遊』になったと喜んでいます。（斉藤）

▽福本多佳子さんが編集から抜けたあとを三人で何とかやってきました。今号は「特集テーマ」をなくし、すべて自由テーマにしました。それだけ話題も広がって楽しいものに仕上がっていれば嬉しいです。絵・写真部門は大阪の八木さんと矢澤さんに初参加していただきました。新しいイメージが加わったと思います。（首藤）

▽今年も、皆さんの力作をじっくり読ませていただきました。名文もよし悪文もなおよしと考える私には、色々な作品に出合って刺激を受けることが楽しみです。表紙の書は悠と遊の字形を統一しました。書と絵はそれぞれ別のものながら互いに調和することを願っています。木村さんの素晴らしい華やかな絵を、地味だが力強い書が支えていればいいのですが。（松浦）

企業ＯＢペンクラブ同人誌

『悠遊』第二十七号

二〇二〇年四月十五日発行

発行者　企業ＯＢペンクラブ会長　斉藤征雄

印刷所　新灯印刷株式会社
東京都新宿区水通町二―一五（〒一六二―〇八一一）
TEL　〇三―三二六〇―九二六一

連絡先　企業ＯＢペンクラブ事務局　首藤静夫
神奈川県川崎市高津区瀬田一一―二三（〒二一三―〇〇〇三）
Ｅメール：shutou512@c01.itscom.net
クラブＵＲＬ：http://www.obpen.com

口座　三菱ＵＦＪ銀行海老名支店（４０９）
企業ＯＢペンクラブ（普通　１０８６０９６）

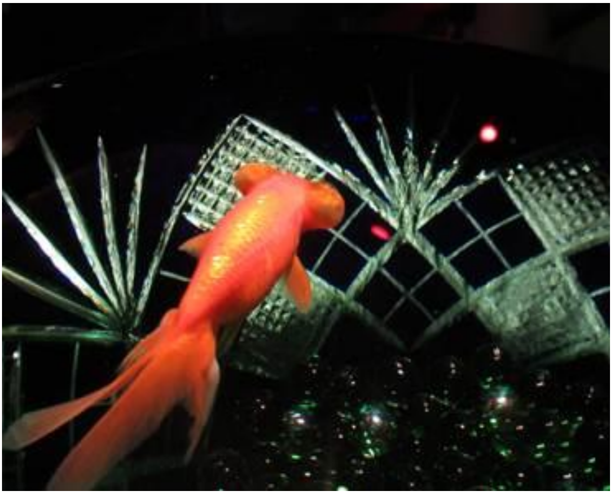
ペン フォト句 ②

鞍馬山
奥の院まで
蝉しぐれ

松田　昌康

無重力空間
遠い星目指す

中村　晃也



ロンドンで
雨乞いするとは
濡れたがり！

平尾　富男

ペン フォト句 ③

朝までの
雨風も止み
秋夕焼け

矢澤　正二

隠れ路
不思議の国へ
誘い込め

三　春

今日を愛づ
銀杏黄葉の
鉄路かな

安藤　晃二

ペン フォト句 ④

冬の日に
影落としたり
垂の紋

下山　健夫

寄らば斬る
雀ビックリ
実るイネ

清水　勝

行き暮れて
犬も傘欲し
牡丹雪

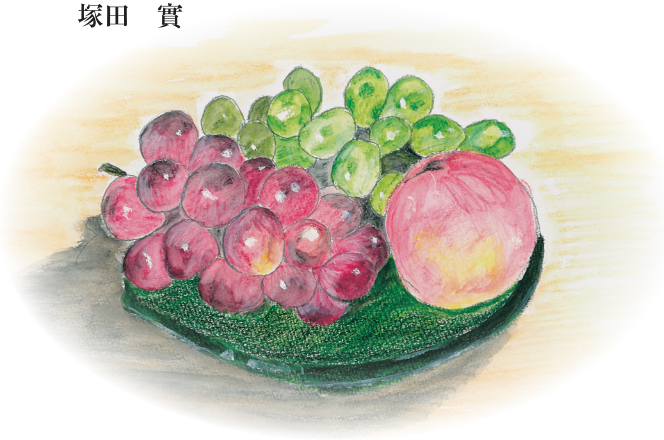
新田　由紀子

ロゼの空　鎮守の森は　冬木立

大越　浩平

塚田　實

安藤　晃二



八木　信男

福本　多佳子

首藤　静夫